

狩人と舞う白銀の翼

睦月透火

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

予備知識やバトルは少なめの、ほのぼの（？）系

モンスターハンター（w）始まります。

※ 戦闘描写は少なめの予定です……

オリ主は転生先を知りません、従つて予備知識もナシ。

なお、古龍種ですが、無双はしません（平和主義）

また、一部の原作キャラは勝手に命名されます。

最後に、どこまで続くかは読者さまの応援次第です。

（＊－の人） 感想・アンケ参加ヨロシクね♪

目

次

序章：冥府の灯火、再誕

誕生

名前

自分

共存

遭遇

雪路

環境

歴戦

接触

コラボストーリー「風と共に翔ぶ」

74

65

56

49

41

32

23

18

12

1

死骸

深淵

搜索
(後編)

搜索
(前編)

過去

伝承

強襲

冰龍

伝授

案内

共闘

邂逅

同類

206 197 187 179 171 160 148 134 125 116 102 93 84

異変

死闘	急襲	
兆候		
覺醒		
コラボストーリー 「赫と白の円舞曲」		
閑話・奇しき赫星との遭遇	—	
閑話・天彗龍（セツラ）と冥灯龍（シオノヒラタ）	252	
閑話：獏猛化と呼ばれる脅威	270	
閑話：赫星、空を切り裂いて	276	
	228	220

序章・冥府の灯火、再誕 誕生

……私が「転生」したのは間違いない……前世の記憶は無いけど、認識がヒトと同じだという事はすぐに判つた。

今、私は最初に私を見付けた男の人の腕に抱かれて、薄暗い洞窟の中に流れている川を渡つてゐる……私はたぶん、ヒトとは違う生物に生まれ変わつたのだろう。

私を見る彼の眼は、ヒトの子を見るその眼とは明らかに違う眼だから……しばらくして、彼は人外の生物である私を外へ連れ出す事にした様だ……だが私は、それまで物凄く困つた顔をしていたのが非常に気になつていた。

生まれたばかりの私が、一体何をしたと言うのだろうか……？

……最初に見たのは、逆さまになつた世界と……1人の男の人だつた。

彼は最初、物凄く驚いていた……何に驚いたのか、私にはサッパリ理解できなかつたが。

「……まさか、こんな事が……信じられない……！」

生まれたばかりの身体は、上手く力を込める事も出来ずにズルツと何かから抜け落ち……硬い地面へ私は投げ出されてしまう……痛くもなんとも無かつたけど。しばらくもがいてると、ようやく全身に力を込められる様になり、ゆっくりと立ち上がりになかった。

というか、ハイハイ状態が精一杯で上手く立ち上がれない……逆さまだつた視界は元に戻つたけど、目線は低いまま……やがて、徐々に近付いて来た彼の足元だけしか見えなくなり、その後少し間が空いて……唐突に抱き上げられた。

「……思ったより、小さいな……」

うん、私もそう思つたよ……だつて私の両手（？）が届く距離の彼の顔は大きいんだもん。

サイズ差からすると、今の私は抱き抱えるタイプの巨大なぬいぐるみ程度しかないと思う……ふと、改めて自分の姿が気になつて自分の身体を隅々まで見回す……

わりと長い尻尾と大きめの翼……ああ、やつぱり人外なのね今の私。

それに、細身で指が長い両手……いや、この場合は前足だろう……鱗や甲殻というやはり、細かい鱗が重なり合つて、逆に滑らかでスープの様な仕上がりの皮膚（？）を纏つている……自分で触つて見たところ、頭から後ろ向きに生えた角もある……

抱き抱えられた事で何となく安心感を感じたのか、まだ上手く身体を動かせないから

か……私はそれまでの思考も置き去りにして、彼に抱かれたまま眠つてしまつた。

「……さて、コイツをどう説明するべきか……」

「そんなもん見たまま、ありのままで良いだろう?」

そう言つた彼と違う別の人の一言が聞こえた時、その気配と声にビックリして私は鳴き声を上げた。

自分で鳴いておいて何だか可愛い、と思つたのは内緒である……

「おつと、起きた様だぜ?」

「起こした、の間違いだろう……だが、ちょうど良い……」

ビックリ覚醒した私を再び彼が持ち上げ、小舟の操舵をしていたもう一人の強面の男の前に差し出される。

恐怖は感じないが、何となく近寄り難い……立派に髪の毛と繋がつてゐるアゴヒゲと、ワイルドな顔立ちの中年オヤジそのものの様な男の人だ。

「……ふうむ、見た目はあの時の奴にそっくりだ……小さい以外はな?」

どうやら、私の同族を前に見た事があるらしい……しかし、ちつちやいと改めて言わると少し傷つくなあ……

不満だと言わんばかりの鳴き声が私の喉を鳴らす……おつと、感情が直で出てしまつ

た

その声にガハハとヒゲオヤジは笑い出し、抱いていた彼もフフフ、と堪えきれなかつた。

そのリアクションに私は不満度を上げ、ヒゲオヤジを引っ搔こうと前足を伸ばす……その動作に「おおつと、こりや機嫌を損ねちまつたか」と笑いながらヒゲオヤジは小舟の操舵に戻つた。

まつたく……いくら私が人外でも、ちゃんと感情はあるんだからね

彼らと共に、結晶の洞窟から出た私の眼に写つたのは……どこか見覚えのあつたり無かつたりする多種多様な生物たちが生きる世界だつた。

「外のウラガンキン共には、まだ気付かれてねえ……今之内にキャンプまで移動しよう、アイツ等があつちに渡る前で良かつたぜ……」

「そうだな……できるだけ急いで戻るとしよう」

新大陸……この中では常識を覆す程の様々な生態を持つ生物達や、滅多に見られない古龍種すらも数多く見かけられている……そして以前にはゾラ・マグダラオスなる巨龍が、龍脈の地でその生涯を閉じようと現れたが、その影響はこの島全体を地獄に変える

程の被害をもたらす為、島を拠点とする調査団に属する5期団ハンター等の活躍によつて進行ルートを変えさせ、島の被害を見事に回避できた……

だが、その後も数々の古龍出現を始めとした異常現象は収まらず、古龍「ネルギガンテ」や、龍脈の収束地で生まれし龍「ゼノ・ジーヴア」など、異常現象は多発していく……

しかしそれも、5期団のあるハンターによつて調査と解決に成功し、新たに見つかつた「渡りの凍て地」へとその足を伸ばす直前……龍人のハンターによつて発見された難題が、調査団の手に委ねられるのであつた……

「ううむ、コレは……」

「……どう思う？　さすがに放置は出来なくてな」

「まさかこのサイズが……」

彼に抱かれたまま連れて来られたのは、人がたくさん居る場所……この雰囲気つて、村つて感じだよね……何かの拠点的な雰囲気はあるけど、そのほとんどが野晒しつて……何か意味あるのかな？

「とにかく、コイツが奴と同種である事は間違いねえ……妙に人慣れしている様だが」「とても興味深いですね……古龍種は基本的に人に対して強い敵愾心を示すものです

が……

この個体は人に対してさほど嫌悪もなく、時折興味すら示しています……突然変異なのか、単なる好奇心なのか……」

「……これまで間近で古龍を見るなんて、研究者にとつては奇跡と同じ価値がある……総司令の許可が出るなら、隅々まで調べ尽くしたいのう」

研究者の老龍人の言葉に、苦い顔をする一同……

どんなサイズとはいえ、相手は古龍……どんな事で機嫌を損ね、人に危害を加えるか……そんな事は想像したくもない

しかし、当の本人（龍）は急遽片付けられた会議用の大テーブルの上で呑気に欠伸をしていた……するとそこに1人の狩人がやつて来る

「爺ちゃん、アステラが何かヤバいとか聞いて来たんだ……が、何なんだ？」

「……ん？ コイツ、子供の竜か？」

総司令を爺ちゃんと呼ぶ彼は調査班のリーダー……彼はここアステラで産まれたハンターだ

総司令の孫として新入りのハンターや若い研究者達を率い、新大陸の北に新たに建設された拠点「セリエナ」を預かり活動している……だが、アステラから異常事態の報せを聞き、居ても立つても居られず飛んで来たのだ

「聞いて驚くなよ、コイツは古龍……大団長や5期団の彼と鬭った、あのゼノ・ジーヴアの幼体だ」

「ゼノ・ジーヴア…………」

驚愕を隠しきれない調査班リーダー、彼はゼノ・ジーヴアを見た事は無かつたものの、直接死闘を演じた5期団推薦組のハンターや大団長の話を聞いていた為、その強さや恐ろしさはある程度の予測を建てていた……だが、目の前のテーブルに居座る同種は、その恐怖はおろか古龍本来の威圧感も、威厳の欠片も無い……首をもたげ、時折眠そうに欠伸をし、周囲の喧騒にたまに反応するだけ……

「……ゼノ・ジーヴアは新種の古龍だ、生態の一切が謎に包まれている以上、下手に手出しあれども……とは言え、当のコイツ自身がこの有り様だからな……」

総司令の言葉に、苦い笑い顔を禁じ得ない一同……

当のゼノ・ジーヴア幼体こと私は、全員からの視線に疑問符を浮かべるのであつた。

あれから数日が経ち、私は調査拠点であるアステラのすぐ側にある古代樹の森で過ごしている

日中は専ら海岸近くで日向ぼっこをしながら、時々来る研究者の相手をしたり、興味本位で覗きに来るハンター達の視線を独り占めしていた

……？ 近くにドスジャグラスが居るでしょつて？ 彼らは私にぜえつたい近付かないんです……私は普通にオトモダチにでもなりたいのに、何を思つたか私が近付く度に住処を移動させていき、遂にはこの地域から出ていく始末……（・・ω・）ショボーン

「……居ました、彼処です！」

遠目から聞こえてくる声……底抜けに明るそうな女性特有の高めの声色が響く足音と共に来たのは、一組の男女だった。

「……古龍ゼノ・ジーヴア、再び出逢う事になるとはな」

女性の方は分厚い書物を小脇に抱えながら私を観察し、1人で唸つたり書物を手に書き込んだりしている

一方の男性は隙の無い気配を発しながらも、片割れの女性の行動にやや呆れ顔であつた

（……）の人達、今までの人と違う……

私は素振りこそいつも通りのまま、誰よりも強者たる雰囲気を出す男をじつと見つめる

「ニヤ、ご主人の事をじつと見てるニヤ……」

視線に割つて入る猫……アイルー、だつたつけ……彼らは狩りの協力者として、人類

と深い関わりがあるらしい

私は人間からすれば脅威となる古龍らしいけど、私個人としては人間とは仲良くなりたい……私は、彼らアイルー達を見習う事で同様の立場を得られるのではないかと考えた

ならば、彼らとコミュニケーションを図るのが第一段階かな？

『……不快なら謝る、私……見るもの全てが初めてだから』

「ニヤ?! オマエ、話せるのかニヤ?!」

『貴方達の言葉は理解できてるわ……』

「ご、ご主人!! コイツ、言葉が判るのニヤ!!」

「何だ（です）つて?!」

アイルーの報告に驚く男女……どうやら、古龍とは今までコミュニケーションすら出来た試しすらなかつた様だ……そりや驚きますよね

で、また私は人だかりの中心になつた訳ですが……

「アイルー達だけとはいえ、相互に会話が成立するとはな……」

「5期団所属のオトモによれば、我々の言葉自体は認識出来ていいとの事……簡単な指示なら、機嫌を損ねない範囲で聞き入れて貰えるかもしだせん」

「古龍との直接コミュニケーションが可能になれば、我々の調査の難易度もグッと下がる

……それ専か、今まで謎だつた生態の解明に兆しが見える……こりやあ大事じやな」
私が人の言葉を発する事は出来ないが、私の言葉はアイルー達には届く様だ……
ちなみに私は人間の言葉はちゃんと理解している、何となくだけど価値観や感覚は人間のソレに近かつたからね……他の個体がどうなのかは知らないけど。

「兎も角 この個体は我々の言葉が理解できる……ならば言葉は譁まんとな?」

総司令のおじさんは、私の言語理解能力を気にして誤解や不快感を与えない様に言語統制を敷くらしい……価値観の相違があるならまあ当然だけど、価値観ほぼ一緒だからなあ……

個人的には友達感覚でフランクに話して欲しいかなあ

「オマエ、普通の古龍とは何か違うのニヤ」

『……私には、古龍の常識の方が判らないわ……現に私は、アナタ達への嫌悪感なんて感じないもの』

「そうなのニヤ?」

『……種族的価値観、と言うのかしら? 私には、アナタ達の価値観の方が好ましく思う

のよ』

「じゃあ、ボクとオトモダチになつてくれるかニヤ?」

『そうね、私が何の役に立つかは判らないけど……アナタ達とは、良い付き合いが出来
そうですもの』

大雑把な意識誘導みたいな手順を踏みながら、私はヒトと共に暮らすアイルーとオト
モダチになつた……私にとつては初めてのオトモダチ……名前はタマ、と言うらしい
猫（アイルー）だから？ 安直過ぎて私は必死に笑いを堪えた。

「……予想以上に上手く行つたな……いや、この個体がそうしたかつたとでも言うのか
……」

「何にせよ、これでも我々と敵対する意思はない事も証明できた……次はコミニュニケー
ションを深め、謎の解明にも移りたい所ですな」

老龍人の研究者は期待に目を輝かせている……が、私には古龍の常識とやらはほとん
ど分からぬ……まだ私は、産まれてまだ日が浅いしね
「……なあ、コミニュニケーションを取るのは良いんだが……コイツの名前は、どうする
？」

どうやら次の難題は、彼らの人間性と良識を試すモノらしい……

名前

「あの幼体に名前を……？」

5期団推薦組の編纂者である女性……クリスから提案されたのは、件の幼体ゼノ・ジーヴァに呼び名を与えたい、というものであつた。

「はいっ♪ もちろん、許可頂ければ……ですが」

クリスは5期団推薦組に所属……かつてゼノ・ジーヴァとも激戦を繰り広げ、「青い星」と評される凄腕ハンター……レクスを相棒とする編纂者だ

クリスの総司令へ直に嘆願する姿に、やや呆れ顔のレクス……

だが総司令も一考の余地ありと考へ、小規模ながら会議にて決定をする事とした。

何やら、またあの人達が騒がしい……私に名前を……ですか？
気に入らなかつたら全力で拒否します。

今日はアステラの料理長と呼ばれてる強面のアイルーから「たまにはココで飯、食つてくれか？」と、声を掛けられた……そう言えど、私はここ数日食べ物は食べてない。

そもそも私は、物を食べれるのかも良く分からぬ……一応、生物として分類されて

はいるものの、私には飢餓を感じる事は無かつた。

時々、アステラのハンター達が料理長の食事を食べている光景を見ていたが、中身は

気になるものの、自分も食べたい……という願望や発想は浮かばなかつた。

「お前さんの好みは俺には分からん、だからいつも通りの奴を作つた……気に入つたら遠慮無く、食つてくれ」

さすがに此処まで用意されたら食べない方が失礼だと感じた私は、思いきつて料理長の自信作を食べてみる事にした……

……違和感は、無い……味を感じるか？ 上手く表現出来ないが、不味いか旨いかとするなら、間違いなく後者だ……

どうやら、私の味覚は古龍でありながら人間とあまり変わらない様だ。

それを聞いた料理長は安堵の表情を浮かべたが、それもすぐさま元の厳つい顔へと戻る

「おう、次はお前さんのリクエストを待つてるぜ」

何気に次回の約束を取り付けられてしまつた……まあ、良いか……ハンター御用達の
アイルーキッキン、私も貢献できるなら広告塔扱いでも問題ないと思えた。

料理長の猫飯を食べてから、何だか無性に身体が疼く……

……別に鬭争本能に目覚めたとかではない……断じて。

上手く表現出来ないが、何となく……動きたくてしようがないのだ

そう言えばと思い出したのは、観察していたハンター達……猫飯を食べると、揃つて

ガツツポーズを取り……想定以上の成果を持ち帰る事が多かつた……

なるほど、猫飯の効果とは「身体能力や、意欲の活性化」を促すのだろう……
その効果でもつて、ハンター稼業の成果が上昇傾向にあるのだ、という私の仮説も成
り立つ……最も「腹が減つては戦はできぬ」という言葉があるのを思い出して、仮説を
自らぶち壊したのだが。

それは兎も角、この衝動をずっと抑えておく訳にはいかなかつた……ハンター達には
ちょうど良い効果だつたのだろうが、古龍である私にとつては……些か効き過ぎている
のかもしねれない……

ふお……やつぱい……メツチャ飛びたい……いや、そもそも飛べるんだつけ私？　体
格に見合つた翼はあるけど、今まで歩く（？）事しかしてないし、ろくに翼を動かした
事も無い……せいぜい研究者を相手にしている時、運悪くアンジャナフが襲つて来て
……威嚇ついでに前足と翼を器用に動かして川の水をぶつ掛けるという嫌がらせに及
んだくらいだ……

もうほとんど意識せずとも翼が動き、衝動はもう抑え切れない……意を決して龍らし

く翔ぶ事をイメージする……するとあれほど無茶苦茶に慣れそだつた翼は、私のイメージ通りに挙動をトレース……瞬く間に地上から離れ、古代樹の巨木達の隙間を抜け、最も高い所にある高台みたいな場所を見下ろす程の高度まで昇つてしまつた

……うん、メッチャ気持ち良い……これが「翔ぶ」という事、これが空を征する感覚……鳥や他の竜達が行き交う空間……まさに感動である。

氣を良くした私はその勢いのまま、森から続く道を辿り……人間達が暮らす場所、アステラの真上まで移動する。

そして地上の人達が私を認識できる位の高度まで下げた……気付いた人達は慌てて他の人を呼び集め、すぐさま人だかりが出来てしまう……そんなに私が飛ぶのが驚き? 最初から飛べる翼持つてたんだけどなあ……?

一頻り空の散歩を楽しんだ後、港のエリアからアステラに戻る……

……空中散歩から戻つた私を待つていたのは、物凄く複雑な顔をした総司令のおじさん以下、お偉いさん達が雁首揃えて並んでいた。もしかして……私、やらかしちゃつた……?

「やはり飛んでいたのは我々の内情を把握する為だつたんです!!」

「単にヒマを持て余してただけじゃないのか?」

「古龍の思考はやはり、我々の常識の外にある……間違つても下手に刺激してはならんぞ?!」

「やつぱり俺らの事が気に入らないから、一網打尽にする方法を求めてたんじや……！」

「伝説の黒龍みたいに、空からブレスで全てを吹き飛ばす氣だ……お、恐ろしい……」

「ちよ……言い掛かりい?! なんで私が飛んでもただで見限つただの滅ぼす氣だなん

て宣う訳え!? そんな気なんて更々無いわよ!! つていうか猫飯貰つていい感じに上

がつたテンションがそのせいであの底に錐揉み落下してんですが一体どうしてくれん

のよ!? それに最初に私、言つたよねえ?! 他の古龍の事なんて知つた事か!! 私は初

対面の人を敵意満載で消し飛ばそうとするあんな薄情な異常進化トカゲ共と一緒にし

ないでよ!? 料理長からゴハン貰つてマジ美味うまかつたからテンションアゲアゲで舞い

上がつてそのまま遊覧飛行してただけなのにい～!!

「……ニヤ、こう言つてるニヤ」

可愛らしい龍の幼体が必死の泣き声アピールを続けていた最中……リアルタイム言語変換という高等スキルを見事に発揮したタマによつて、私の心の声もとい必死の弁解が、一字一句の漏れなく全て白日の下に晒された……しかも、訴えた当の本人（龍）は

その全てが完全に終わつてから状況を理解してしまい、あまりの羞恥と後悔に苛まれ……お立ち台もとい会議場のテーブルへ突つ伏したのは、愛嬌である。

自分

冥灯龍 ゼノ・ジーヴア……

新大陸の奥地、龍結晶の地にて確認された完全新種の古龍。

新大陸調査団所属の5期団推薦組ハンターによつて存在を確認……その生態から底知れない脅威を危惧され、討伐された存在。

再び現れたのは……運命の悪戯か、それとも大自然の与えた試練か……

はい、そのゼノ・ジーヴアである私……ただいま『心が裂傷状態』です。

昼間にやらかした事でアステラの全員から「変わった古龍」の称号を認められ、怯えられる事は無くなつたけど……代わりに生暖かい眼で見られる様になりました……あと、餌付けも増えた。

確かに端から見ればこのサイズで凄んでも、ハンターからすれば精々「小型モンスター」としか思われず……例え古龍の戦闘能力がいくら強かろうが、中身は戦闘のせの字も知らない私である……ぶつちやけ古龍の能力どころか「試しに……」と剣を向けられた時点でビビつて身体がすくみ『どう聞いても可愛い甘え声』で許しを乞う行為を

……皆の前で脊髄反射してしまった

ガチバトルになつたとしても、私に勝ち目は無いだろう……

そんな訳で私はアステラの住人ほぼ全員に「敵対しない」と認知され、ハンター達に可愛がられる子豚みたいな生き物「ブーギー」とほぼ同レベルの扱いを受けていたのだつた

『誤解は解けたけど、マスコットとはいえた豚と同レベルなのは認めたくないわ……』
なので私は、ハンター達が使うトレーニングエリアでこつそり練習をしている……何の練習つて？ もちろん自前の技だ！ 聞けば古龍とは天候すら操る程の能力を秘めており、私はゼノ・ジーヴァも例に漏れず強力な技があるらしい

……そう教えてくれたのは、あの強面オヤ……もといあの人、大団長さんだつた
それ以降私は、少しでも古龍らしさを掴むべく……ルームサービスのアイルー、タマの協力を得て修行を積んでいる

しかし、どんな技か……等を事細かに教わつた訳ではなく、あるか無いかを聞いただけなので修行方法は完全に手探りである。

しかも私と同種の討伐経験者は5期団の彼……レクスしか居らず、彼は今……新たに発見された「渡りの凍て地」に建造中である「セリエナ」の安全確保に出向いている為、

肝心な技の概要すら教えて貰えない……大団長も「とにかく光つてたなあ……後は爆発音が凄かつたな！」である……直に見てた訳では無いのね……

「ニヤー、こんな感じの動き方だつたニヤ」

『……やつぱり、口から何か吐いてたの？』

「もの凄い光つていた、そして当たつてた地面が赤くなつたつてタマは言つてたニヤ」
なので私はタマに前のゼノ・ジーヴア戦を語つて貰つたという、ルームサービスのア
イルーに内容を教えて貰いつつ、自身の技を思い描いている

古龍のほとんどが口から何かしら吐く技を持つてゐる事から、私にもあるのではない
か？ という推測を立て、ルームサービスに聞いていた所だ……案の定、それらしき技
が特徴だつたらしく、洞窟内で矢鱈と撃ちまくつていた為か印象深く映つた様だ……形
容すると「火の玉」や「空気の弾」ではなく、「凄まじい熱量を持つた光そのもの」を吐
いていたと言う

……ロボゲーによくあるゲロビ？まさかとは思つたが、聞いた事に合致する光を伴
う技となるとそれしか無い……もしそれが事実なら、ゲロビ乱射できる程のエネルギー

をこの身体は確保ないしは保有できるという事である……ダウンサイジングされても、その性能は有効なのだろうか？

深く考えても答えは出ない、可能か不可能かと言うなら、事例がある以上可能なのだろう……実は私の戦闘能力ってめっちゃ強い方？

それ以外にも、前足を地面にめり込ませ爆発を引き起こす……ゲロビだけでなく、単発の光弾やその連射……怒るとその破壊力を爆発的に高めていた、等と言われた時は、目の前が真っ暗になつた……なんだその破壊神は……外に出してはいけない奴ブツチギリ最上位の所業じやないですか～やだー

どんな超絶生物よ、ソイツ…………私だわ（ドン引き）

その頃、当のゼノ・ジーヴアとの戦闘経験がある5期団推薦組、レクス達……

渡りの凍て地に建設された拠点「セリエナ」の安全確保として、「凍魚竜ブラントドス」の狩猟を始める……その際に、現住の獣人族ボワボワと知り合い……協力してブラントドスの狩猟を成功させ、共存関係を築いたのだつた。

「相棒、あの幼龍の事ですが……」

「アイツの名前か？俺はそういうのが苦手だからなあ……」

「でも、あの子を一番知つてるのは相棒ですよ？何かしら取つ掛かりくらい……」「うーん、光を吐く……ゆらゆら揺れる幕のようなもの……透き通つた鱗……灯火の様な赤い胸の光……」

「脈絡無く特徴を並べてますが、ちゃんと考へてますか？」

苦笑いでクリスの追及をはぐらかそうとするレクス、編纂者として相棒と組んでいるクリスとしては、もう少ししつかりと考へて欲しいと思つていた……

例え、種として相容れない存在だとしても……今この時だけは、自分達と歩みを共にしてくれているのだから……失礼な真似はしたくない。

「相棒、ふと思つたんですけど……あの子、言動は女性的でしたねえ……」

「……そうなのか……古龍に性別とかあるのか？」

「私が分かる訳無いじやないですか!?」

実はクリス、密かに幼龍とは一番会話を重ねた仲であつた……情が移つた訳では無いものの、仲良くなつた相手に名前を付けるのだ……出来るだけちゃんとしてやりたい、と思うクリスなのだつた。

共存

「では、該当の古龍……ゼノ・ジーヴァの個体名をシオンとする」

数日間の協議の末、私の個体名は……シオンとなつた。

うん……まあ、良いんじゃないかな？ 少なくとも……私に不満はないよ？

そして、戦闘訓練の方にも変化があつた。

『それじゃあ……ツ！』

私は全身から口へとエネルギーの集束をイメージする……勿論イメージと寸分違わず実際に口腔内に集められたエネルギーは眩い閃光を放ち初め、低出力ながら光量の凄まじいブレスが訓練用の的である大樽の束を撃ち貫く……だけでなく、放たれた熱線は樽を瞬時に貫通し消し炭へと変え……その先にある崖に直撃し、その崖すらも赤熱化させ溶かし始めてしまう

熱線そのものの光の隙間から事態を把握した私は慌てて口を閉じ、ブレス攻撃を中断……口の中が焼けないのが不思議だが……とりあえず撃ち尽くさずに残つたエネルギーは再び全身に拡散させた。

「……驚いたな、もうブレス攻撃を習得したのか……！」

ブランドスの狩獵を終え帰還したレクスから早速、ゼノ・ジーヴア戦の詳細とその能力をじっくり聞いた私……やはり確実な情報こそ糧となる、今までの試行錯誤と合せた修行の結果、俗に言う「ブレス攻撃」……ゼノ・ジーヴア固有の光線技を習得したのである。

本家より太さは細いけど……その分貫通力は高そうだし、撃ち分け的な使い方として覚えておこうと思う

撃ち分け、と言えば……後は単発の光弾と薙ぎ払いレーザーだつけ？

身体の使い方も熟知してきた……以前からレクスと一緒に3期団の拠点に行つた時、アイルー調査団のお婆ちゃんに頼んで、アイルー達が行う「古龍種想定の戦闘訓練」に参加させて貰っていた成果だ。

「言葉が分かる、と言うのはやはり劇的だな……古龍と意志疎通が図れるのは」

全く以て同感です……嘗ての敵同士、でもあつた壁はまだ取り払われて無い……けど、レクスとも色々と会話が続くようになつた。

なお、クリスは例外……あの子、食い気先行で深く考えてないっぽいし。

「私は最初からシオンと普通に話せてたと思います……何というか、近い感じがして」

精神年齢、の話ならたぶんそれで合つてる……でも、私は花より団子ではない……決

して。

ともあれ私の名前はシオンとなり、まだ少々不安定ながら古龍としての能力の一部も会得した……もう少しスマーズに意志疎通が図れる様になつたら、オトモアイルーの様に狩りへ同行しようと思う。

……ふと、小柄とはいえ古龍が人と狩りをする光景を想像して……うん、何というか色々とヤバそう。

当分はファストトラベル担当の小型飛竜の代役という扱いでも良いかも知れない……あの子達、何気に力持ちなのよ？ 時々、重そうな防具……ウラガンギンの装備とか、重量が100kgとかありそうなハンターをロープ一本で吊るして飛んでるんだから。

さて、戦闘だけじゃなくて他の訓練もちゃんとしないとね……

そんなこんなで時は経ち……渡りの凍て地に建設された拠点「セリエナ」も本格的に始動、アステラと連携を取りながら周辺の環境調査を主に活動を本格化する事になった。

ちなみに、この時点ではレクスは「猛牛竜バフバロ」「飛毒竜トビカガチ亞種」などの獵も済ませており、かく言う私も、アステラの農場で飼育されているアプトノスを狙つ

て来たアンジャナフを、単独で撃退するという経験をしている……しつかり動きを見て
いれば、さほど苦もなく撃退出来る位には戦い慣れもした、そろそろハンターであるレ
クス達の行動をサポートする役位はやつておきたい……今までがほぼタダ飯喰らい生
活だつた訳だし、此処等で運動という名目の刺激が欲しいのも理由なのだが。

……それに、いくら古龍でも体重は気になるのです……一応、中身は乙女ですから。
適正值なんか判らないけどねっ!!

「……成る程、確かに一理ある。だが、対する君のメリットはどう捉えれば良いかな?
仮にハンターのサポートをするとして、わざわざ君がそれを行う理由は?」

モンスターとハンターの関係性は複雑極まる……だが、私はそんな今までの関係に一
石を投じる存在だ。

古龍である私の行動如何によつては、この新大陸の生態系に少なからず影響は出るだ
ろう……だが、私としては現実的かつ切実な問題の方が重要である……ダイエット成功
のコツは「継続とやりがい」なのですから。

……と、そんな裏の思いは置いといて、私は「個人的な思惑と、生き永らえている恩
があるから」と押し通し、ハンター同伴の下での外界行動許可を得たのである。

彼等としては首に鈴を付けた気持ちなのだろうが、私としては文句無い理想の活動許
可であつた……だつて単独だと、ピンチの時にハンターに頼れないもんね。

『で……出てみたのは良いけど、何も感動とか無いわね……』

「他の場所へ行けば、また違った景色が見れるニヤ」

現在、私は探索ついでに調合素材の補充に出るレクスとタマに同行して古代樹の森へとやつて来た……しかし、元からアステラの目と鼻の先にある森なので、初の外出先としては何の感傷も湧かない……

「……一応、俺が同行するなら場所を変えても良いが……どうせなら鉱石素材が欲しいな」

『おやレクスさん、さらっと要求する辺り貴方も慣れてきた様ですね……鉱石素材と言うなら、陸珊瑚の丘とか龍結晶の地ですか？』

伊達に今まで研究者の方に付き合つてた訳じやありませんよ？ 私なりに他の土地の情報やモンスターの生態とか、じっくりしつかりコツコツと学ばせて貰いましたから。

「……シオンつて、意外と頭良いんですね……驚きです」

クリスさん、この程度は人間でも普通な気がしますが……ともあれ、そうと決まれば早速移動しましようか……私なら小型のあの子達と違つて器用な前足もあるので、2人くらいは余裕ですよ？

「…………えつ？」

「な…………おいちよつと…………!?」

ハイハイ、高度が安定するまでは喋ると舌噛みますよ～？
私は2足歩行状態でレクスとクリスに接近……2人の胴装備の背中をそれぞれ左右で驚掴みにした後、少しだきくなつた体格を活用して一気に上空まで上昇した。

突然の事に戸惑う2人だつたが、レクスはすぐに諦め、クリスも上昇中は騒いでいたが、安定飛行に入ると途端に静かになつた……若干違和感はあるだろうけど、慣れれば小型飛竜よりも快適で安定した空の旅になると私は自負している……人を乗せる籠とかあれば、5人くらいでも何とかなるだろう。コレが前足の差なのだよ。

「…………お、お、お、落ちちゃうニヤ～!!」

声に気付いた私は、レクスの足に必死の形相で掴まつているタマの近くへ、クリスを掴んだもう片方の前足を持つていき、下から足場で支える様に動かしてレクスの足からクリスの方へと移動させた

「…………た、助かつたのニヤ…………」

『…………今度からは気を付けるわね』

「次からは…………くれぐれも…………お願ひする…………ニヤ…………」

漸く命の危機から脱して、ヘナヘナとへたり込むタマ…………今度からタマ用として、首

辺りに掛けられる籠でも作つて貰おうと思う

陸珊瑚の丘……完全なる陸地に、海中生息物である珊瑚が大繁殖しているという一風変わつた光景が広がる台地である

小一時間程の飛行で到着した私達は、予め設置されているという初期キャンプを空中で探していた。

『……この辺り、だと思つたんですが……』

「彼処です、左前方……巨大珊瑚の上」

さすが編纂者、物事を余す事なく記憶するため観察力はば抜けてますね……

クリスの指摘通り、左にあつた巨大珊瑚の上に初期キャンプのテントが見えた……滑空から滯空へと切り替えてゆつくりと移動しながら、降下し着地する私……今の私は人間より少し大きめの体格まで成長したが、このキャンプ地には十分な猶予スペースがあるため苦もなく着地できた

着地後、上半身を少し屈ませて前足の2人を立たせて降ろす。

「……古龍に連れ回される、というのも貴重な経験でしたね……あまり味わいたくは無いですけど……」

「……俺はそもそもなかつたな」

コレは多分、レクスの経験に似たような状況が多かつたからであろう……ハンター達は、飛竜種の狩猟中……しがみついた状態で飛行されるという経験が少なからずある

実際に私も、古代樹の森で偶然……雄火竜リオレウスと戦うレクスの動き、その一部始終を観察していた時に見たし

命綱なんて無い、自らの手足とクラッチの鉤爪だけで飛竜(リオレウス)にしがみつくハンター……レクスはその時、あろう事が武器を手に取りしがみついたまま攻撃までやっていた……慣れというのは時に恐ろしいモノである、と私はその時に学習した。

『そうですか……おや？…………少し、天候が悪くはないですか？』

何だか、聞いていたより雲行きが少し悪い気がする……肌が何だか湿っているような、何となく身体が少しだけ重い様な感覚も……

「…………そうか？俺は何も感じないが……」

「…………確かに、雲行きは何だか怪しいですね」

ハンターであるレクスは、環境の変化に対応し過ぎたのか……感覚的には何も変わらないと感じたが、古龍である私と非戦闘員であるクリスは、敏感に何かを感じていた「…………まあ、邪魔なモンスターはあまり居ない様だし、天候が悪いだけだろう……山の麓まで移動して、鉱石採集に向かおうか」

「その間に、私達はキノコやツボアワビとかも集めましょう！」

『アステラの料理長さんの依頼、ですね？　忘れていませんよ』

「なんだ……なら、道中から採集祭りだな」

「籠一杯になれば依頼完了ニヤ、探しまくるのニヤ～！」

徒步でゆっくりと山の方を目指しながら、2人と2匹は採集活動を開始した……

その光景を、最も高い珊瑚の頂上から眺める巨大な影は……吹き抜ける風の音と、何処からともなく響く水のせせらぎをBGMに、人間と行動を共にする1体の古龍の姿をその目に焼き付けていた。

遭遇

天候不良な陸珊瑚の丘で……レクス達一行は採取活動をしながらゆつくりと丘を移動していた

『……不思議な丘ね、珊瑚つて海の中の植物なんですよ?』

「ああ、だがこここの珊瑚は陸地に生息してる……異常と言えば異常だよな」

初見であるシオンの質問に答えを返すレクス、そこにクリスは少し違った目線の意見を述べた

「こここの陸珊瑚達は、恐らく遙か昔……新大陸がまだ海中にあつた頃からこの場所に有つたのだと思います……地殻変動によつてこの台地ごと浮上し、今までの永い年月を経て陸への適応能力を身に付け、この下にある瘴気の谷から養分を吸い上げる事で、現在の状態まで進化し成長してきたのでしょうか？」

永い目線で見た、生物の進化という点に着目した意見……移ろいやく生命の営みの中で、自らを世界に合わせるのが生命の進化の形だ……さすがは推薦組、と私も感心したが……

『……どんなに食い意地が張つっていても、クリスは歴とした編纂者……という事ですか』

「ちよつとシオン?! 私の事をそんな風に思つてたんですか!？」

『私の前では、何かを食べている事の方が多かつたですから……ねえ?』

「……何故そこで俺を見る?」

ふと思つた事を書いてしまい、それに衝撃を受けるクリス……「食い意地が張つている」のは嘘ではないと、私はレクスに同意を求める意図で視線を向いた。

……だがレクスには伝わらなかつた様だ

「……ニヤ、厳選ツボアワビ見つけたニヤ♪♪」

タマは我関せず、といった具合で採取活動をしてるし……

ヤレヤレと肩を落とし、採取の手伝いをするため籠をタマの近くに咥えて持つて行こうとすると、感じていた違和感が強くなっているのに気付く……

先ほどよりも濃密で重苦しい雰囲気……いや、コレはもう現実に息苦しい。

どうしようもなく不安になり、慌ててレクスの装備の背中を咥えてしまつた……籠の

代わりに

「……お、おい? 何なんだ……?」

「シオン? 何だか、慌てているようですが……」

クリスがいち早く私の不安に気付き、首筋を撫でて落ち着かせようとしてくれる
レクスもクリスの言葉に気配を読み、何かが近付いて来るのに気付いた

「何かが……来る……」

「え、何がです？」

「タマ！ 篠はクリスに！」

「ニヤ！ ご主人、足元が……!?」

タマの声に促され、全員が足元を見ると……陸のど真ん中だというのに、もう人の足首ほどまで水に浸かっていた

「なつ?! 水が……!」

「ニヤ〜?! 肉球に嫌な感触ニヤ〜!!」

『タマ、私の背中に……』

何処からともなく流れてくる大量の水……水に浸かるのが嫌いな猫……もといタマを背中に登らせ、私は段々と強くなる息苦しさに耐えながらレクスの方を向く
レクスは何者かの気配に気付いたらしく、丘の頂上の方から空中に現れたシルエットをじっと見つめていた……

「この気配……コイツは……?!」

オタオタしている内にもう目と鼻の先までシルエットは近付き、軽い地響きのような着地音を立てて降りてきたのは……まるで海月の様に目まぐるしく色の変わる幾つものラインを光らせ、尻尾まで繋がった巨大な翼を持つ生き物の影だった

『……ほう、初めて感じる気配……ヌシは龍か？ それが何故ヒトと共に在る……？』

頭に直接響く声に私は驚きを隠せない……その事を察したのか、影はこう言葉を続けながら暗がりだつた着地点から明るい場所へと歩み寄つて来た

『ふむ……ヌシは他の龍と違うのも初めてか？ 良い良い、何も取つて喰う訳ではない……もの珍しさ故の事よ』

シリエツトはそのままに、声の主はゆっくりと明るみに歩み出てくる
如何様にも変色するラインは、主に海月の傘の様にも思える巨大な翼の内側にあり
……肉食魚類を思わせる顔付きにナマズの様な長い顎鬚……4足に大きな翼を持つ、私
に近い体型……だがまるで違う様相を持つ生き物だつた
「このモンスター……まさか古龍?!」

他に類を見ない特徴に、深い知性を感じる眼差し、水を意のままに操るという常識で
は考えられない能力……それを古龍種と呼ばすに何と呼ぶのか？

『古龍、か……ヌシらニンゲンは我等を頻りにその名で呼ぶのう？ ……妾わらわとしては「ス
イレン」と呼んで欲しいのじやが？』

スイレン、と自称する初見の生き物……どことなく水棲生物の様な外觀をした古龍
は、おつかなびつくりで立ち竦む私達を興味深く観察していた。
(……相棒、この古龍は……)

(襲われる心配はないようだが……興味がある、と言つていたな)

どうやら、私だけでなくレクス達にもあの声は聞こえているらしい……

油断せず構えを解かないレクスと、私にしがみついて離れないクリス、タマは水を避けて私の背中で威嚇を繰り返している。

『……？　おヌシ、言葉が話せぬのか？　我らが龍の言葉を……』

『えっ？　……あ……』

重苦しい気配と雰囲気に飲まれ、沈黙していた私にスイレンは優しく語り掛けてきた
……その雰囲気の変化に戸惑い、私は奇妙な応答で声を上げてしまつた。

『なんじや、話せるではないか……おヌシ、最近生まれたばかりのようじやの……良い良い、初見に戸惑うのは誰しも同じじやて』

見た目からは想像できない、優しげだが古風な口調で話す見知らぬ龍……

私はようやく緊張が解け始め、思い切つて質問してみた。

『あの……私、生まれてすぐ人間に拾われたし……他の龍を見るのも初めてで……興味があるつて、どういう事ですか？』

『言葉通りの意味じや、他意も無ければ……敵意など持つておらぬよ、おヌシが奇妙な方法でニンゲンと話しておるのを偶然見かけてな』
『奇妙な方法……』

どうやら、スイレンは私が人間と筆談していた事に興味を持つたらしい……ただ、奇妙つてどゆこと？

疑問を投げ掛けようとした私にスイレンは衝撃的な一言を発した。

『何故、龍気を使わぬのじや？』

……は？ ……龍氣？ ナニソレ？

疑問符が途絶えない私……さらにスイレンは続ける

『龍気を使えば、言葉の通じぬ相手とも意思疎通が図れるし、何より龍の知識が得られる……おヌシは膨大な龍気をその身に貯めておるようじやが……もしかして、使った事が無いのか？』

私は「龍氣」のその万能っぷりに啞然とした……なにそのチート能力？！ 誰とも意思疎通が図れるとか自動翻訳も吃驚のトングリ^{ビックリ}デモパワーでしょ？

そして古龍種ならば息をするが如く容易く使える、と……

……もしかして、私が知らなかつただけ……？

衝撃的な事実に打ち碎かれた私は、誰にでも分かる様な驚愕の表情を浮かべた数秒後……重力に従つて首をガツクリと項垂^{うなだ}れた。

あまりに突然の仕草に、クリスは心配そうに私の顔を覗き込む。

レクスもチラ見しているが、意識はスイレンの一挙手一投足に注意を払っている様

だ。

「……その龍氣とやらが、コイツの力になるのか？」

『我ら龍は皆、この龍氣を用いた能力^{ちから}を各々の武器や得手としておる』
　　スイレンの言が正しいのなら、龍氣とは凄まじい万能性を秘めたエネルギーというこ
とになる……調査団の一員として、レクスは龍氣に興味を持つた。

「……龍氣とは、一体何なんだ？」

『この地……いや、この惑星^{ほし}の隅々まで流れる胎動……そこから漏れ出る何かが放つ、息

吹の様な力じや……人の身には過ぎたる力故、扱おう等とは思わん事じや』

　　抽象的な説明と同時に「人には過ぎたる力」と釘を射され、レクスは少し残念がる。
代わりに私はショックから少し立ち直り、スイレンに訪ねた。

『私も、龍氣を扱えますか？』

『龍であるならば、自ずと扱いは分かる故……感じよ、己が内に持つ流動^{ながれ}を』

　　そう言われ、私は目を閉じ……体内のエネルギーの流れを感じ始める。

　　ほんの僅かな流れ、体内を循環する流れとは違う……足元から大地、大地から身体に
循環しているエネルギー……なるほど、龍氣の扱いは自ずと分かると言うスイレンの言
葉は正しかつた。

『……分かる、流れてる……脈動……大地と、私と……全ての生き物に……』

「これは……シオンの声？」

「ああ……聞こえた、これでようやく直に話せるな……」

理解してしまえば、後は簡単だつた……言葉に龍氣を乗せ、一種の言靈として発する……伝えるべき相手の元へ、伝わるようにな。

『うむ、それが龍の言葉じや……どうじや？ 誰とでも話せるじゃろう？』
感知に集中すれば、足元の植物の声すらも聞こえる……意識を研ぎ澄ませば、遠くの人やモンスターの存在までも感知できた。
まさにチートパワーである。

一通り言うべき事を終えたのか、スイレンは翼を広げ飛び上がる。

「お前は、此処の主か？！ ……できれば、戦いは避けたいモノだな」

滯空状態のスイレンはレクスの提案に鳴き声で応え、そのまま飛行状態となり……再び山頂に掛かる霧の中へと消えていった。

同時に、今までの息苦しさや荒れそうになつていていた天気も徐々に回復していく……足元を流れていた水もまるで最初から無かつたように引いており、辺りは静寂に包まれた。

「……なんだか、古龍の認識がガラリと変わりそうです」
「……ああ、そうだな……」

『スイレン……ありがとうございます』

クリスとレクス、2人の古龍に対する感覚が大きく変わるキツカケとなつた出会い

そして、私の運命を決定付けた……大事な出会い。

私はまだ多くの事を学ばなければ……と、心に決め……水の古龍が去つていった山頂の空へ向かつて、感謝の言葉を贈つた。

雪路

丘珊瑚の地で遭遇した古龍、スイレン……

セリエナで一度物資を補給した後、一連の報告の為にアステラへと戻つたレクス一行。

報告に一致する特徴を持つ古龍種。

それは、かつてこのアステラで初確認された新種であり……古代龍人達から「激流のぬし」と呼ばれている存在……その名は……

〔涙龍ネコイツ〕

「シオンの事を興味深く観察し、力の使い方を教えてくれた……お陰でコイツは俺達とも普通に話せる様になつたぞ」

『ええ、スイレンには感謝しないと……私としても、筆談のままで手間も掛かりますし……』

頭の中に直接響く声……総司令や研究員達も、突然の声に驚く。

だが総司令はすぐに理解し、私に質問してきた。

「シオン、君はこれから先も……我々と共に在る、そういう認識で構わないのかね？」

『はい、少なくとも私が何故、今この様に生きているのか……それが分かる迄は。

そもそも私の種族的には未だに謎が多いのでしょうか？

私自身すら、どんな種族なのかを知らない訳ですし……貴殿方に協力し、共に紐解く……というのも一興ですから』

本音を言えば、レクス達と離れたくない……せめて、調査団の誰かと一緒にが良いと考えている。

前世の記憶すらあまり持たない……ひ弱な私のメンタル的に、弱肉強食で孤独なサバイバルは向いてないのだから……：

スイレンとの出逢いから数日後……セリエナへ送る物資を輸送する為のルートが、雪崩によつて塞がれてしまつた……との報告が入つた。

『……雪山、ですかね』

「何なんですか、その余裕さは？」

事前に研究員から学習させて貰つた私と……拠点をセリエナに移す事になり、一抹の不安を持つクリス……レクスは既に状況確認の為、一足先にセリエナへと飛んでいた。

後続として、必要物資を私が空輸すると申し出……クリスと数人のハンター達が同行してセリエナへと向かう事になつたのだ。

ちなみに、空輸物資の重量は200kgオーバーにもなるのだが……古龍の身体能力なら余裕の様で、試しに250kg程の巨石をベルトで吊り下げる『あ、ちょっと重いかも?』という程度で飛べた……

……古龍マジパネエっす。

そんな一連の裏話もあり、いざ出発……空輸はかつてセリエナを発見した際に、気球船で飛んだルートを使う予定で、当時はレイギエナが集団でセリエナへと渡つたらしい。

「……シオン、重くないですか?」

『感覚的にはさほど変わらないですよ? 私自身もまだ、何処まで出来るのか分かりませんし……』

総重量200kgオーバーの荷物を、鋼鉄製の籠と……中に鉄のワイヤーを通して、飛竜の翼膜とケルビの皮で作られたカバー付きベルトで吊り下げ、それでも変わらず悠然と飛翔する私……まだ本来の体格からは程遠いとはいえ、結構な重量物を着けても平然と飛べる古龍の身体スペックは筆舌し難い。

当時は悪かった海上の空は見張らしも良くなつており、徐々にセリエナのある地域が近付いていた……

本来の着陸地点となる場所は巨木が一定範囲だけ斬り倒され、そこだけぽつかりと穴

が開いた……海岸線に程近い崖の上の森の中だ。

気球船で直接セリエナのある場所へは行けない為に開墾された場所だが、今はセリエナへの道が通行不可となつていて、私は直接セリエナへと荷物を届ける事にしている。

普段はボボや物資が行き交う中央広場の一部が急遽片付けられ、私の運ぶ荷物を降ろす為に空けられていた。

なるべく無駄な衝撃を与えないよう、私は慎重に高度を落とし……荷物を降ろした。

『途中で無くなつてたり、破損した物はありませんでしたか？』

「ん、今の所は無いわね……アナタのお陰で助かつたわ♪ ありがとうシオン」

荷解きと平行して、物資のリストと照らし合わせていた資源管理担当の女性に微笑み掛けられ、恥ずかしさに包まれながら……私はセリエナの指令エリアである建物の入り口へと移動する。

入り口に座っていた獣人族研究者のおじ様に手招きされたので、私はその隣に腰を下ろし、中から聞こえてくる声に耳を傾けた。

「ああ、雪崩の範囲が予想外に大きかつた……人力での作業だと、最低でも2週間は通行が出来ないとと思う」

先行して偵察に出向いていたレクスと作業員の見解によると、雪崩の発生場所はセリエナ発見時の初期キャンプから海岸線に沿つて数キロに渡り、物資輸送に使っていたルートが完全に埋没している……。

その上、セリエナの最寄りキャンプから初期キャンプへの陸路も巨木で塞がれているらしく、さらになんとブラントドスがその巨木に挟まっている為、その陸路を塞いでいる巨木の撤去作業がまったく始められないのだ。

巨木に挟まつたブラントドスは手負いで凶暴化しており、ハンター以外は接近すらできず、逆にハンターが近付くとブラントドスが興奮する為、撤去作業どころではない……。

……まさにお手上げ状態なのである。

『……その撤去作業、私も参加は出来ないでしようか?』

何か手伝いくらいは出来るハズ……と、私は進言する。

「シオン? ……しかしだな……」

『撤去作業でなくとも、ブラントドスなら足止め位は出来るでしようし……』

「古龍とはいえ、ブラントドスの牙はポポの毛皮すら貫く……もし噛み付かれれば、いくらお前さんでも重傷を負わされる可能性が……」

『傷くらい構いませんわ……他ならぬ、貴方達の為ですもの』

調査団リーダーは驚きと共に許可を済る……研究者達からも苦言が出るが、彼等が困る時こそ私の力古龍である私の出番が役に立つというのは今までにもあつた……

私はこれからもそうしたいと思うし、逆に頼りたい事は彼らに頼るつもりだ。

「……分かつた、俺の敗けだよ……レクス、お前はシオンに付いてやつてくれ。

他の皆は撤去作業の手伝いと、周囲の警戒だ。

これ以上、大型モンスターが乱入する様な事態は避けたい……動けるハンターは総出で頼む！」

「「「了解！」」」

リーダーの指示が飛び、全員が応える。

かつてない規模の大作戦、その幕開けだつた……

凍魚竜ブラントドス……このセリエナ近辺を含め、凍土地帯に広く生息している魚竜種だ。

固めた雪を身体に纏わせ、生半可な刃物など通さない強固な防御力と、雪の中を泳ぐように移動できる機動力の高いモンスター……反面、地上ではゆつたりと緩慢な動作しかできず、狩猟においては雪から引き摺り出す事が基本となる……

だが今回に限つてのブラントドスは、雪崩の崩落に巻き込まれ……まだまだ元気なも

の、中途半端に雪から飛び出した身体が、見事に枝の隙間に挟まり……まるで丸焼き直前の串に突き刺さった魚みたいな、何ともアホな姿を晒していた。

ちなみに、魚うんぬんのイメージをしたのは……言うまでもなく私である。

『グゥルルルル……ガアツ!!』

致命傷には程遠いものの、全身に残っている傷は痛々しさを物語つている……

だが、身動きが取れないだけでほぼ元気一杯なブランドスは、付近に舞い降りた私とレクス……タマの姿に、即座に威嚇の声を上げた。

「ニヤ、どうみても元気が有り余ってるニヤー」

『これは……成る程、撤去も出来ない訳ですね……』

「まつたく、人騒がせな魚ヤローが……」

とはいって、この状況の今まで狩猟は出来ず……かといつて下手に巨木を撤去すると、ブランドスは即座に解放されてしまい、レクスか私が危険に晒されてしまう……正解を見つけるべく、必死に頭を回転させる私達……ふと、何処から足音が聴こえてきた。

「…………の音、モンスターか？ 大きいぞ?!」

『警戒範囲の内側に、もう入り込んでたの……?!』

ズン、ズン、と雪深い大地を踏み締める音が此方に近付いてくる……仕方なく迎撃す

る為、レクスは己の得物……双剣「エンプレスダガー・滅尽」を構える。

私もまた、連射が効く光弾で彼を援護すべく、口腔内にエネルギーを集めながら口を僅かに開く。

そして、現れた足音の主は……：

『何処も倒木だらけねえ……あら、貴方達……ドコの何方どなたかしら?』

……物凄くふわモコした、大きなトナカイさんだつた。

環境

『あら、アナタ達……何処のどなた?』

その巨大な威容に、シオンとレクスは言葉を失つた……

猛牛竜バフバロ……巨大な身体に立派な角、全身を覆うそのフワフワな毛並みは、まるでシルクの様な手触りだと見ただけでも理解できる程に綺麗だった。

……モンスターであるという点さえ除けば、斯くも美しい獣だと皆が思うだろう。

『……大きい……ですね……』

「……ああ……」

『……喋りました……よね……?』

「……ああ……」

『……何処の誰だと……聞かれましたよね?』

「……ああ……」

『生返事じやないですか?!』

「……ああ、すまん……」

黙つてそのやり取りを聞いていた大き過ぎるバフバロ……シオンとレクスの声が途

切れた所で再び言葉を投げ掛けてきた。

『アナタ達、最近越してきたばかりなの?』

『……ええ、まあ……あつちの山影に集落を造ったのですが……必要な荷物を運ぶための道が塞がれて……』

道……と聞いたバフバロは、目線を倒木で塞がれた方へと向ける……そこには、バフバロの縄張りを荒らす、縄張り争いの相手であるブラントドスが、倒木に挟まれて動けなくなっているのが見えた。

『あらあら、成る程ねえ……アナタ達もアレが邪魔で仕方がない、と……そういう事なのねえ?』

アレ? とは何の事だろう……そう思うレクス、シオンは何となく嫌な予感がしてならない……

そして、バフバロの吐息と……声に淒みが出始めた時、その考えが悪い方向に正解した事を知った。

『……っ?! レクス! こつちに!!』

叫ぶシオンの声に反応し、すかさずシオンの元へ緊急回避のごとく飛び込む……シオンも、レクスが近くまで来たのを確認すると、翼でガードするようにレクスとバフバロの間に割り込ませた。

『ちよめえ！　だわこかんと！　はよ出ていきね!!!』

凄まじい爆音の如き鳴き声と、方言訛りの台詞……それらを発しながら、バフバロは地面を数回……太く逞しい脚で削り、地響きを伴つて……倒木で身動きの取れないブランドースごと、倒木の山を弾き飛ばすのだつた。

『グゥオオオアアアア……グゥウ……グフツ……！』

その巨体による突進を否応無く直撃させられたブランドース……さすがに死んではないものの、その余りの威力に意識を残らず刈り取られ……打ち上げられた魚の様に、温泉が涌き出る山肌の下にある温泉池の岸で微動だにしなくなつた。

『な……あ……え……はあくくくく????』

「……なんて威力だよ……オイ……」

……さすがのレクスや私も、ドン引きである。

輸送ルートを塞ぐ倒木で身動き取れないブランドースを……その倒木の山ごと完全に弾き飛ばしたバフバロ。

通常よりも大きく、綺麗な毛並みを持つこの個体のパワーは、古龍ですら凌ぐのではないかだろうか……？

当のバフバロは鼻息も荒く……再びブランドースを睨むが、相手が微動だにしなくなつたのを確認すると、息を整えた後にレクスとシオンの方へと向き直り……

『……あらやだ、ごめんなさいねえ……怖かつたでしょ?』

その豹変っぷりに、私とレクスは……渴いた笑いをするしかなかつた。

ブラントドスこと、倒木を処理してくれたバフバロ……彼女は固有の名持ちだつた。

『わて……私は「サクラ」、わめら……ン”ン”……あなた達は?』

「俺はレクス……こつちは相棒のタマ」

「ニヤー♪」

『私はシオンです。あの……ありがとうございました、ブラントドス……あのままでは手が出せなくて、どうしようかと困つていた所で……』

『ほやつたん?　えらんことやない?　んならえがつたわあ♪』

(そうだつたの?　余計な事じやない?　なら良かつたわ♪) ※意訳

どうやら、サクラさんは意識してないと何故か方言になつてしまふ様だ……ちなみにレクスは、彼女が何かを言つて いるのは伝わるが、意味の方はサッパリらしい……さすがに私も時々サッパリだけどね。

『……ン”ン”つ……そう言えばアナタ、初めて見る竜ねえ?　何処から来たの?』

サクラさんの疑問に、私は何と答えたら良いのだろうか……私の戸惑いを知つてか知らずか、レクスがサクラの問いに答える。

「コイツは俺達が見付けた新種なんだ……自分自身の種族の事も良く分かつてないってんで、俺達と今は一緒に居る……まあ、それ以前にコイツはちよいと臆病なんでな」

『ほやつたんけ……ン”ン”つ……まだ子供なのに、親とはぐれた子かしら……』

サクラさんは一目で、私がまだ子供だとすぐに見分ける……何となくだが、そういう事は異種族でもすぐに判るらしい……だが、親とはぐれたとか、そういう所は種族ごとに違うので、慌てて私は生まれた時から単独だつたと訂正した。

『そんな……わらびしい子に、てきねえ事……だらなやつちやな！』

(そんな…………こんな小さな子に、つらい事を……情けない親ね！) ※意識

どう解釈したのか良く判らないが、私の親(?)に対して憤つているサクラさん……つてか、この方言……私はちゃんと正しく理解できているのだろうか?

……なんとなくしか分からないから難しい。

・ · ·

それからしばらくの間、サクラさんと色々話をしてから別れ……一旦拠点へと戻つ

て、中間の陸路が通行可能になつたと報告。

その足で作業員を連れて再び南下……雪崩で崩壊した中継地点のキャンプまで案内し終えた私達は、雪路で冷たくなつた手足を暖めるべく、すぐ側に湧いている温泉の滝へと足を向けた。

「…………あ”あ”＼…………ふう…………生き返るぜ…………」

完全防備とはいえ、数時間も雪道を歩き続けたレクスの手足は冷えきついている……最初の温度差さえ耐えきれば、この温泉の温度はちょうど良いのだろう……

『…………なら、私もご相伴に与りましようか』

周囲は岩肌と崖で囲まれており、私以外の大型モンスターが乱入してくる危険も無いので、躊躇いなく温泉の滝に身体を沈める……その時ふと、人間だつた頃の感覚を思い出したのか……レクスが側に置いていた布を前足で器用に掴み、お湯に浸らせて絞る……程よい熱を持つた布を頭に乗せた所で、私の意識は満足した。

『…………良いものですね、この…………温泉というのは…………』

一応古龍なので……初めてを裝う、だが……頭にタオルを乗せ、ご満悦に温泉に浸る冥灯龍……他から見ればシユール過ぎて絶句間違いなしだ。

「…………だろ？　人間だけでなく、コイツら小動物も分かつてる」

そう言つて指差す先には、数匹で仲良くお湯に浮かんでいる小型の小動物……ギンセ

ンザルが居た。

彼らに逢えるのは……その温泉の効能が極めて高く、浸かるだけで細かな傷など治癒してしまう程の効果に恵まれた源泉から来ている事の証明である……と、先人の知恵が詰まつた書物に書かれていた。

なるほど、確かに多少の怪我はこの極寒サバイバルでは必然……でも、この温泉で傷を治せるなら……そう覚えた動物達が集まるのも頷ける。

事実、私の足は温泉に入るまで気付かぬまま凍傷となっていた……だが気付いた時の痛みも、酷く血の気が失せたガチガチの感覚も、もう無い……浸かつてまだ数分しか経つてないのに。

……温泉メチャ凄いわ。

歴戦

バフバロのサクラさんと出会い……ひと悶着も済んで、天然温泉を堪能したその翌日。

雪崩で崩壊した気球船の離発着場に到着した作業員とレクス達……そこに広がっていたのは、見るも無惨に破壊された仮設の建物と、大量の雪……そして、偶然居合わせた一匹の大型モンスター……

茶色い毛と甲殻で全身を覆い、毒々しい色の刺を備えた長い尻尾……黄色でクリクリの丸い目をしたモモンガみたいな生き物……『トビカガチ亞種』であった。

キユロロツ？ ……キユ？

大人しい性格なのか、突然人間が現れても時折こつちを見やる程度……自分の『エサ探し』を優先しており、雪を搔き分けて埋もれたポポの死骸から肉を漁つていた。
「アイツは無視だ……やる気は無いみたいだしな」

レクスはそう判断し、作業員達にまだ使えそうな物を探すよう指示を出す……私も参加しようとするが、レクスから『万が一』と念を押され、トビカガチ亞種の様子見を頼まれてしまつた。

(……と、言つても……私からしたら何もする事が無いんですよね……)

トビカガチ亞種も、レクスや作業員さん達も……目の前のやる事を優先しており、他には目もくれないのでぶつちやけやる事が無いのである。

なので私は、頼まれたトビカガチ亞種の観察を行いつつ、更なる乱入を感知できるよう『龍氣』を地面に沿うように広げる……なんかゲームのスキルっぽい方法で索敵を行う事にした。

……え？ いつから出来る様になつたつて？ 何となくですけど……

昨日、天然温泉を満喫したからですかね？（真顔）

いや、ホントそうなんですってば！ お風呂上がり（意味深）に水分補給がてら温泉水飲んでたら、いつの間にか気配だけでレクスの動きが分かるようになつて、吃驚して飲んでた温泉水吹き出しちゃつてレクスに直撃させて……怒られちゃつたんですから！

しかし、実験も同然のはじめてやる感知方法なので当然トビカガチ亞種には気付かれた。

……でも、無視された。

は？ 腐つても古龍である私の龍氣を無視……

どれだけ無頓着なのか、はたまた図太い神経なのか……一瞥しただけですぐにエサ漁りに戻つてしまつた……

『……何なんですか、アイツは』

正直、複雑な気分である……

それからしばらく……レクスと作業員達はまだ無事な設備や荷物を雪から掘り起こす作業に没頭……私は暇をもて余しながらトビカガチ亞種の動向をひたすら観察していた。

ふと、今まで晴れていた空で……段々と雲行きが怪しくなつている。

『……この感じ、誰かが見ている……？』

以前にも感じた、誰かからの視線……丘珊瑚の台地で遭遇したネコミイエールの時と似たような感覚……また誰かが私を見ているの？

「……予定外の量だが、無事な荷物はこれで揃つたか？」

「持ち帰つて修理できそうな奴も含めると、これ以上は無いだろ」

「隊長、物資の輸送準備まもなく完了です」

「了解した……レクス、そろそろ離脱の準備を……」

輸送隊の面々から報告を受け、隊長がレクスへと声を掛けた……が、レクスの顔は厳しい表情のまま、雲行きが怪しくなつた空を見上げる。

「……輸送隊は先に離脱を！　まだ距離はある、今の内に……シオン！」

ピュイイヽツ!!

予め決められた音階の口笛……所定の場所で使えば、飼い慣らされた小型の飛竜を呼ぶ為の口笛が雪原に響く。

直後、レクスは武器を確認しながら走り出した……

不可思議な視線に違和感を感じた私の聴覚に、独特な音階の指笛が聴こえてくる。

『……ッ!? これはレクスの?!』

呼び笛として覚えた音……

個人の微細な音の違いも認識できる聴覚が、レクスの焦りの感情を捉える……振り向いた先には、真剣な表情のレクスが此方へと走つて来ている……

また何かが起ころうか……すぐさま私もレクスの方へと走り、合流した場所から油断無くレクスと共に周囲を警戒する。

「スイレンだつたか? ……アソツの時よりヤバそうな雰囲気だ」

『……また、誰かの視線を感じました……古龍でしようか?』

「分からん……だが、強い奴だというのは確定だな」

いつの間にか、あのトビカガチ亞種の姿は何処にも無かつた……

雲行きは先程とそう変わらないものの、何かが迫る気配だけはハツキリと分かつた。

レクスは油断無く構え、私も迎撃くらいは役立とうとブレスのエネルギーを集め始める……

そして、左側に聳え立つ崖の上から、飛び降りて来たのは……氷塊と冷気の塊……着弾点で弾けた塊は細かな氷となつて爆風に乗り、竜巻の様に舞い散る。

竜巻は私たちとは少し離れた位置に着弾したため、直撃するという難は逃れたが……咆哮と共に崖を降りてきた白い姿に、2人は言葉を失った。

全身を雪と同色の細かい毛と甲殻で覆い、大きな前足には、幾つもの棘と体格に見合った翼……そして太く長い尻尾を振り、氷刃の如き巨大な牙と、青白い瞳……纏う雰囲気は数々の死闘を潜り抜け、歴戦の勇の如き霸氣を放つ……

冰原を駆ける白き牙獣『氷刃佩くベリオロス』だ。

「……た、隊長……！」

「慌てるな！　総員、離脱準備！　時は彼レクスとあの龍等が稼いでくれる……荷車の出立準備が完了したモノから往け！」

崩壊現場に突如現れた氷刃佩くベリオロスに、慌てふためく調査員達……だが、隊長は冷静に離脱の指示を出しながら、戦場と化すであろう視線の先から目を反らさなかつた。

圧倒的威圧感と凄まじい咆哮……さすがに歴戦の猛者だけあって、レクスの攻撃に怯

まず、私のブレスを冷静に避ける。

凄まじい熱量で雪は溶け、凧ぎ払つた場所は濡れた地面が剥き出しになつていく……ベリオロスもそれを本能で察知し、絶対に当たる訳には行かない……と、必死なのだろう。

「クソツ、あの刺だ！ アレを壊せば動きが鈍る、一か八か……ッ！」

ピッ！ ピュ～ッ！

再び指笛が鳴らされ、私は瞬時にそれぞれの立ち位置から意図を理解する。

指示は『3連続の光弾ブレス攻撃』……ベリオロスは正面から私と睨み合い、レクスはベリオロスの左側……つまりはわざとレクスとの間に1発入れておき、残りの2発を利用してレクスの方へと追い込めば挟める、幸いにもベリオロスの後ろは崖なので。

『喰らいなさいッ!!』

意図的に狙いを反らした1発が放たれ、ベリオロスは狙い通りに警戒して此方から光弾へと意識を僅かに向ける……タイミングを合わせ、レクスは光弾の着弾と同時に閃光玉をスリンガーで撃ち、振り向いたベリオロスの視界が全て閃光で真っ白に……私は2発目を撃つモーション中で首を振つてた瞬間なのでギリセーフ。

閃光玉の光に怯み、一瞬だけ動きを止めたベリオロスの右前足に、狙いを定めていた2発目が直撃……地面と一緒に足を抉つて転倒させる事に成功する……ちなみに3発

目も転倒直後の左前足に当たつたので両前足共に軽く火傷を追わせた事になつた。

「……ツ!! オオオオオラアアアア!!」

劇的なチャンスにレクスは双剣の奥義「鬼人化」を発動させ、一気にケリを付けるべく頭を滅多斬り……私も援護を兼ねて胴体に飛び掛かり、相手より小さな体格ながら重力を味方に付けた全体重をベリオロスの背中へとお見舞いする。

「オラオラオラオラオラオラオラ!!」

武器の切れ味に構う事なく、ただ猛然と斬り裂く事だけを考え腕を振るう「鬼人双剣乱舞」……なんか、ここに居ない筈のヒトが、レクスの後ろにボンヤリと見えた気がしたが気にしてはいけない……私も軽く飛び上がってダメ押しの連続四つ足プレス!

そこに、輸送隊からの救難信号で応援に駆け付けたハンター達も合流……ヘヴィボウガンの弾の嵐と、大剣の真・溜め斬りが直撃した事で盛大にベリオロスの尻尾が空中に舞い飛び……反動でベリオロス自体も崖際から吹き飛ぶ様にして前へと吹き飛んだ……私は、吹き飛ぶベリオロスの顔に大粒の涙を見てしまい、「もし、自分の尻尾を斬り飛ばされたら……」と想像してしまつて一瞬だけ『ヒュンツ』と悪寒を感じた。

だが、ベリオロスの災難はまだ終わつておらず……吹き飛んだ先には、いつの間にか仕掛けられた落とし穴が待ち構えており、ものの見事にゴールイン……しかも何故か嵌まつた直後にグースカ昏倒してしまつたのである。

「……フハハハハ！ 見たかこの鮮やかな手際を！」

……と、ヘヴィボウガンを担いでポーズを極める応援ハンターの女性。後でレクスに聞いたら『これが彼女の流儀』らしく、出来ると見極めた瞬間に捕獲用麻酔弾を撃ち込んで、必ず捕獲を狙うらしい。

うん、まあ捕獲に魅せられてとかこれが私の生き甲斐だとか、そこまではまだ良い……でも、ゾクゾクして気持ち良いはさすがにチョット分からない。なんだか危険な匂いがしたので、今後は彼女に近付かない様にしよう……

接触

渡りの凍て地での雪崩騒動から数日後……私達は今、龍結晶の地に居ます。

『……此処が、私の産まれた地……ですか』

「ああ、この地の最深部……龍脈の集束地で、私はお前を見つけたのだ」
私の第一発見者である龍人族のハンター……デュークさんの案内で、私はレクスとクリス、そして大団長と共に、「私の産まれた地を見たい」という願いを叶えて貰っているのである。

「……いつ来ても、こここの雰囲気は慣れません……」

「ああ、常に誰かに見られている……そんな気がするな」

レクスとクリスは何度かここに来た事がある模様……いや、当然か……私の同族と遭遇し、本能のままに暴れるソレを放置できず、討伐するしかなかつたのだから。

「……シオン？　どうした？」

『……………』

レクスの言は正しい気がする……私にも感じるのだ、そこかしこから私達に向けられた「誰かの視線」を。

「シオン?」

この地に来るまでの道中は、ほぼ火山地帯の様なものなの……そんな極限環境を通過して此処に住み着く変わり者など、居ないハズ……此処には食べ物も無く、植物すらも生えてない……あるのは凄まじい程の密度でエネルギーを蓄えた『龍結晶』が露出した壁面や床があるだけ。

「……オン、……シオン!」

『……?! えつ? な、何ですか……?』

「んもう……呼び掛けても返事が無いから、ビックリしたわよ?」

『……スミマセン、色々と気になつてしまつて』

思考を誤魔化し、私はレクス達と再び歩きだす……

生物の気配すらないこの地の奥底で、私という種^{セノジーヴア}が産まれた……種族の成り立ちすら生物の概念を超えたこの種族^{私という存在}の秘密を解き明かすには、この調査は外せない……何から手掛かり、その欠片でも良い……ある種の強迫観念に苛まれた私は、総司令へと直談判し、今回の調査を取り付けさせたのである。

「……ココだ、此処から川の流れに沿つて、船で行く」

『深さは意外とありますね、私は後ろから泳いで行きましょうか……』

川の上はそれほど開けてないので、私は小舟の後を泳いで付いていく……

設置されたベースキャンプの側にある小川……といふか、龍結晶の隙間に流れ込んだ地下水の流れに沿つて、更に奥地……深奥部へと進む。

「……ま、これ程進んだだろう……辿り着いた場所は四方を土壁と龍結晶に覆われた、巨大な空間……」

「……ま、ココは下層らしく、見上げると更に上の層……そして遙か上方から外の光も差し込んでいた。

「……ま、ココに来る事になるとはなあ……今度はコイツと一緒によお?」

大団長の言葉に、僅かに顔を歪めるレクス……

「……ま、それもそうか、此処で彼は以前に……私の同族ゼノ・ジーヴアと死闘を繰り広げ、討伐したのだから。確かに彼には、思う所があるのだろう……でも、当の同族である私には、何の感傷も湧かなかつた……龍としてはそれで正しいのかもしれないが、私には……それが逆に哀しく思えてしまつた。

「シオン……な泣いてるの?」

「……何となく察したのだろう、クリスが私の雰囲気を感じ取り、私の頬などに触れてくる

「……本当はそつとしておいて欲しかつたのだが、触れられた途端に感情が抑えきれなくな

り……私は自らクリスの手に頭を押し付けながらその場に座り込んだ。

「……落ち着いたら、調査を始めよう」

デューケさんの声も、何となく哀しみに揺れている気がした。

しばらく撫で回されて、ようやく私の心も落ち着いたので調査を開始……

前回は討伐任務だつたのでろくな実地調査も出来ず、デューケさんは単身で調査をしようとした所で私を拾つたらしい……なので本当にこの地帯の本格的な実地調査は、今回が初となる。

「床も壁も、そのほとんどが龍結晶だな……」

「ああ、そして耐熱強度だけは異常だぜ……なんせコイツのブレスを何度も浴びた部分でも、僅かに溶けていた程度だ」

大きく中空に突き出た部分は、スリングガードで石ころを当てただけで落下してくるものの……実験と称してぶつ放した私のブレス攻撃を受けても……ある程度赤熱化しただ

けで、ほとんど破損らしい破損をしなかつた。

『……龍脈の流れは、確かにあの繭の所へも流れています……今は、集束してない状態ですけど』

デューケさんの記憶によれば、私はあの繭の様な場所から溢れ落ちるようにして出てきたのだという……調査ついでに飛翔し、繭の直近まで近寄つたが……何らかの痕跡すら認められなかつた。

いや、あるにはあつた……だが、それは私が出てきた時の痕跡だろう。

ただのエネルギーの塊から、生物は発生するのだろうか……それとも、龍脈と呼ばれるこのエネルギーは、通常では考えられない現象を引き起こす事が出来るのか……やはり、ココに残つてゐる痕跡だけでは……眞実に辿り着く事は出来ない……

『……分からぬ事が増えただけでしたね』

新たな事実や発見は確かにあつたが、どれも龍脈の謎に迫るには遠く及ばない……私はそう結論付けようとしたが。

「いいえ、まだ試して無い事があります」

大団長とデューケさん、そして私が首を捻る中……クリスが私にある提案をしてきた。

「シオン、ココの龍脈の流れをもつと詳しく確認出来ませんか？　ほら、あの時スイレン

が『龍ならば、龍脈から知識を得られる』って言つてましたし、シオンがココの龍脈に干渉……ないしは触れる事で、何らかの情報が得られる可能性はあると思うんです』
 丘珊瑚の台地に住まう古龍、ネロミエールのスイレン……彼女の言が正しいのなら、私がココの龍脈にアクセスすれば何らかの情報が得られる……古龍が古龍たる所以と力は、龍脈という存在にある、と仄めかしていたつけ……

「……確かに、龍脈自体から情報が得られるのなら、これ以上確実な情報は無いだろう……尤も、そのスイレンと言う奴の言葉が真実だつたら……という前提になるがね」
 デューケさんはスイレンと直接逢つていなから、疑うのは当然だ……でも、私は彼女を信じていた、もう一度……彼女の導きにすがつてみようと思う。

『もう一度、彼女の言に従つてみる……という事ですね……と分かりました』

私は大地に己の龍氣を浸透させ、大地に流れる龍脈を再び探す……この地の龍脈の流れは規格外な程巨大、そして緩やかに流れている……位置を掴むのも容易だつた。

『……接触しました、干渉を試みます……もし、何かあつたら……』

『心配するな、俺が側に居てやるよ』

「私もです！」

私の首元に触れながら、レクスとクリスの2人が頷く……私もその粹に応え、意識を龍脈の中へと集中した。

『……行きます！』

扉を開け放つ様に……龍脈のエネルギーの流れへと、私は自分の意識を接続する。

直後に感じたのは、幾つもの記憶の欠片……私が今まで経験した日々、龍として生まれた瞬間……それすらも次々と遡り、忘れていた人としての記憶や前世の常識……止まる事なくどんどん遡り、前世の生を受けた瞬間……更にその先に続く何かに気付いた私は、その内容に驚愕するのだった。

『そんな……事って、なら……今の私って……?!』

レクスとクリスに見守られ、シオンシオンと呼ばれる古龍は静かに目を閉じ……地下を走る巨大な龍脈の流れにアクセスしている。

その光景を見ながら、大団長……グランは思った。

(龍脈の謎を解く……それが、自らの謎を解く事にも繋がる……か、シオンよ……お前は

一体何者なんだ……？）

デュークが偶然発見し、連れて来た未知の個体……小さなゼノ・ジーヴア。人を襲わず、時に興味深く見続け、機微良く言葉に反応を示す……。そして人語を解し、他の古龍との接触から、遂に対話まで行うようになった。時に思慮深く、自らの出自や世界の成り立ちを考察する……。その姿はまるで、姿の違う「人である」かのように……。

「……本当に、お前は何者なんだろうなあ……？」

この日、私から見えるこの世界は激変した……

何だろう……上手く言葉に出来ない。

少なくとも、私が知りたかった謎……私が何故生まれたのかという理由……。それはこの先……遠くない未来に待つ、抗えない運命の幕開けを示唆するものでも

あ
つ
た。

コラボストーリー 「風と共に翔ぶ」

異変

「……古代樹の森に、異変……ですか？」

「そうだ、本来居なかつた何者かが森を縄張りにした可能性がある……5期団は至急、古代樹の森の異変を調査してくれ」

セリエナを仕切る新大陸生まれのハンターにして、調査団の若きリーダー「レオン」が指示を出す。

目的は「古代樹の森の異変の調査」……

何でも、古代樹の森に「以前にはなかつた特殊な痕跡」が散見されるようになつた、それに加えて森に生息していた一部のモンスター達が縄張りを追われたり、奇妙な死骸が数多く発見されるようになつたのである。

「一体何が原因なのでしょうか……」

「分からん、だから今回の調査が発せられたんだろ……シオンはどうしてる?」

レクスはクリスとの会話中も防具を身に付ける手を止めず、シオンの居場所を尋ねる。

「今、外でタマと打ち合わせ（？）してゐみたいですよ？」

「タマと？……なら、今回の事はもう伝わつてゐみたいだな」

セリエナから古代樹の森に行くには、一度アステラまで戻らなければならない……

海を横断するのが最短だが、季節風は逆セリエナ方向にしか吹かないので、戻るには海岸線や陸地に沿つて飛ぶしかなく、更に少飛竜では何日も掛かりルートも遠回りになつてしまふ。

だが、シオンなら楽にレクス達2人を運べる上、少飛竜とは比べ物にならない程のパワーとスタミナがあるので、海を渡る最短距離を一気に戻れるのである……その為、レクスはシオンに移動を頼もうと思つていたが、先にタマが話をしに行つてくれていた様だ。

『……あ、と……レクス、事情は聞きました……準備ができ次第、出発しましよう』

マイルームを出て、タマとシオンが待つていた入り口へと出てくるレクス……やはりタマが先に話を付けてくれていた様で、シオンから同行を切り出してきた……物資補給所で消耗品を揃えたらすぐに向かおう、レクスは応えた。

道中の空の旅は想定通りに順調すぎたので割愛……そして再び舞い降りた古代樹の森。

ここで「奇妙な痕跡」が発見されたのはつい最近らしい……私は龍気を張り巡らせ、索敵と状況把握に努める。

「シオン、気の乱れや異変は感じるか?」

『……今は至つて普通の状態ですね……特異な存在らしい存在も感じられません』
レクスの問い合わせに、すぐさま私は龍気の感知度を高め……特に異変がないのを確認し答える。

あの接触以降……私の龍気制御力はどういう訳か格段にアップしており、こうやつて薄く龍気を広げるだけで狩場の生物や植物の反応を感じ……何処に何があり、何をしているのか……ある程度は把握できる様になっていた。

なお、最大知覚範囲は古代樹の森だと「初期キヤンプ」から北にある「エリア9」の崖の辺りまで……森の中央にある「エリア2」の北端辺りからなら、ほぼ半分以上を知覚範囲に納められる……

さらに言うなら円柱状に上空まで龍気を展開できる様になつたので、空中を飛ぶ飛竜までしつかりと把握可能だ。

「そうか……なら、いつも通り導蟲しゆうべむしに痕跡を追わせよう……シオンは場所を変えて、上空からも探索してみてくれ」

レクスの指示を受け、私は2人と別れ森の上空に上がって再び『龍気感知』を試して

みる……

ほんの僅かだが、いつもと違う反応を捉えた……あまりにも小さいので、この反応は痕跡だろう……既にレクスも気付いてすぐ近くに来ている。

もう少し森の中央付近へ行つてから試してみよう……

森の上空……リオ夫婦が仲睦まじく遊覧飛行しているのを脇目で確認しながら、古代樹の中腹辺りの高度で、再び薄く龍氣を展開……場所的にはエリア2北端に程近い空の上、ここならばエリアの端でない限り感知できる筈だ。

(……ハンター達も見た事の無い痕跡、何かしらの手掛けりを掴めれば良いのだけど
……)

感知を続ける中、レクス達の反応は遠目だがハツキリと分かる……ちなみに龍氣感知の感覚で見た人間は、暗闇に浮かぶ小さな光点だ。

当人の気質にも依るが、龍氣感知に映る人間の反応は、だいたいは遠目からでもしっかりと分かる強くて小さい光……現代風に言うなら「発光ダイオード」のようなもの……逆に古龍種や飛竜種は、光の輪郭はぼやけているものの基本的に光そのものが大きく、光の量も個体の強さで強弱が変わる……相対表現なら「白熱球」と言えば良いだろう。

(……ツ……居た……場所は……、エリア5から6へ移動してるので……)

先程とは違い、知覚範囲の外縁辺りをゆっくりと移動する大きな白熱球の様な反応を感じ。

場所は南西のキャンプからは遠く離れたエリア5の付近……それならば最初の感知に掛からなかつたのも納得だ。

「……？ 他にも反応が……」

もう一つの反応には覚えがある……アンジャナフだ。

古龍種よりかは小さめだが人よりは遙かに大きくて明るく、地上を我が物顔で歩き回る暴れん坊……程よく狂暴で狡猾さも併せ持ち、古龍種が相手でも退かずに繩張り争いを仕掛けるという。

(行き先は12から6へ？ 例の相手と鉢合わせするわね……少し近付いて見ようかしら？)

どうやら、謎のモンスターとアンジャナフはエリア6で鉢合わせる様だ……レクス達はまだエリア4から11へ移動中……先に行つて、様子を見に行つてみよう。

ヴォオオオオ……ツ!!

ズンツ!!

グオオオアアアアアツ!!

オオオオオオオ……!!

エリア11へと降り立つた直後からアンジヤナフの暴れる音に混じつて、独特な鳴き声が響き渡る……およそ聴いたことの無い音……鳴き声と言うより、呻き声に近い……『何、この感覚……寒氣? セリエナでも感じた事無かつたのに』

普段は暖かな森なのに……今は寒氣というか、奇妙な悪寒を感じる……心なしか風に乗つて生温い瘴気が流れてきていた……ん? 瘴氣?

『……ツ?! まさか……』

問題の奴が通つたルートへ近付いて、そこにあつた痕跡を詳しく調べる……足跡には僅かな腐食の跡と、瘴氣の残り香が感じられた。

その痕跡を辿つて来たレクス達が合流してきたのと、私が相手の正体に思い至つたのはほぼ同時。

そして、異変の正体が姿を現す……

「む、シオンか……先に来てたんだな」

『やつぱり……この痕跡は、あの谷の……』

「……えつ？」

直後、周囲を撫でる風が吹く……争う音は、いつの間にか聞こえなくなつていった。

風に乗つて、周囲に漂つていた瘴気の残り香が全て奴の元へと集まつていく……
風が止み、普段なら聞こえるはずの虫の鳴き声や、鳥の声すら聞こえない静寂の中
……静かに響いてくるのは巨大な生物の足音……

『……レクス、クリス……音を立てないで下さい、アレは音に反応してきます……今はや
り過ごしましよう』

いつもの言葉では、奴に聞こえてしまう可能性がある……私は咄嗟に2人を掴み、思
念を身体伝いに送つていた。

どうやらしつかり認識できたようで、2人とも私の方を振り向いて頷いてくれた。

そして、足音が直近まで近づき……僅かな風の流れと大量の瘴気が渦巻く身体が岩陰
から姿を見せた。

フオオオオオ……ツ……！

その身体には幾重にも瘴気の対流と、カビの塊の様なもの……胞子の塊が纏わり付い
ていた……

そして、生きている筈の無い程欠けている様に見える頭や、身体全体が一際濃い瘴気と胞子の塊で覆われている……それは纏うそれとの共生関係……

腐敗し朽ちた筈の死体が、生きて動いている……そんな外見をしていた。

(間違いない……アレが瘴気の谷の王、死を纏うヴァルハザク……!)

掴んだままの私の前足を通じて、私の思念がレクス達にも伝わる……同時に、2人の驚愕と恐怖の念もまた私へと逆流してきていた。

(……あんな奴がココに来てるとか……最悪だ！　今の装備じや、手も足も出せねえぞ……)

(あ、圧倒的過ぎる……今まで感じた恐怖さえ生温いこの感覚……身体の震えが、止まらない……ツ?!)

その姿は、まさに『動く死そのもの』……

ただゆつくりと歩くだけなのに、足元から死の恐怖が迫る様な感覚に襲われる……古龍である私に触れていた為か、辛うじて恐怖に打ち勝ったレクスとクリス……ヴァルハザクが去つた後の地面には、チリチリと焦げる様に僅かな侵食を見せる痕跡だけが残されていて了。

「なん……だと……?!」

「ヴァルハザクの特殊個体?! 大事にならんと良いが……」

「凶兆の先触れでなければ良いのだが、まさか……な」

アステラの古龍研究員達が一様に驚愕に包まれる……ヴァルハザク自体は、以前にレクスが発見し調査が進められていたのだが、この個体はその時とは掛け離れた厄介さを持つていた。

「奴は瘴気を常に纏っている様だつたな……恐らく、通常個体とは違う瘴気だろう」

『ええ、そして……あの瘴気は他の生物にも伝播する上、ヴァルハザクが瘴気を吸收する時……冒された生物は体力を奪われるんです』

アステラで行われた緊急対策会議……その最中に私は、新たに会得した『龍脈の叡智』を使い、死を纏うヴァルハザクの情報を紐解いた……

この『龍脈の叡智』とは、簡単に言うならゲームの攻略本のようなものだ。

対象の名前・特徴・能力など、様々な情報の断片から相手の詳細な情報や敵対した時の対処法を導き出す……所謂、検索能力を持つている。

会得した直後は、フイ〇ツプ君の『〇の本棚』みたいな事が出来る!? とかなり驚愕したが……冷静に考えると転生チートじやないかな?

實際、現在から可能な限り遡れる過去のヴァルハザクの情報なんて皆無に等しいし、検索結果を語る毎にどよめきやら何やら色々と声が上がるんだもの。

「……瘴気の対処法は？」

『ウチケシの実で一応の対処は可能な様です……後は、奴の素材を用いた防具……ですかね』

この『龍脈の叡智』によれば、死を纏うヴァルハザクの素材で造られた防具には『瘴気に冒されない』という特殊能力があるらしい……だが、素材が件のヴァルハザクである以上、卵が先か鶏が先か……といった所だ。

なので必然的に、ウチケシの実による対処に限定されてしまう……

「兎も角、奴の対処は入念な準備が必要不可欠だろう……5期団は奴の行動範囲の特定を頼む、瘴気対策も忘れるなよ？」

死を纏うヴァルハザクの出現以降、古代樹の森は不気味なほど静けさに包まれたもののその影響はさほど大きいものでは無かつた。

そして、再び古代樹の森ヘヴァルハザクの調査へと赴いた、私達の前に現れたのは

『……まさか、貴方は……?!』

全身を鈍く光る甲殻で覆つた、輝ける鋼の龍だった。

同類

古代樹の森に死を纏うヴァルハザクが現れ、その調査に乗り出した5期団ハンターのレクスーに向。

だが、肝心のヴァルハザク自体が姿を見せないという事態に困惑する……しかし、古代樹の森の異変はまだ始まつたばかりだったのです。

『……うくん、また空振り…………ですかねえ？』

「……の、ようだな」

「ニヤー、かくれんぼは苦手なのニヤ……」

死を纏うヴァルハザクを探すも、あの時以来一度も姿を見せない……時折、瘴気の残り香や瘴気に冒されたジャグラスを見掛けるものの、肝心のヴァルハザクを見る事は無かつた。

あれからもう一週間経つが、状況は変わらずである……

「お疲れ様ですレクス！……また、見つけられなかつたみたいですね」
クリスの言葉に、何で分かつた？と疑問を持つたレクスだが……

「顔を見れば分かりますよ、特にシオンを見てれば……ね」
体長は約5mほど、大人のアプトノスと同程度まで成長したシオン……本来のゼノ・ジーヴァと比べてもかなり小さなナリをしているが、身体スペック自体はかつて戦つた強敵ともう変わらない等に達している。

だが、その身に纏う雰囲気は……およそ古龍とは思えない程、優しく知性的で……そして分かりやすかつた。

『んああああああ!! またハズレなんてええええ……なんで出て来ないのおおおお!?』

アステラの入り口近くにある小川で涼を取る冥灯龍……涙目で泣き叫び、八つ当たりみたいにバシャバシャと水面を前足と尻尾で叩くその姿は、まるでかくれんぼで相手を見つけられない鬼役の子供だ。

「……あー、アレはなあ……分かるわな」

苦笑を堪えられず、タマに慰められるシオンを尻目にレクスは調査報告を纏めるクリスと顔を見合わせるのだつた。

ちょうどその頃、新大陸の上空に現れた黒い影……シリエットはシオンに似た古龍寄りだが、翼膜は尾の付け根まで一体化しており、翼の面積はシオンよりもだいぶ大きい。その背には、何故か明らかに違う種族を乗せて空を舞つていた……だが、背中の影の一つが突然その場から滑り落ちかけてしまい……バランスを失った古龍らしき影は、フラフラと森の中へ落ちてしまう。

「ニヤ、彼の姿は……?!」

「ゴロ、風の龍か……何やら背負つっていた様だが?」

「ニヤー、ヒトの様にも見えた……ヒト族が共に在るならば、彼等の同胞ではなかろうか?」

「然り……であるならば」

見晴らしの良いエリア16の眺望から、偶然その一部始終を目撃していた3匹のテトルー。

彼ら「森の虫かご族」と呼ばれるテトルー達は、古代樹の上層部分に住処を構え、アイルーに匹敵する高い知恵と勇敢さを持ち、様々な地で生きる糧を探し集めながら暮ら

している野生の猫人族だ。

アイルーとほぼ同じ言語を使うため、人間とも多少ながら交流を持ち、一部は物々交換で生計を立てている者もいるという。

新大陸上空で起きた小さな異変を目撃した3匹のテトルーは、最近交流を持ち始めた人間達の住処……調査拠点アステラにこの事態を報せるべく、足早に古代樹を駆け降り始める。

それが、新大陸の運命を分ける……重要な鍵になる出会いの始まりでもあつた。

「イタタ……うん、みんな大丈夫？」

「全く……酷い目にあつた、アミラが突然マサトの背中から落ちるなんて……」

「申し訳ありません……新大陸到着の嬉しさが極まって……」
ぐううううう……

アミラと呼ばれた少女が弁解するも、その声を遮るように響く腹の音……

「……はあくつ、ミラルダ……食糧の残りは？」

「あ、天羅さん……つと、残りは……アレ？」

アミラの言葉に不信感を持つた天羅あまらというハンターの女性は、同じくハンターである女性……ミラルダに、出発前に確認していた食糧の残りを再確認するように頼む。

だが、ミラルダが食糧を入れていた袋を探すも……先程の揉みくちゃで繋いでいた紐が切れたのか、在るはずの場所に無かつたのである。

「なんてこと……この先どーすんの?! 食糧が無いとこの先口クに動けないわよ?」

「……現地調達をしようにも、何がダメでどれが食べれるのか……」

「困りましたねえ……（ぐううううううう……）」

意氣消沈する3人の下から、にゅつと黒い鋼色の首が伸ばされる。

グクウルルルル……（あだだだ……ふう……いくら鋼の身体しても、打ち身はちと痛い……）

3人の女性を背中に乗せ、先程まで空を翔んでいたのは、この鋼の身体をした大型のモンスター……風を纏う古龍「風翔龍クシャルダオラ」であつた。

（3人とも、怪我はない?）

「ええ、大丈夫よマサト。問題ないわ……アミラのお腹以外は」

マサトとは、このクシャルダオラの名。

彼はココ新大陸とは違う地の生まれで、ハンターであるミラルダと出会い……とある事がキツカケでミラルダに一目惚れされ、共に各地を旅しているのであつた。

その中でチャージアックス使いの天羅、とある里の双子巫女の片割れ、アミラとも出会い……2人もマサトに惚れて旅に同行しているのである。

なお、ミラルダだけがマサトの言葉を直接聴く事ができ、他の2人にはミラルダから間接的に……またはマサトが何かしらに文字を書く事で意思を伝えているのだった。
 （ううん、食糧か……それは困ったなあ……私もヒトが食べれるかの判別までは出来ないし……）

「……とりあえず、場所を移動しましょ？ ココ、凄く大きな木の上みたいだし……」

ミラルダの言うとおり、現在マサト達が居るのは古代樹の森エリア17の北東部。

近くには古代樹に直接開いている内部への穴もあり、そこや古代樹の表皮に沿つて生えた葛や枝によつて幾つもの道が出来ている……まさに天然の迷路の様な場所だつた。

移動を開始して間もなく、エリア17のキャンプを偶然発見したミラルダ達だつたが、慣れない樹上の道と、複雑なルートでなかなか辿り着けず……仕方なく北で見つけた古代樹の穴から内部を通り抜け、見晴らしの良いエリア16……所謂“飛竜の巣”へと移動していた。

ちなみにマサトはエリア17北部に開いた穴を通れず、単独で飛ぶと方向音痴で迷子になるため、熾烈^{マサトの道案内を賭けたじやんけん}な争奪戦で勝つたアミラを乗せて、外から回り込んで来ている。

だが、偶然なのか天然なのか……古代樹の東側へと回ればアステラがすぐ眼窓に見えたのだが、何故か正反対となる西側へ回つたのはご愛敬^w

「さつきの場所……何であんな所にキャンプがあつたんでしょうか……」

「新大陸に入つた、調査団とやらのキャンプじゃない？……彼らと合流できれば、食糧も何とかなるんだろうけど……」

「そうですね……問題は、彼等の居場所なのですが……」

新大陸のハンター達は、キャンプ^{ファーム}間やアステラ等への定点移動^{ルート}には飼い慣らした小型飛竜を使つてゐる……だが、そんな事など全く知らないミラルダ達……まあ、当然ですよね。

(ココからなら、下の様子もある程度は分かるね……ん？　あれは……？…)

エリア16にある竜の巣……そこから下を覗き込んだマサトは偶然にも、眼窓に嫌な予感をヒシヒシと感じるあるヤツを目撃するのだつた。

マサト達が墜落後に移動を開始した頃……異変を偶然発見した「森の虫かご族」のテトルー達は、此方も偶然アステラの外で料理用の素材採集をしていた料理長アイルー

「ディラン」と出会い、事態はすぐさまアステラへ伝わった。

「新大陸の外から古龍が渡ってきたのか？」

「オウ、その様だ……彼等の話から、飛来したのは『風翔龍クシャルダオラ』だとさ。しかも、何者かを背中に乗せて、いたらしい……」

「……はあ？　何者かつて何なんだよ？」

「それは分からん……目撃したテトルー達は、人間だと言っていた様だが……」
総司令の言葉に、レクス達召集されたハンターは一様に驚いた……まさか、今のアステラとシオンの様に人間と共に共生をしている古龍が他にも居るとは。

それもその筈……新大陸への航路を走る定期連絡船に積まれるのは基本、アステラやセリエナの運営に必要な物資や関係者からの手紙、情報も含まれるが、通過するものは全て厳しく検閲されており、新大陸での調査を円滑にする目的もあって、必要以上の情報は新大陸に来ない。

……最もそれ以前に、龍歴院や各組織の思惑……龍の守人や龍の乗り手らの存在もあつて、己の意思を以て人間と共に共生するモンスターの存在はひた隠しにされているのだが。

兎も角、彼等が外から来たという事自体が、アステラにとつては一大事である。

本来ならば調査団関係者以外の人間の渡航は基本的に禁じられている、それが新大陸

の生態系への影響を最小限に留める為に採られた厳しい掟……

だが、通常では考えられない方法……古龍の背に乗つて来たという事は、守人か、他の龍の思惑によつて動いている可能性も捨てきれない……

「クシャルダオラに乗つていたのならば、我々と同じく古龍と何らかの関係を持つ存在である可能性は高い……動けるハンター達は古代樹の森で、古龍クシャルダオラとその人間の搜索にあたつてくれ」

アステラを預かる総司令「バン」はあらゆる可能性を考慮し、ハンター達に件のクシャルダオラ達の搜索を命じるのであつた。

邂逅

突如、新大陸の外から迷い込んだと思われるクシヤルダオラ……人間と思しき存在と共に現れた事で、騒然となるアステラ。彼らの目的はいつたい何なのだろうか……

『……クシヤルダオラが、人と……ですか？』

『うむ、我等が住処の側……その北側へと墜落したと思われる』

「……確かに、そこはエリア17のキャンプが近いですね？ 行つてみましよう！」

テトルー達の情報を元に、古代樹の森エリア17のキャンプ地を経由し現地へと急行したレクス達だが……既に人の影すらも無く、墜落現場らしき枝や幹が不自然に擁ぎ倒された痕跡を発見しただけであつた。

「……さすがに時間が経つて居るからか、居る筈もないわな」

「……ですが、痕跡は見付けました」

クリスの導蟲は、クシヤルダオラと人の足跡を発見していた……この痕跡は北へ向かい、穴の向こうへと続いている……この先は古代樹の根元への道、または反対側の「飛

竜の巣」に続いている。

「この痕跡を辿れば、後を追えます……行きましょう！」

一方その頃……マサト達は古代樹の空洞を降り……エリア15から14の方へと移動していた。

「この森は広い上に迷路みたい……複雑に入り組んでるわね」「マップでもあれば、まだ分かるんだけど……」

（取り敢えず、下を目指そう……さつきのキャンプからして、下にあると思う……そこに地図でもあれば、迷う心配もなくなると思うし）

飛べば楽に位置の把握は出来るのだが、食糧もなく当ても無しに空を彷徨うのは得策ではない……マサトはそう判断し、まずは立ち寄れそうなキャンプ地を探すべく下層エリアを目指していた。

空の旅は快適そうに見えて、実は思つたよりも負担を強いるものである、その為ミラルダ達にこれ以上負担を掛けたくない……マサトはそう思った。

実際問題……食糧を喪失し、時間感覚的にも不馴れた新大陸の地で、何ら当てもなく彷徨うのは自殺行為に等しい……彼女達もハンターである分危機管理能力は優れているもの、人間である分マサトよりもか弱い事に違ひはないのだから。

「……植生は、密林に近いわね……水場も多いし」

「里の近くにある大社跡にも似ています……」

「ランポス系かな？　あの黄色いヤツは……」

時々見掛ける黄色い四足歩行のトカゲ……ジャグラス達を尻目に、森の中を進む一向。

マサトの気配に気付いたのか、慌てて姿を隠そうと右往左往している様子が見えた

(ううん、見たこともないヤツばかりだ……さすが新大陸、新種の宝庫だねえ)

他とは隔絶した地形に守られ、独自の生態系を気付いたこの新大陸には……人類の多いシユレイド地方や北のポツケ山脈、広大なドントルマ地方などで見られる生態系とは明らかに異なる……独自の進化を遂げた存在が多くを占めていた。

更に道を進むマサト達……ついに最下層エリアであるエリア8へと辿り着いた。

「アプトノスが居るわ！」

天羅の指す先には、アプトノスが3頭……ゆつたりと草を食んでいた。

子供を連れた親子もいる……そして、現在彼らは食糧の危機である……つまり。

「(獲物おおおお!!)」

アミラ以外が生肉を求めてアプトノスに突撃……当然、アプトノスは驚いて逃げよう

とするが、そこは息ピッタリのハンターと古龍。マサトが逃げ道を封じる様にブレスで竜巻を作り出し、一番大きく太ったアプトノスを足止め……間髪いれずにミラルダと天羅が左右に回り込み、挟み込む形で首を一閃！あつという間に仕留めたのである。

「……お見事ですわ」

自分まで動いては却つて邪魔してしまう、と敢えて武器を抜かず動かなかつたアミラ。

マサトはアプトノスの尻尾を咥えて持ち上げ、近くの大木に引っ搔ける……最早手慣れた血抜き作業だ。

グウルルルツ……！

森の奥深く……漂う血の匂いに誘われ、1体の竜が森を歩く……

それは筋骨隆々で巨大な緑色の体躯と、それに見合う脚……黄色の瞳に、異様に発達した顎……そしてそこから生える、無数の牙の如き棘……まさにソイツは、その身に尽きぬ欲を秘めた暴竜だった。

グウオオオオオオ……！

『』！？』（某MGS風の効果音）

（……この気配、もしかしてさつきの奴？）

『嫌な気配がする……この悪寒、森に何か居るの？』

古龍である2人だけが、その異様な気配に気付く。

森の奥から漂う気配……マサトは声の先を睨み、シオンはレクスを背に乗せて上空へと飛び上がった……

そして、異様な気配と共に現れたのは……

「ツ!? そんな……イビルジョー!？」

「何なのですか?!あのゴーヤさんみたいな生き物?!」

「この雰囲気……もしかして普通じやない……?!」

（え、それってまさか……）

「ええ、たぶん特殊個体……怒り喰らうイビルジョー……！」

足音と、気配……そして森の影から現れた姿……

いち早く気付いた天羅はモンスター名を特定、恐らく初目撃であろうアミラが俗っぽい印象の感想……そして異様な気配の違いに気付いたミラルダとマサトが正解を導き出す……

怒り喰らうイビルジョー……

通常個体ですら怒り状態に移行するとベテランでも撤退を推奨される程の手の付けられない狂暴さを秘めているが、この特殊個体は常に怒り状態である事。

……つまり常時危険度MAX状態の為、通常個体よりも遙かに狂暴でかなりヤバい。

グウオオオアアアアツ!!

獲物というか、外敵というか……それを見た歩くゴーヤこと怒り喰らうイビルジョーの取る行動は至極単純……戦い、倒して、喰らう。

恐怖を煽る暴虐の轟音を上げ、今まさに踏み込んで喰らおうと動き出した直後。

『それはさせませんッ!!』

頭の中に何とも不思議な声と、わずかに遅れて爆発音にも似た轟音が響き、極太の極光がイビルジョーの横つ腹を文字通り焼いた。

ギヤアオオアアアアツ!!

不意の一撃と、想定外の痛み……それが続けざまに与えられ、なおも激しくそれは横から叩き付けられる……さしものイビルジヨーも、現在進行形で与え続けられる火傷のダメージから逃れる為か、はたまたこの連續した痛みを堪え切れずに脚を縛もつさせたか……半ば吹き飛ぶ様な形で盛大に転倒した。

「……な、何ですか今の光……!？」

およそ生物のものではない極光の攻撃……光はイビルジヨーの転倒と同時に途切れ、マサトはすぐさま光の発した先を見やる。

そこからこの場に進入してきたのは、1人のハンターとオトモアイルー……そして体躯こそマサトよりも小さいが、全身は白銀一色、黒龍ミラボレアスにも通ずる4本の脚に一对の翼……そして、およそ生き物とはかけ離れた雰囲気を醸し出す、身体のあちこちに揺らめく幽膜……

「なに……この生き物……新種の古龍?」

「怨虎龍おんこりゆう」マガイマガドとは違う……この雰囲気は、まるで幽世かくじよの様な……」

「あの光は、この子の攻撃ブレス……だつたの?」

3人の女性ハンターと、その後ろに立つ風翔龍クシャルダオラ。

視線の先には、油断なくイビルジヨーを警戒しつつ此方へと歩み寄る
現地新大陸調査団_{5期}でも指折りのハンターと……揺らめく光の残滓を纏い、前の男の後を歩いて来る

冥灯龍ゼノ・ジーヴアン未知の古龍シオアン

「アンタ等か、外から入り込んだ古龍とハンターってのは……」

既存装備とは細部が異なる、雄火竜EXレックスシリーズの装備に身を包んだハンターの男性がマスクを上げてミラルダ達の方へ歩み寄つて来た。

『……ホントにクシャルダオラとハンターさんが……』

更に頭に響く、まだ幼さの残る様な少女の声……マサトとミラルダだけならば、古龍の血による影響だろうと片付けられるが、この声はこの場にいる全員に聞こえていた。

「だ、誰なの？　この声は……」

この中では古龍の声を直接聴くのは初であろう天羅は困惑していた。

『……あく、やつぱり初対面だと戸惑いますよね？　私は、目の前の銀色の……』

グルルルウオオオオツ!!

シオンが右の前足を持ち上げ、手を振るように合図をしようとするが……それを遮る様な雄叫びを上げてイビルジョーが体勢を立て直す。

「チツ、もう少し大人しくしてろよ……！」

レクスが忌々しさを声に出しながら武器を手に走り出す。

「援護します、天羅さんツ！」

「ああっ！」

「私も御供致します！」

ミラルダ、天羅、アミラもそれぞれの武器を構え、レクスの後に続く。

「ニヤー、ハンターが4人も揃えば楽勝ニヤ！」

『私達も……行きますツ!!』

オトモアイルーのタマが、オトモ道具『はげましの楽器』を演奏してハンター達を応援し、それに合わせる形で声を揃えたマサトとシオンも戦闘態勢を取る。

斯くして……

怒り喰らうイビルジョー vs. ハンター4人&オトモアイルー+古龍2体
という変則デスマッチが始まるのであつた。

共闘

グオオオオアアツ!!

どんな生物も怯ませる程の恐怖を煽る咆哮……しかし、ハンターならば止まらない。
……否、止まれない。

怒り喰らうイビルジョーは、放置すればその場全ての生態系を根本から狂わせてしまう存在……尽きぬ食欲の権化であり、全てを喰らい、消し潰す……必ず止めなければ全てが狂う。

「シオン、タマ……援護を頼む、まず俺が前で注意を引く！」

レクスは背中から『双剣リュウノツガイ』を抜き構え、イビルジョーへ向けて走り出す。

「ニヤ！ 攻撃力アップが来たニヤ！」

タマの持つオトモ道具『はげましの楽器』による演奏でハンターに付与されたのは、攻撃力強化【大】……ランダムに引き当たられる能力上昇効果、運良く攻撃力上昇が真っ先に引き当てられたようだ。

レクスの身体を赤いオーラが包み、彼の瞳が一瞬だけ光る……

『ゴーヤは苦いから嫌いです……！』

私は私怨混じりの言葉とともにブレスで援護攻撃……単発の光弾はイビルジョーの左右に着弾し、僅かな隙を作り出す……

「ツ！ 私達も……天羅さん！」

「了解！ 食事の邪魔する奴は、アツクスに殴られて倒れてなツ！」

「私も御供致します！」

新大陸には生息していないモンスター、ネルスキュラのチャージアツクス『アラクネサイズ』を構え、勇ましい台詞と共に天羅と呼ばれた女性ハンターが駆ける……続くのはナルガクルガの狩猟弓『闇夜弓【影縫】』を持つアミラ……どうやら彼女は竜人族の様だ。

最初に声を上げた女性ハンター……ミラルダも自らの得物、セルレギオスの素材を用いた太刀『シミターアルナジト』を抜き放ち、イビルジョーへ一撃を加えようと走り出す。

「「落ち着きすぎつ！」」

突然、3人からのツッコミが入ったのには少し驚いたが……何を話していたんだろう？

(いや、好きだって言われた時点で離れる訳ないでしょ？ これを逃したら婚期が……)

『え？ 気にするのそこですか？』

何故にそんな単語を口にしたのかは分からぬけど、古龍なのに婚期を気にするつて

マサトさんはクシヤルダオラ特有の風ではなく、両前足と頭の一部が、普通の鈍い金属の光沢からまるで宝石の様な目映い反射光へと変化していた。

(……凄い、クシヤルダオラにはない能力……あれはマサトさん固有能力かな)

本来は動的に変化する事のない筈のクシヤルダオラの金属質の甲殻……それを更に異質な能力で変化させているマサトさん。

クシヤルダオラの甲殻……それは金属並の硬度と生物的挙動を妨げない柔軟性を併せ持つた、鉱物的近似物質だ。

普通なら組成変質など有り得ないのだが、マサトさんの身体は通常のクシヤルダオラと同じ黒鉄色のままなのに、変化した所だけは光沢の度合いが明らかに違つて見えた……これは推測だけど、マサトさんの甲殻には見た目以上に凄まじい量の「黒鉛」と呼ばれる物質を含んでいるのだろう。

黒鉛とはいわゆる「鉛筆の芯」だ……そしてダイヤモンドの「同素体」もある。

同素体というのは主成分がほぼ一緒であり、元素構造が違う物質……つまり、マサト

さんの身体の光沢の変化は、甲殻に含まれる大量の黒鉛を超硬密度で表面に固めダイヤモンドを生成して身体を覆う……『ダイヤモンドコーティング』を施しているのではないだろうか？

……もし、他の物質へも変化させることが可能なら、マサトさんの固有能力は『元素変換』という事になる。

そうなれば、事実上マサトさんの甲殻は誰にも破れ得ぬ『無敵の鎧』と化すだろう……例えそうでなくとも……ダイヤモンドは天然鉱物の中で最強の硬度を誇り、電気を全く通さず、熱変動にもめっぽう強い……要は「火」「氷」「雷」「物理」といった、ほとんどの攻撃が意味を為さなくなるのだから。

おっと、考察はここまでにして……

マサトさんは先程の能力で、口の端に光沢のある刃を生成している……黒色ではあるが、あの光沢は間違いなくダイヤモンドの刃だ。

やはり、彼の能力は「元素変換」で間違いないだろう……マサトさんは生成した両刃を咥えて突撃……私は味方に被弾させない様に、隙を伺いつつ適時援護射撃を入れる。天羅さんのチャージアックス斧形態がイビルジョーの顔面を横に殴り、怯んだ隙にレクスがイビルジョーの後方からスリングガーを駆使して飛びながら接近……背中から頭へ切り付けながら通り抜ける独特的の回転斬り抜けでダメージを稼ぎ、そこへアミラさん

の貫通矢が次々とイビルジョーの胸へと命中……大きく怯んだタイミングでミラルダさんは太刀をイビルジョーの太腿へと突き刺し、勢いそのままにイビルジョーの身体を駆け上がりジャンプ！

滯空中に太刀の柄尻にある房紐を利用して手元に戻し、太刀そのものの重量と巻き上げた反動……そして落下エネルギーと遠心力を乗せた渾身の『鬼刃兜割り』を炸裂させた。

即興の4人組バー ティみなのに凄まじい連携……ハンターがモンスター対策専門とされる理由はまさにこの集団戦闘能力なのではないだろうか……

しかし、尋常ではないスタミナを持つイビルジョーは、その忌々しさから更なる怒気を孕んだ咆哮を上げていた……

その咆哮にマサトさんは何かに気が付いたのか、威嚇の咆哮と共に声を上げた。
（危ない！ 避けろッ!!）

その直後、胴体をくねらせてイビルジョーが口から黒煙と紅雷を含んだブレス攻撃を放つ……

イビルジョーのブレスは龍属性……マサトさんは翼全体にコーティングを施し、シリードの様にしてミラルダさん達3人をガード。

レクスもスリングガーで空中に退避し、タマは足元をすり抜けて範囲から離れ……私も

飛び上がつて回避し、全員が難を逃れた……かに思われたが。

グルアアアアツ！

「ニ」 ヤアアアア！ こっちに来るニヤアアアツ！」

足元をすり抜けた所を目撃されていたのだろうか……ターゲットをタマに変え、執拗に脚や顎による攻撃で追い始めた。

しかも、タマの走るその先は大きな段差が壁の様になっていた……薦はあるものの、それを昇る暇などイビルジヨーは与えてはくれない……

『させないツ!!』

タマのピンチに私は脇目も振らずイビルジヨーとタマの間に割つて入り、タマを前足で掴むと崖の上へ向かつて投げ、そのままイビルジヨーを前足で引っ搔く……だが、痛みに顔を歪ませたのは私の方だった。

『きやあツ……あぐっ?!』

イビルジヨーは私の爪攻撃を逆に噛み付いて止め、そのまま体当たりからの回転攻撃を慣行……身体を振り抜く直前に私の前足が離された事で、私の身体は大きく弧を描く様にして崖とは違う倒木の方へと弾き飛ばされてしまった。

着地というか、倒木に叩き付けられたというか……全身を走る痛みに、身体が思うよう動かせない。

痛む体に鞭打つて頭を上げるが、視界にはイビルジョーが再び顎を開き……上から更なる追撃の姿勢……レクスは「やらせるかよ！」とスリンガーを直接イビルジョーに撃ち込もうとしていた。

『……レ、クス……っ!!』

焦つて怒り状態のイビルジョーにスリンガーは却つて危険だというのを忘れているレクスを止めるべく、私はレクスの名前を呼んでいた。

だが直後に響いてきたのは、イビルジョーの苦悶混じりの咆哮だつた……

マサトさんの、クシヤルダオラ特有の風を利用したノーモーションからの飛び掛かり攻撃……咥えられた黒色ダイヤの両刃がイビルジョーの背中を大きく引き裂き、更に風の追撃による巻き上げもあつてイビルジョーは大きく仰け反りながら転倒してしまう。

「大丈夫か?! シオン、タマも……!」

『だ、大丈夫……です、ツく……!』

噛み付かれた右の前足から鋭い痛み……見るも無惨に噛み潰され、複雑骨折は確定……出血もあり、動かす事も儘ならない……

(私も油断していた、すまない……!)

マサトさんが申し訳なさそうな表情で声を上げるが、覚悟の上で私は割つて入つただ。

『……いえ、貴方のせいではありません』

「ニヤア……めんニヤア……」

『大丈夫……タマが無事で良かつた……』

受けたダメージは酷いが、右前足を使わなければまだ動ける……だが既にイビルジヨーは怒りの咆哮と共に、再びブレスを吐こうとエネルギーを溜め込んでいた。

しかし突然、私は全身に凄まじい悪寒を感じた……直後、頭上から抗えない力で全員が大地に押さえ付けられてしまう……

突然の異常事態に、戸惑いを隠せない全員……イビルジヨーも同じように地面に縫い付けられており、苦悶の声を上げていた。

(……くう……つ、何もないのに押さえ付けられ……え……?!)

視界の中にチラリと見えたのは、私とイビルジヨーの間にあつた岩が……ズブズブと地面にめり込んでいく光景だった。

最初から半分以上は地面に埋没していた巨岩なのだが、それが不自然な程に下へと沈んでいく……ただ何かが乗つただけなら動く筈のない程の巨岩なのに。

近付いてくる悪寒の元凶……奇妙な力で押さえ付けられた私達の目の前に現れたのは、マサトさんよりも一回り大きく、黒い甲殻は最初から全身が綺麗な光沢を持つが、マサトさんのコーティングほど宝石のような煌めきではない……磨き上げられた金属に

近い、獨特な艶のある光沢。

殺氣を撒き散らし、無表情のまま低空飛行でこちらを睨みつけているもう1体のクシリダオラだった。

(……ほう？ お前らも転生者か……)

人間には聞こえない、龍同士のテレパシー的な波動で伝わってくる有り得ない言葉……ミラルダさんだけが、そのテレパシーを拾える体质なのか……マサトさんと揃って顔を見合させていた。

(な、何故それを……！ ……まさか……！)

「マサトっ?! ……それって……！」

(……そうだ、俺も転生者だ。グラビトン)

最も……俺のこの超重力能力に耐えられない様じや、俺の敵ではなさそうだがな

尊大な態度をありありと伝えてくる口調で黒いクシリダオラ……黒ダオラは肯定する、その口元は僅かに愉悦に歪んでおり、動けない私達を見下ろして浸つているようだつた。

(……つく……何故、こんな事をする……つ！)

苦悶の声混じりにマサトさんは黒ダオラに問いかけていた……

(ククク、そう心配するな……今日はただ、偶然見つけた俺以外の転生者の顔を見に来てやつただけだ)

これはほんの挨拶代わりにすぎん)

重力……これでこの光景に合点がいく……巨岩が更にめり込むのも、私達の体が思うように動かないのも、あの黒ダオラが重力を操つてこの場^{エリア}全体の荷重を増やしているからだ。

(どう……いう……事だ……！　ぐう……)

(ファン、いずれ分かるさ……せいぜい今を楽しむが良い……)

そう言つて黒ダオラは、自らの体躯を超えるイビルジヨーの巨体を咥えて軽々と持ち上げたのだ。

恐らく、重力の能力を使つているのだろう、イビルジヨー自身も理解できずに慣れようと藻搔きますが……重力の戒めは解けていないらしく、ぎこちない動きしかできていなかつた……

黒ダオラはそのままイビルジヨーを咥えて上空へと舞い上がり、やがてその姿が完全に見えなくなつた所でようやく重力の軛^{くびき}から開放された私達……

転生者が他にも居た……その事実がある一面から見れば、苦楽を共にすることが出来る仲間が見つかったと言える……だが、今起こつた現実は……明らかにこちらを敵視し

て いる 様 だ つた。

確かに全て丸く収まるほど都合の良い世界なんて無いし、諍いは何処かにあると思つていた……しかし、こんな唐突に……それもマサトさんとの出会いも束の間にやつてくれるんだから、たまつたもんじやない。

「マサト……大丈夫?!」

「なんて奴だ、ありや正真正銘のバケモンだね……！」

ミラルダさんは彼を心配して駆け寄る……その近くで、這い蹲つた時に付いた土汚れを叩き落としながら、天羅さんが忌々しく呟いていた。

「彼の者の目的は、一体何なのでしょう……？」

アミラさんも既に冷静さを取り戻し、あの黒ダオラが何を目的にしているのか考え込んでいた。

「トンデモない奴が現れたもんだ……」

『転生者が……私の他にも居た……でも、なんで……？』

私はすっかり黒ダオラ出現のインパクトのせいで、マサトさんという存在が居る事を忘れてしまつていた。

黒ダオラの襲撃後……満身創痍の私達の傷が治るまで森に留まる事を選択し、食料を確保する為にエリア8の東にある最寄りのキャンプへと移動したレクス達。

エリア8のキャンプは入り口が狭く、龍である私達は入れないので、キャンプ地に一番近い高台の上へと移動し、傷付いた体を休めていた。

マサトさんは例の「コーティング」能力で外傷こそないものの、先程の重力によって内臓の一部がダメージを受けている様で、時折苦痛で声が途切れている。

そして私は見るからに重症……右の前足はイビルジョーの攻撃で指の骨が何本か折れ、更に先程の重力で両腕と翼の骨にも幾つかヒビが入つていた。

骨のダメージを知れた理由はこうだ……

骨の様子が知りたいと思った時に視界が突然白黒になり、まるでレントゲンの写真のように骨が透けて見えるようになつてしまつたから。

勿論その唐突な視界の変化に私は驚き……更にその状態でマサトさんをモロに見てしまつた為、素つ頓狂な奇声を上げてしまつたのは言うまでもない。

右前足のダメージは深刻だったが、使わなければ動けない程ではない……マサトさんのダメージがある程度回復した事を受け、私達は彼らを引き連れてようやくアステラへと帰還した。

「…………そうか、怒り喰らうイルジヨーに、謎の黒いクシャルダオラ……」

状況は厳しいが、君達が無事に帰還してくれた事が私が私は嬉しい……良く無事に戻つてくれた、ありがとう」

総司令バンの表情は厳しいままだつたが、レクスが報告を終えると労いの言葉を掛けてくれていた。

「ほう……彼が例の外から来た古龍かい？」

アステラの流通エリアの広場で、私と姿合わせの様に鎮座するクシャルダオラを、デューキさんはマジマジと見ていた。

(この人は……竜人族？…………あの…………彼は？)

デューキさんが竜人族というのも、マサトさんはすぐに分かつたらしい。

『アミラさんと同じ竜人族でハンターをしている、デューキさんです……私の第一発見者でもあるんですよ』

「…………よろしく、さすがにクシャルダオラを間近で見る機会はそうそう無いからね……不快にさせてしまったかな？」

(いえ、そんな滅相もない！ よろしくお願ひします)

マサトさんも礼儀正しく返事を返すが、デュークさんには直接伝わってない様なので私が仲介に入つた……どうやら、龍気を使う会話方法……ネロミエールのスイレンから会得し、私が「龍の言霊」^{ことだま}と名付けた方法でないと、古龍の意志疎通は滞つてしまうようだ。

この傷を治している間に、マサトさんには是非「言霊」を覚えて貰うことにしておこう……

案内

古代樹の森の一騒動の翌日……黒ダオラから受けたダメージを癒すべく、私達はアステラからセリエナへと移動していた。

季節風に乗り、同じく渡りを行うレイギエナ達を追いながらゆつたりと遊覧飛行……

今回は私達古龍の治療がメインなので、私とマサトさんを中心クリス、ミラルダさん、天羅さん、アミラさんと、道案内役に大団長のグランさんが付いて来た……レクスとタマは、引き続き死を纏うヴァルハザクを追うと共に黒ダオラの調査も行う事となり、アステラに残る事となつた。

「ハハハッ、お前達もスリンガーには慣れたか？　こういう小飛竜を使う旅も悪くないだろ？」

新大陸で活用されている装備『スリンガー』の練習を小一時間ほど練習したミラルダさん達をぶら下げる小飛竜の一団を伴い、私達はそれぞれ単独飛行させて貰いながらセリエナを目指していた。

「ええ……景色も良いですよね……」
「風が気持ち良いですわ……」

「なかなか度胸ありますね……私は最初、少し怖かつたんですが……」

クリスだけが最初の頃、怖さを感じていたと暴露する中……レイギエナの1体が私達の存在に気付き、独特な高い鳴き声を上げた。

「……ツ……凄い声……！」

「慌てるんだろうな……ありやあお前達に相当ビビってるぞ」

ミラルダさんはレイギエナの甲高い奇声に少し嫌そうな顔……グランさんはレイギエナ達の恐怖心を煽っているのが私とマサトさんだと見抜き、私はヤレヤレと肩(?)を竦めた。

『はあ……心外です……私達は目的地が同じだけで、害する気は無いというのに……』

古龍である私とマサトさんに気付き、一度は慌てふためくレイギエナ達……だが、いくら身構えても一向に襲われない事にしばらく混乱していたが、気付けば私達のすぐそばをレイギエナ達は優雅に飛び回っていた。

もう時折聞こえてくるレイギエナ達の鳴き声も、仲間内の会話のように……戦う際に聞こえる様な声ではない。

『これは……貴重な体験ですね。』

レイギエナの群れと遊覧飛行なんて、滅多に味わえないですよ?』

「こんな事が……あるんですね!」

アミラさんはレイギエナ達の意外な行動に感嘆の声を上げた……ミラルダさんや天羅さんも、すぐ側を優雅に飛翔するレイギエナ達に目を奪われている様だ。

「私も……シオンと出会つてから、モンスターの生態には驚かされてばかりです」
『……前にレクスと飛んでいた時は、タマの方が怖がつてあまり近づけませんでしたけどね……』

セリエナヘレクスと行く時は毎回、タマも同行するのだが……あの時はレイギエナにトラウマでもあるのか、タマがずっと威嚇しつぱなしだつたので口クに近づく事も出来なかつた。

……それ故これ程まで接近して観察できるのは、実は今回が初なのである。

(レイギエナと言うのか……私達を友好的に見てもらえたのかな?)

誘導してくれている様にも見えるけど、どうなんだろ……それに、何処まで行くのか

(……)

『レイギエナ達の観測はまだ不定期なのですが……彼らは、この先にある凍土地帯へと渡りを行つてます……目的は不明なのですが、比較的若い個体が多い事から「繁殖の為では?」と研究者達は考えている様です』

(うーむ……なるほどねえ)

10体前後のレイギエナと私達は、数時間ほど遊覧飛行と共に楽しんでいると、徐々

に視界を覆つていた薄雲が晴れていき……私達の眼前に巨大な雪山と白銀の大地が広がつた。

「ココからは俺に付いて来てくれ、セリエナはある山岳地帯の南の辺りだ」

グランさんの指示に従い、私達はレイギエナの群れから離れ……山岳地帯の南、セリエナへと続く道がある森を目指す。

ふと、視界の隅っこに見慣れない龍の影がチラリと見えたが、すぐに見失つてしまつた……

森に降りた私達は、セリエナあるあるの例に漏れず凍魚竜ブラントドスの洗礼に遭うも、後ろから現れた猛牛竜バフバロとの繩張り争いに発展した事で、私達は無傷でその場を通過する事ができた……

ちなみにその繩張り争いの最中、あの方言が聞こえたのでバフバロはサクラさんと判明……ついでに繩張り争いもサクラさんの圧勝でした。

「ようこそ、ここが俺たちの第2の拠点……セリエナだ！」

開拓作業も一通り終わつたセリエナは、中央にそびえ立つ蒸気機関から各エリアへと配されるパイプで熱や蒸気を循環させ、屋内は常に一定の温度を保つ工夫が随所に施さ

れており、工房で使用される炉の余剰エネルギーも併せて効率よくセリエナ全体を保温している……その為、山間部という立地も相まってセリエナの中と外では隔絶した温度差になつてゐるのである。

この不思議な光景には、さすがにマサトさん達一向全員が驚嘆の声を上げていた……そりや、セリエナの門の外は凍^{ホツトドリンク}えるほど寒かつたのに、門を潜ればあら不思議……外とあまり変わらない雪景色なのに、気温的にはそれほど寒くないんだもんね。

セリエナの中を進み、指令部のある建物の前に到着する。

入り口に居た獣人族研究者の竜人さんは、私に気付いて手を振り始める……が、隣に歩く黒い姿に目を剥いて絶句してしまった。

「レオン、今良いか？　客を連れてきたぜ」

「大団長？　それにシオンまで……レクスはアステラだと聞いてますが……」

「ああ、今回は任務じゃねえ……主にはコイツらの治療だ」

「治療……？ シオン……お前が怪我を?!」

セリエナを預かる若き司令官のレオンさん……グランさんの言葉に少しだけ首を捻るが、私の足に巻かれた包帯に目を剥き、驚きの声を上げる。

『私だけじゃないんです、彼も……』

【すみません、お邪魔します。】

私の隣に歩いてきた黒い身体……クシャルダオラを認識し、レオンさんは少しの絶句の後、慌てて私に説明を求めた。

「な……クシャルダオラ……？！ え、彼……って、シオン！？」

『彼は私と同じ、共存を望む古龍……クシャルダオラのマサトさんです』

私の言葉に合わせ、お辞儀の様に首を下げるマサトさん。

レオンさんのリアクションは終始驚きのまま……って、私の時とはえらく違いますね。

まあ、私の時はまだ小さかつたですし、可愛がられたのもあって不満はないんですけど

……

・ · ·

「……はあ、なるほどな……我々とは違う思惑で外から来たハンター達……更にはイビルジヨーに次いでもう一体のクシャルダオラ、か……シオンが手も足も出なかつたとは、正直言つて信じられないな」

「だが、事実だ……その証拠に、マサトもシオンも手酷くやられてな……暫くコイツらを、ココの温泉を使って休ませる為に来たつて訳だ」

セリエナには簡易的だが、私の為に……と大きな小屋が作られている。
規模的には私だけでなく、マサトさんが一緒でも余裕の大きさだし、ココの温泉の効力なら、この怪我も早く治す事ができる……その間に、マサトさんに『言霊』を伝授する時間も取れるだろう。

……それに、コツチの工房を預かる腕利きの技師、2期団の親方こと『マイトさん』なら、ミラルダさん達の武器のメンテナンスもできるしね。

「……え、武器のメンテナンス……ですか？」

『はい、ココの工房なら腕利きの方も居ますし……イビルジヨー戦での動きに、少し違和感を感じたので……』

イビルジヨー戦での動きを外側から見ていた私は、新大陸で活動するハンター達……主にはレクスを……だけど、それ以外にも様々な武器種を扱うハンター達を観察していた。

あの時のミラルダさん達からは、幾つかは別大陸のハンターだからと判る動作もあつたが……共通する武器の動作や武器そのものの挙動に少しだけ違和感を感じた……それは多分、武器が本来の性能を発揮していらない事によるものだと私は思ったのだ。

「そうね……確かにココ最近、本格的な手入れは出来てないわ……」

天羅さんはその危惧を肌身で感じていたようだ……ハンターの扱う武器は、全体的にかなり頑丈に見えるが、意外にも纖細なパーツの方が多い。

特に複雑な可変機能を持ち、内蔵したビンに蓄積させた高出力のエネルギーを武器に付与するスラッシュアツクスやチャージアツクス……砲撃や竜撃砲によつて少しずつ銃身の損耗が起きてしまうガンランス……特に細かなパーツが多く、その僅かな歪みが弾道の正確性を損ねてしまふボウガンや狩猟弓など……使い手が日々行つているメントナンスだけでは、解消しきれない部分が必ずある。

勿論その他の武器の切れ味等も、丹念に磨けばそれなりに復活はするが……根本的な欠損となると必ず工房にお世話になる、武器ごとにその頻度が違うだけなのだ。ミラルダさん達の武器のオーバーホール……時間の掛かる問題だが、治療にもそれな

りに時間を要するので、待つ間に出来上がると思う。

『そうですね……確かに、今は戦闘を目的にしてはないと願いしましようか』
『……だ、そうですよマイトさん』

工房へと案内しつつ話をまとめながら、ミラルダさんの言質を取ったタイミングでカウンターの前に3人を並ばせ、私はカウンターを挟んで待ち受けていた人物へと私は話題を振る。

「ホウ？　お前さん達が外からのハンターか……見たこともねえ素材の武器だが、手入

れの基本はだいたい同じだ……俺ら2期団の技術力を見てやるよ！」

2期団の親方、マイトさんはヤル気満々で胸を張り……後ろの助手達も腕を上げ、気合いの入った掛け声を上げた。

伝授

『……もつと、込める力を抑えて……それじゃ強すぎるよ』

『……シ……これ……つま……調整……キツツ……』

途切れ途切れだけど、マサトさんの声がちゃんと耳に響く。

……はい、今まさに『龍の言霊』……いわゆる万能話術の練習中です。

マサトさんは風を操る古龍クシヤルダオラ……自身の纏うオーラ気を大気に混ぜて操るだけあつて、やり方を覚えるのは早かつた……のだが、用いるエネルギーの出力調整に苦労していた。

この『龍の言霊』とは、鳴き声や吐息にほんの僅かなエネルギーを含ませ、ヒトの五感に合わせた特殊な『波長』として大気に発し、『一種の声』として相手の聴覚・または脳内へダイレクトに響かせる方法だ。

地脈エネルギーを自在に操れる……らしい私は、これだけ緻密で繊細なエネルギー操作も難なく行えている……けれど本来、大雑把にしかエネルギー操作をしない古龍に、いきなりこんな無茶振りを要求するのはさすがに難易度が高過ぎたみたい……

マサトさんも頑張つてはいるものの、ヒトの感覚に合わせる事に難儀しており……込

緻密なエネルギー操作

められたエネルギーが強すぎて、伝えるべき『思念』が搔き消されているのだ。
 (…………だはあああああ…………なにこのムズさ！ 鈎に糸を通すよりも難しいよ！)

ガツクリと首をもたげるクシャルダオラ……悲鳴にも似たマサトさんの鳴き声言い訳が小

屋の中に響く。

『何ですかそのイメージ……あ、そうか……マサトさん、風で感覚を掴みましょう！

いつもの暴風を纏うやり方で！』

エネルギーの操作は、一度感覚さえ掴めば他に反映させる事もグッと楽になるハズ……ならば、得意な分野で細かなエネルギー操作のコツを掴む方が、より近道になり得る……と、シオンは考えたのだ。

(何か……さつきよりも、難易度上がつてない？)

ネロミエール

『私は元々、エネルギー操作が得意な種族らしいので……スイレンから概念を教わっただけで出来ましたし』

感覚的な部分は個人的な違いの大きい部分である故に、自らで掴んで貰うしか方法はない……

種族が違うが故に横たわる大きな問題であつたが、シオンの種族的特徴を鑑みて、少し考え込むマサト……やがて意を決し、風のコントロール訓練の為……マサトはシオンの案内でセリエナを離れ、なるべく風の被害を抑えられる様な場所……大蟻塚の荒地へ

と移動するのであつた。

大蟻塚の荒地……そこは巨大な蟻塚群や、地下水源のある複雑な地形の地下洞窟と、そこから伸びる湿地帯や森林が奇妙な形で噛み合わさつた複雑怪奇な場所だ。

全体的に荒地だが緑や水源もあり、北部の砂漠……だが暑くはない荒涼とした荒地と、西部の森……そしてその森から中央部の湿原を貫き、南東の沼地へと流れる水が多種多様な生態系を育んでいる。

私達はまず、中央寄りにあるキャンプ近くへと降り……そこからよくクルルヤツクが寝床にしている丘、エリア6へと移動……ココなら竜巻を起こしてもさほど被害は無いだろう。

『まずは最弱出力がどれくらいなのか、一度見てみないと……』

私の提案を受け入れ、マサトさんは自身の最弱出力で風を起こす……だが、古龍クシャルダオラの風は如何な最弱だろうとその規模も強さも凄まじく、瞬く間に大量の砂を巻き上げる竜巻となつていろんな物を吹き飛ばしながら50mほど進んでもようやく消える……

あ、クルルヤツクが落ちてきた……さつきので飛ばされてたのかな？
つてマサトさん……テヘペロ顔したつてダメですよ？

(最弱出力……結構抑えたつもりなんだけどなあ……)

『うーん、何かしら指標というか……これくらいという感覚を掴んで貰えたら、かなり楽になると思うんですけど……』

私の種族……ゼノ・ジーヴァと呼ばれる新種の古龍は、地脈をはじめとする様々なエネルギーの精密操作に長けている……らしい。

だからこそ、大気や大地に流れるエネルギーを直で感じたり、意識を集中させる事で緻密な操作も出来る……しかし、エネルギーの操作自体はクシヤルダオラも日常的にやつてるので、強弱の感覚さえ掴めばコントロールそのものは可能なハズなのだ。

『仕方ありません……私がマサトさんに対して直接エネルギーを流すので、その強さで感覚を掴んでください……あ、頭を少し下げる下さいね』

(…………え？…………あ、うん。…………んなつ!?)

マサトさんの曖昧な返事を喰い気味に肯定と処理し、私は下げられたクシヤルダオラの顎に額を当て、前足もマサトさんの胴体に当て……微調整したエネルギーの波動を直に流し込む。

たっぷり30秒ほど時間を掛け、体表に電気を流す様なイメージでエネルギーの流れを作り……マサトさんに感覚を掴ませる……

もう良いかな、と流し終わって額と片手をマサトさんから離れたが……何故かマサト

さんはクワツと眼を見開いたままガツチガチに硬直しており、それから5分くらいの間
……一切微動だにしなかつた。

……力の加減、間違ったかな？ それともクシヤルダオラを硬直させちゃうヤツを、
知らない内に混ぜ込んじやつてた？

『……ど、どうかな？ 聞こえ方、変じやない？』

『おおく、ちゃんと聞こえますよ……後は皆さんと会話も出来れば、成功ですね』

フリーズから復帰したマサトさん……早速コツを掴んだのか、先程までとは段違いに
声の通りも響き具合も適度なものになっていた。
やつぱ理知的な理論より、それぞれの感覚頼りな存在なのね古龍つて……なんか釈然
としないけど。

さて……後はミラルダさん達との会話で、合格判定のテストだ！

意気揚々と、マサトさんと共にセリエナへと戻る途中……眼窩に広がった陸珊瑚の森の一角に、揺らぐ大きな2つの気配を感じた。

私は今まで直に見た生き物以外、ほぼ文献でしか知らないので、飛んでいる私達の下で激しくケンカしている……赤と黒の大きな犬っぽい2体の生き物を見るのは初めてだつた。

『あれ……犬……かな？ 同種（？）の黒い方と縄張り争いしてる……』

当然マサトさんが知る訳もなく、私は姿形を頼りに文献の資料を漁つていた頃を思い出す……

確かあの生き物は……オドガロン、だつたかな？

オドガロンは毛皮を持たない獣のような牙竜種で、主に死体の肉を漁り、広い縄張りを持つ……雌雄の見分けは付かないが、一般的に雌の方が一回り大きい……と文献にはあつた筈だ。

ヴォオオオオオオオンツ！！

グルルルルツ！！

激しく暴れ回る2匹のオドガロン達を尻目に、私達はミラルダさん達の待つセリエナへ、空路を並んで飛翔するのであつた。

それから数日後……ミラルダさん達の武器の手入れが終わつたとの事で、私達は先にトレーニングエリアにて待機し、工房で受け取りを済ませたミラルダさん達が到着するのを待つた。

「マサト、シオンちゃん……お待たせ」

すっかり小飛竜の扱いにも慣れたミラルダさん達……もうアステラやセリエナのハンター達と遜色ない手際で、マサトさんと私が待つこのトレーニングエリアへと降り立つた。

ココは仮想標的や樽などを使つて、武器のテストを行う為に作られた場所なので、ミラルダさん達の武器をテストするにもちょうど良い。

「マイトさん達の技術は凄いわ……アタシのアックス、まるで新品みたいに直つてる」

天羅さんが早速いつもの要領でチャージアックスを構える……だが、その手に掛かる武具は

「……!? 軽い……！」

单なる武器の重量ではない、使い勝手という意味で軽快さを感じた天羅……しかも以前よりも手に馴染む。

「本當ですか……こんなに手に馴染むのは何故……？」

「弦が前よりも格段に引きやすい……でも威力はほとんど落ちてない、どういう事で

「しようか？」

「そりやあお前さん達の癖に合わせた調整の結果だ……俺らは隔離されたこ新大陸の中で使える物を探しだし、大事に使つてゐる……だから結果的に長く使える様に、最初の内から使い手の癖に合わせておくのさ。

癖つてヤツはなかなか抜けないモンでな……時には無理な力が加わつて武器の寿命を縮めちまう事にもなる。

お前さん達の武器の使い込み具合から、癖を読み取つた上で設計し直したのさ……勿論、使い勝手はそのままにな、ガハハハツ！」

マイトさん達は、損耗した武器のパーツを交換する際にそれぞれの癖に合わせて微妙に調整し直したパーツを使い……僅かな不備すらも一つ一つ丁寧に潰していくのか

……

マイトさん達は使い手の癖を見抜き、武器に反映させる天才的な技量と眼力……そして既存に囚われない柔軟な発想力の持ち主だ。

「「マイトさん、ありがとうございました！」」

「ガハハハツ！ 良いって事よ！ 向こうの新素材を扱えたのも、俺達にや良い刺激になつたからな」

既に新大陸で結構な時を過ごしたマイトさんにとって、セルレギオスやネルスキュラ

の素材は未知の世界だつたようだ……何かまだウズウズしてゐる。

『……良かつたね、3人とも』

タイミングばつちり、突然響いた男の声にビックリして周囲をキヨロキヨロしてゐるミラルダさん達……ココにはマイトさん以外、人間の男性は居ない。

そこから導き出される結果に、最初に行き着いたのは……
「あつ……もしかして……マサト……なの？」

「えっ?! これ、マサトの声なのか!?’

「マサトさん……これが貴方の声なのですね……」

『……うん、やつと皆と自由に話せるよ!』

ミラルダさん、天羅さん、アミラさん……3人それぞれのリアクションを経て、マサトさんが次の言葉を紡ぐ……

短期間で習得したとはいゝ、思考や発想力は人間と同じマサトさんだ……モノにすれば、応用はさほど苦もなく話せた私はともかく……長い期間苦楽を共にしたマサトさん

序盤からさほど苦もなく話せた私はともかく……長い期間苦楽を共にしたマサトさんとミラルダさん達なら、感激も極上のはずだ……良かつたですね、マサトさん♪

冰龍

マサトさんの修行から戻り、セリエナで武器のメンテを終えた後……アステラで異常事態が起きていると聞いた私達は、季節風に逆らうルートでアステラへと戻った。

『……何でしよう、何か違和感が……』

「何かがいつもと違う……こう、いつも見てている景色が少しだけ変わっている様な……『……そうかな？ 特に変わった様子は見られないけど

「シオンちゃんは、何か違うと思つてるの？」

『それが何なのかは分かりません、ですがこう……違和感を感じるんです』

「私は、この森をそんな見慣れて無いからな……何が何だかサッパリだ」

さすがにミラルダさん達は森の様子に詳しくないので気付かなくて当然だ……だけ
ど私の感じた危惧は、思つたよりも深刻な事態だった。

「最近、ジャグラス達の動きが鈍いんだ……」

「君達はブケブケを見なかつたかい？」

「アプトノスの数が目に見えて減つてゐるんだ」

「特産キノコが……見つからないっ!!」

定期的に森へ出るハンター達の多くは、拠点で消費する食糧の調達や偵察……住み着いている特定個体のモンスターの生態調査を行う者がほとんどだ。

森の様子に変わった事が無いかと聞いたところ……ほぼ全員が何かしら今までと違うと感じていた。

『一体、何が起こっているのでしょうか……』

「さあな……だが、このままじゃ食材の補給が出来ねえ……」の事態が続くんじやメニューを見直す必要も出てくる」

調理ネコ達も一様に悲壮感を漂わせており、アステラの料理長を務めるデイランさんの言葉に、意氣消沈の鳴き声を上げた。

『思つてたよりもかなり深刻じゃないですか……!』

原因は不明ながら、古代樹の森の生き物達が活動を鈍らせたり、環境の変化で姿を消して食糧の確保が難しくなっている……これはさすがにかなりマズい事態だ。

『おや？ レクスさんは？』

この異常事態に不在のレクス……マサトさんが気付いて問う。

「数日前、例のヤツ^{黒タオラ}が陸珊瑚の台地で目撃されてな……彼はその調査に向かわせている」事態が急変したのはレクスが出立した後の事だったので、彼はこの事態を知らないと

の事……しかし、黒ダオラの動向を掴む事が出来れば、ハンター総出で消耗を狙い、彼を止められる可能性も出てくる……

『総司令バンさんは重要度を鑑みた末……黒ダオラの動向調査をレクスに一任する事とし、敢えて呼び戻さなかつた様だ。』

『そうですか……仕方ありませんね、エイデンさんに同行をお願いしましよう』

エイデンさんは、レクスと同じ5期団のハンター……本土ではなかなか名の通つた人らしく、ドントルマやミナガルデ出身のハンター達は彼を知つてゐる人も多かつた。

「あのシオンちゃんが、同行に俺を『指名とは……モテ期かな?』

「……馬鹿な事言う暇があるなら、この荷物を運ぶの手伝いなさい！」

「おお怖つ」

エイデンさんの、この悪癖さえ無ければ人気ありそんだけどなあ……パートナーの編纂者「エリス」さんの気苦労が絶えないのには同情する。

森の調査は私達だけでも良かつたのだが、マサトさん達も「今までのお礼」として手伝つてくれる事となつた……これぞ『持つべき物は友達』という事ですね。

『古龍の気配が微かにします、二手に分かれましよう……マサトさん達は海岸沿いの方をお願いします、私達は古代樹の周辺から』

『分かった、キミ達も気を付けるんだよ？』

「ええ、そちらも……危険を感じたら、スリングガードで救難信号を……すぐに向かうわ」「美人さん達の頼みなら、何を置いても駆けつ『ドゴツ』ガフツ……！」

エリスさんは心配して言つてゐるのに、エイデンさんの茶々で台無しだ……エリスさん、次は私が頭を咥えますよ……こう、上からこめかみ部分を挟み上げて『締め上げる』感じで。

先程まで茶々を入れていたエイデンさんだつたけど……調査を開始した直後から、その顔付きや態度は一変していた。

「……コイツは、凍つてるな……生物の痕跡にしちゃ珍しい……というか有り得なくないか？」

至る所に散見される『凍つた足跡』……生物が物を凍らせる事など通常ではあり得ない。

生物とは基本的に熱を発しながら生きている……火竜リオレウスの様に燃やせても、凍らせるなど不可能なのだ。

『……凍る……ベリオロスとはまた違う痕跡ですよね……一体誰の痕跡なのでしょうか？』

「ううん、私にもサッパリ分かりません……」

「取り敢えず、痕跡を調査して……情報を集めましょ、もしかしたら新種かも」エリスさんの提案に乗り、3人で周辺の痕跡から僅かな情報を収集する……そういえば、マサトさん達は大丈夫なのだろうか……

その頃、マサト達は……

ガアアアアオオアオオンッ!!

『さすがに2体同時は勘弁して〜つ!!』

ヴオオオアアアアツ!!

「繩張り争いの真っ只中に出るとかマジであり得ないわ！ どんな確率よ?!」

『取り敢えず撤退いい!!』

……事の発端はこの数分前に遡る。

海岸沿いの調査のため、降り立ったキャンプ地から樹木の間をすり抜けてエリア1へ

と出ると、目の前でナルガクルガとデイノバルドが壮絶な縄張り争いの真っ只中……しかも、避けた先でマサトがうつかり光虫を潰してしまい、放たれた強烈な閃光がデイノバルドとナルガクルガへ命中……更にその影響で2体とも怒り状態へと移行して闇雲に暴れ始めてしまい、どんどん收拾が付かなくなっていく……

トドメにデイノバルドの刃尾が叩き付けられた直後にナルガクルガがその真上に移動、デイノバルドが刃尾を上に振り上げる動作にナルガクルガが捲き込まれ、まるでピタゴラスイッチの如くデイノバルドとナルガクルガは、お互いの行動が切つ掛けでダメージを蓄積させつつ延々と互いを無意識の内に煽り続け……ようやく閃光の影響が収まつた直後に2体が視認してしまつたのは、何故かマサトの姿……

「ちょ……やばっ!!」

天羅が次に何が起こるか気付くも、時既に遅し……

『てめえのしわざかアアアアアア!!』※意訳です

慌ててキャンプに逃げ戻つたマサト達……その後デイノバルドとナルガクルガが去るまで、ろくに動く事すら出来ずにいたのである。

森での調査を終えた後……再びセリエナで驚くべきモノが発見されたとの事で、トンボ返りの如くセリエナへと向かつた私達に見せられたのは……完全に芯まで凍つてしま

まつたアンジャナフの死体だった。

「ああ、お前達か……見てくれ……」

あのアンジャナフが完全に凍結しちまつてゐる……しかも、皮膚片や細胞組織の状態から、凍結した直後までは生きていたらしい」

『そんな……?!』

『嘘でしょ?!』

セリエナの冷気がいくら強くても、たつた数分でアンジャナフを凍結させる事など不可能だ。

……現にアンジャナフは、セリエナの外で元気に活動しているのを何度も目撃されてゐるし、況してや生きている生物をそのまま凍らせる事などあり得ない……通常の凍死なら、先に寒さで命を落とした生き物が凍るという順番なので、生きたまま凍るなど自然界では起こり得ない筈なのだから。

「……もしかして、これが今回の現象の大元……?」

ミラルダさんは何かに気付いた様だ……古代樹の森の異常な寒冷化に始まり、残された痕跡……その痕跡は、他の地域に出向いたハンター達からも発見の報が寄せられており、各地で発見されていた。

そしてここに来て、凍ったアンジャナフの発見……元凶は明らかに移動しているの

だ。

「成る程……確かにこれが、仮に生物の仕業だとすれば、移動しているのは納得だが……」

『そんな生物が、存在しているのでしょうか……？』

仮に生物……古龍だとしても、何の目的があつて移動しているのか……何故、今になつて活動しているのか……大まかに分からぬ事は2つあつた。

「兎に角だ……元凶が古龍なら、捜索方針を一部変えなくちゃならない……」

エイデンはシオンを連れて、古龍の目撃情報が多い龍結晶の地を調査してくれ……ミラルダさん……貴女達が部外者であるのは承知の上だが、今一度協力をお願いしたい』レオンさんの指示にエイデンさんは頷き、早速準備に取り掛かる……

協力要請を受けたミラルダさん達も「ここまで付き合つた訳だし、最後まで見届けたいわ」と快諾してくれた。

同時刻……龍結晶の地に、1体の古龍が舞い降りる。

その全身から放たれる極低温の冷気は、古龍の足元から大地に伝播していき……至る所で瞬く間に霜柱が発生、更に加速度的に大気温は下がっていく。

『……彼の龍は、一体何を画策しているのでしょうか……？』

もし、^{わたくし}私の妨げになるのでしたら……覚悟して頂きますわ……!』

一方、マサトは龍結晶の地に赴く前……1期団のフィールドマスター「カルラ」さんと話をしていた。

『アンタが噂のクシヤルダオラ……マサトって言うんだつけ? アタシはカルラ、調査団の1期メンバーでフィールドマスターをやつてるわ』

『え、あ……どうもです、クシヤルダオラやつてますマサトです』

突然話し掛けられたマサトの反応に苦笑するカルラだが、すぐに切り替え話を切り出す……

「アンタ達は確か、この地に居るっていう古龍に会いに来たつて言つてたわね?』

『ええ、確か……イヴエルカーナつて……』

マサトが名を出した瞬間、カルラさんの表情が急変しマサトの襟元へと踏み寄る。『そいつは口伝にのみ残る伝説の古龍よ、その名はどこで知つたの?』

『え、それは……あの、和の国にいる……ナルハタタヒメとイブシマキヒコっていう2体の古龍から……』

和の国……正確にはシキ国と呼ばれる、三日月型の島国に存在するカムラの里……そこにはのみ出現するという1対の古龍……それが、ナルハタタヒメとイブシマキヒコで

あつた。

「……知恵ある古龍達はお互いを認識し合い、秩序の輪を描く……あの人の言っていた通りね……！」

カルラさんはマサトの情報にブツブツと考察を深め、やがてひとつの結論に達した。「アタシも同行するわ……アンタ達だけじゃ、イヴエルカーナを探すのは骨が折れるわよ？」

『ええっ？！本気ですか？！』

イキナリ同行すると言い出すカルラ……マサトは驚くが、どうやらイヴエルカーナの搜索にアテがあるらしい……

『カルラさんも来るんですか？』

私はマサトさんの後ろから回り込んできたカルラさんの姿に気付く……背負った荷物を見る限り、絶対に付いて行くぞという気概がアリアリと見える……これはマサトさ

んが何かヤラカシタのかも知れない。

『……分かりました、カルラさんはクリスと私の背中に……マサトさん?』

マサトさんの方を見ると、ミラルダさん達が鬼気迫る形相でじやんけんをしていた
……背に乗る枠というか……同行する際の方法をアレで決めているらしい。

……ぶつちやけ、最初ココに来た時に3人とも乗つけてたんだからそうすればいいの
に。

道中は何事もなく、龍結晶の地にある初期キャンプのエリアへと降り立つ全員……だ
が、降り立つ前から私とマサトさんだけは警戒を強めていた。

『シオン……あの先だ、かなり強い気配がする』

『はい、私もしつかりと感じています……間違いなく古龍ですね』

キャンプ地からすぐ地下へと降りる洞窟の入口から、物凄い威圧感が漂っていた……
新大陸で歴戦の猛者であるレクスなら、同じく真っ先に警戒しているであろう。

ミラルダさん達もマサトさんの様子から察していた様で、万が一を考慮し持ち込んだ
アイテムを確認したりしている。

『……シオン、あの下には古龍が居るんだな?』

『ええ、まず間違いなく……強さは私なんかよりも遥かに上の相手です』

『そういうシオンも、実際は結構強いと思うんだけどねえ……』

エイデンさんも珍しく眞面目モードだ、マサトさんが私の自己評価の低さを疑問視しているが、今は置いておく。

ハンター4人と編纂者2人……そしてフィールドマスターに古龍2体という大人数で、初期キャンプからすぐ地下へと伸びる道を進み……エリア8へと降りていく。

「これは……」

「前に来た時より、随分と涼しいわね……」

「おばさま、ここにも例の痕跡が！」

エイデンさんがこの場の違和感に気付き、エリスさんが気温の変動を口にする……クリスが駆け出し、カルラさんに見せた痕跡は……完全に凍つた植物と、それを踏み付けて残つた足跡であつた。

「……の痕跡、どこかで……」

カルラさんはクリスと考察に入り、エイデンさんとミラルダさん達はハンターらしく周囲の警戒へと移行……私もマサトさんと二手に分かれて警戒しつつ、周囲を探索する。

ふと、そこへ風が吹き込んできた……しかし、溶岩流が流れ込んだりするエリアが近いのに、吹き込んでくるこの風は随分と涼しい……いや、これは涼しいというレベル

じやない。

『……つ!? 皆さん警戒を、来ます!!』

私の声に反応した全員が一斉にコチラを向く……その直後、奥のエリアへと続く通路の方から白い何かが凄まじい速度で放たれ……それはクリスの頭上を通過し、壁面を一瞬にして凍結させて巨大な氷の塊を生成した。

「……構えろ! 奴が突っ込んできたぞ!」

クルルウウアアアアアツ!!

独特な鳴き声と共に滑空攻撃を仕掛けてきた白い大きな影……狙われたのはマサトさんだつたが、マサトさんは得意の暴風壁を展開して自身は上空へと退避、白い影は暴風へと突っ込むが大したダメージにはなっていな様だ。

『イキナリな挨拶だね……短気なのは損だよ?』

『マサトさん、油断しないで! あの白いのは……!』

暴風の渦から更に白い液体が風を切り裂いて放たれ、今度は私の足元へと着弾……先ほどと同じく、一瞬で氷塊を生成していく。

(間違いない……この速度で物を凍らせるなら、『過冷却水』!)

過冷却水とは、液体が凍る温度よりも低い状態でなお液状を保つてある水の事で、何らかの刺激を与えるとその瞬間からガチガチに凍ってしまう。

あの生物は口から過冷却水を吐いてこの現象を引き起こしているのだ……生物にとつて、凍傷がもたらすダメージは火傷よりも遥かに酷く、僅かなダメージでも致命傷になりかねない。

『あのプレスは絶対に避けて！　おそらく当たつたら即死は免れない……！』

全員に一瞬だけ戦慄が走る……だが、常に命の危険と隣り合わせの世界に生きるハンターは、その程度では止まらない。

「俺が援護する、美人さん達は無理しない様に……深追いせず、一撃離脱で構わないから」

「了解！」

「見たこともない相手ね、久々に腕がなるわ！」

「私も、二方向から攻め立てます！！」

アミラさんの矢を皮切りに戦闘が開始される……クリスやカルラさん達をフイールドの入り口まで下がらせ、私も援護しに戻ろうとした時、カルラさんから衝撃の一言が飛び出た。

「待ちなさいアンタ達！　ソイツこそが口伝に残る伝説の古龍……アンタ達の探してた『イヴエルカーナ』よ?!」

……え、マジっすか……？

強襲

凄まじい速度で放たれる白い液体……壁や床に当たつたその場から瞬く間に氷へと変化し、視界と足場を奪つていく……

『アナタ達……何故、人間などに手を貸しているのですか!?』

それにアナタは、彼の龍の同族……却つて好都合ですわ！　アナタ達の企み、全てこの場で吐き出して頂きましょう!!』

言うが早いか、イヴエルカーナは空中に舞い上がり、マサトさんに対し何度も尻尾……その先端にある鋭い冰刃を振るう。

驚きながらもそれを回避するマサトさん……両前足をダイヤモンドで硬化し、口元にも結晶刃を咥え、連続で振るわれる冰刃を巧みに捌いて避ける。

『「「マサト（さん）!?」』

『来ちゃダメだ!!　彼女は何か誤解してる、まずはそれを解かないと……！（え、シオン？）』

ミラルダさん達が武器を構え踏み出すも、マサトさんはそれを静止……確かに何か誤解をしてしうだけど、あのままでろくな話も出来ない。

マサトさんはイヴエルカーナの背後にこつそり接近する私に気付いたが、幸いイヴエルカーナはマサトさんに対する全神経を注いでいるのか、背面への注意が疎かになつてゐる……私は地上で密かに移動し終えると、飛翔と同時に前足を下から前方へ回り込ませ……

『やめんしやいツ!!』

『ツ?! しまつ……きやうんツ?!』

羽交い締めからの空中投げっぱなしジャーマンスープレックス……投げ技は初挑戦なのでさすがに細かい所まで気が回らなかつたが……イヴエルカーナはほぼ垂直に叩き落とされるも、何とか頭を守ろうとして首を曲げた為に背中を強打。

『……ツ……やつてくれましたわね……! え……つ、あれ……ツ?!』

翼が広がつていた事が仇となつたのか横倒しにならず、なんと足が真上を向いたまま綺麗に安定してしまつた……

さすがに歴戦の猛者らしく、この程度で気絶はしない……しかし、綺麗に安定した逆さま体勢は足の動きではびくともせず、自重と翼の大きさのせいで翼 자체もほぼ動かせなくなつてゐる……あまりに無防備で滑稽な体勢に、私を含む全員が絶句したまま状況の理解に時間を要した。

『……何が、どうなつて……くつ……た、体勢が……?!』

ジタバタもがくも全く体勢を崩せず、躍起になつて更に足をジタバタさせるイヴエルカーナ……

『……ふふおつ……!!』

あ、マサトさんが耐えきれなくなつて吹いた。

それを皮切りに、ハンター全員が一斉に吹き出した……

「ぶはつ……ちよ……待つて……苦し……何で……そんな綺麗に逆さま……アハハハツ！」（エイデン）

「シオンちゃん……さすがに投げっぱなしは……フフフフツ!!」（ミラルダ）

「あははは!! 古龍が逆さま……あはははつ」（天羅）

「くくつ……すみません……さすがに耐えきれません……くふふふ……」（アミラ）

あ、ヤバい……私も、もう無理。

『……ふはあつ……!!』

ごめんなさい……さすがに耐えられません……

『何を笑っていますの!? 私、ここから動けませんのよ！ 少しは同情するとか無いんですの?!』

ごめんなさい、本当にごめんなさい……

「まさか……古龍のこんな姿を見るなんて……ふつ」

「……やめなさいよクリス、笑うなんて……くふつ」

「……はあ……あんた達、もう少し緊張感を持ちな……」

『……あの……申し訳ありません、急に襲つたのは私の不手際です……ちゃんと謝りま
すわ……ですから、この体勢を……何とか……して頂けませんこと?』

さすがに惨めさを痛感したのか……急にしおらしくなつて助けを求めたイヴエル
カーナに罪悪感を感じたので、私はマサトさんと協力し、綺麗に逆さまで安定したイ
ヴエルカーナの体勢を変える。

『……風で身体を浮かせられるかな?』

『この冷気、直接触れない方が良さそう……』

『れ、冷気が邪魔なら引っ込めますわ! だから早く……ううつ』

あ、さすがに涙目になつてる……マサトさんの風で重きを軽減させ、冷氣を引っ込め
たイヴエルカーナの身体を横倒しに持つていく……動きに応じて、イヴエルカーナは自
分の翼が動かせるようになると、邪魔にならない様に畳んでくれた。

横倒し状態になつてからは自分で元に戻り、立ち上がる……

『……ありがとうございますわ……アナタ達、普通にマトモな方達でしたのね……』

普通にマトモつて……まるでマトモな相手の方が少ない様に感じている風な言い方

だなあ……

感謝の言葉と共に下ろした頭を戻し、イヴエルカーナは居住まいを正してから自己紹介を始めた。

『私は「マリナ」……人間達からは「イヴエルカーナ冰龍」と呼ばれておりますわ』

『シオンです……こちらこそスミマセン、止めるのに深く考えずあんなやり方で……』
『クシャルダオラのマサトだよ……誤解は解けたかな?』

『それはもう……よく見れば、あの黒い奴とは雰囲気から違いますものね』

会話そのものは物腰柔らかく、何処かの、デキる貴族のお嬢様みたいな雰囲気……でも、最初の問答無用ぶりや逆さまの時に見せたギャップのせいで、世間知らずでお転婆なお嬢さま感が拭えない……

自己紹介を済ませると、戦う雰囲気じやない事を察してミラルダさん達も武器を納める……

『それで……アナタ達は何をしにこの様な場所まで?』

『それは……』

『イブシマキヒコに、ナルハタタヒメ……』

私達を知ると言う事は……恐らく「シロウ」と「キヨヒメ」の事ですわね？……力

ムラの里からなら、さぞ長旅だつた事でしよう？』

マリナさんは、マサトさんからイブシマキヒコとナルハタタヒメの事を聞くと、すぐに思い至つた様だ……懐かしい雰囲気を出しながら、御使いとして遠路はるばる来たマサトさん達を労つてくれている。

『……あれ？ でも、あの2人は「彼」って……』

降つて沸いた疑問……ナルハタタヒメ達から頼まれた時、イヴエルカーナの事を「彼」と言つていたらしい……しかし、マリナさんはすぐにその理由を教えてくれた。

『……ああ、2人と良く会つていたのは、私の弟「シモン」ですわ。

あの子は数年前、フラヒヤ山脈の方へと旅に出て……今は音信不通ですの。

あの子から、旅立つ前に2人の事を聞き……私が代わりに待つ役を……』

『そうちつたんですか……』

フラヒヤ山脈と言えば……確か「ポツケ村」があり、「^{キリン}靈獸」や「崩龍」の生息域もある地方だ……

マサトさんの“旅の出発点”とも聞いている……成る程、あの地方ならココと近い環境だし、何か目的があつたのだろう。

『……もしかしたら、すれ違つてたかもしれないね』

そんな事を呟きながら、マサトさんは色々と思い出していた様だつた。

ミラルダさんから2色の宝玉を受け取り、感慨深く目を瞑るマリナさん……

しかし、数秒後……マリナさんは何かを感じた様に振り向き、私達に向かつて叫んだ。

『すぐにココを去りなさい！　あの「醜い肉塊」が来ますわ!!』

マリナさんは忠告と同時に冷却ブレスを放ち、私達の後方……入つてきたエリアの入り口を塞ぐ様に氷壁を出現させる。

それから約10秒後、頑強な氷壁をぶち破つてなだれ込んで来たのは……

『うごおおあああああああッ!!』

『……やはり来ましたわね、黒鋼龍の下僕……！』

マリナさんは既にアイツと交戦経験があるようだ……前に黒いクシャルダオラと共に去つた、あのイビルジヨーと。

以前よりも禍々しさを増した様なイビルジョー……只でさえ以前から「怒り喰らう」という歴戦個体だったのに、その凶悪さが大きく増している。

『またアナタですの？　何度も言わせないで下さいまし……私はアナタ達に荷担などしませんわ！』

『……だつたら、ココで消えて貰う……！』

『それも御免被ります！　今度は氷漬けだけでは済ませません……確実に、その命の灯火を消し去つてあげますわ!!』

マリナさんは宣言と同時に冷却ブレスをイビルジョーへと放つ……勿論イビルジョーも油断なく構えており、ブレスを避けて踏み込み……その強靭な顎をマリナさんへと解放する。

『馬鹿の1つ覚えですわねッ！』

当然、マリナさんもその動きは予測していたらしく……空中へと上がつて回避した後に尻尾の冰刃を振るい、イビルジョーのすぐ上を棒高飛びの様に飛び越しながら斬り付けた。

『グウ……ッ、嘗めるなあッ!!』

一瞬怯むイビルジョーだが、そのまま顎で地面を抉りつつ向きを変え……赤い稻妻が煌めく禍々しい黒い霧を吐き出しながら、マリナさんの背後を狙う……

『……ッ、させません!!』

『マリナ！ 避けてッ!!』

私とマサトさんは同時にブレス攻撃を慣行……青白いエネルギー弾がイビルジョーの足元を穿ち、流れの狂つた地脈エネルギーは小規模ながら爆発を引き起し、圧縮され回転も掛けられた空気弾がイビルジョーの黒い霧ごと身体を抉る。

『ぐつ……がああああああ?!』

更に、ミラルダさんと天羅さんがダメージに喘ぐイビルジョーの足元へと入り込み

……

「隙だらけ、だッ!!」

「邪魔は、させませんッ!!」

最大級の威力を誇る、太刀の「居合抜刀気刃斬り」とチャージアックスの「超高出力属性解放斬り」……いつの間に準備を済ませたのか、事前行動無しの単発攻撃を同時に片足を狙い、足を挟んで交差させるように繰り出された。

『グゥウウ……お、おのれえ……ッ?!』

度重なる攻撃に大きく悩み、イビルジョーの注意がこちらに向く……だが、私とマサ

トさんに注意が行き過ぎたが故に、更なる駄目押し攻撃を受ける事にならうとは……』

『……?! ばくんつ……がつはあ……!』

放物線を描きながら口内に飛び込んだ何かを反射的に飲み込んでしまうイビルジヨー、その後に起きた口腔内での爆発……視界の隅でエイデンさんがガツツポーズをしている事から、恐らく「拡散弾」だろう。

如何に強靭な皮や甲殻を持とうとも、口の中で起こされた爆発ではダメージも免れない……そして、不意の激しい痛みに呻くイビルジヨーの左目に、矢が吸い込まれる様に突き刺さり……防御不可能の一撃は、その瞳から永久に光を奪った。

『ぬがッ?! め、目がアアアア!』

視界を奪われ、狼狽えるイビルジヨーにトドメを刺すべく……マリナさんが一足飛びで急接近、同時に私達へ『死にたくなければ避けなさい!』と一言だけを告げ、最大威力の冷却ブレスをばら蒔く……

『……ッ?! みんな、伏せて!!』

マサトさんの合図に、全員がブレスの範囲を避けて屈む……

ばら蒔かれた冷却ブレスが無数の氷柱を生み出すと、マリナさんは空中へと飛び上がりた後に更なる冷却ブレスを大地へと放つ……放たれ続ける冷気は止めどなく周囲を凍て尽かせ、尚も大気から熱を奪い続けていく。

……それこそ、イヴエルカーナの必殺攻撃『絶対零度』。

$\frac{1}{2}^{\circ}\frac{2}{3}^{\circ}\frac{1}{5}^{\circ}\text{C}$ 極低温の氷柱を無数に生み出し、その氷柱の乱立する領域内の温度をまさしく絶対零度まで低下させ、あらゆる物体の、分子レベルの活動を完全に停止させてしまう

……物理法則に則った、文字通りの「必殺技」である。

ヴウグウオオオアアアア!!

怒りと痛みと理不尽さ……様々な怨嗟を乗せた、筆舌し難い恨みの雄叫びと共に倒れ込む……さしもの狂暴なイビルジョーでも、これ程まで大威力を連続で直撃させられ、生物の急所までも穿たれ……だがしかし呆れた生命力故か、虫の息ながら辛うじて生き残っていた。

『……まつたく、あの黒鋼龍は……とんだ傍迷惑ですわね』

鼻息荒く、黒ダオラへの恨み言を呴くマリナさん……この時、不覚にも私は彼女に「戦乙女の様な、強さと優しさを併せ持つ乙女」の姿を重ねて幻視してしまい……もし、未來の自分もこんな風になれたら……と、妄想してしまった。

『……マリナ、お姉さま……』

『……??』

側に居たマサトさんだけが、私のその呴きに気付いて首を傾げる……

『あ……何でもないですッ?! 何でも……』

『うん？……そ、そなんだ……』

不覚です……思つた事を口に出してしまって……！

「……もうさすがに暴れはしないだろうな？」

エイデンさんは用心深くイビルジョーの様子を伺う……が、奴はもう止まり掛けの荒い呼吸をするだけで精一杯らしい。

投げ当てられた小石に、反応らしい反応すら出来なかつた……

伝承

極低温の領域に晒され、瀕死の重症を負つた怒り喰らうイビルジョー……
イヴエルカーナ必殺の「絶対零度」^{アブソリュートゼロ}を至近距離でマトモに浴びたのに……まだ生きて
いるのは不思議でならなかつたが、もはや虫の息ともなればこれ以上邪魔は出来ないだ
ろう。

マリナさんに連れられ、私達は洞窟から反対側のエリア9を抜け……外の見えるエリ
ア3へと移動した。

彼女がこの龍結晶の地に来たのは、その身体を包む防具とも呼べる……灼熱のマグマ
を急速冷却し、それに含まれる成分と急激な温度差を利用した「水晶装甲」を交換しに來
ていたのであつた。

この行動は種族特有のものであり、極低温の冷気を自在に操るイヴエルカーナでな
ければ不可能な生態である。

『……そういう訳で、この地で交換をしようかと訪れたは良いですが、奴が私に気付いて
から何度も何度もあの様に下僕をけしかけて……』

恨みがましくマリナさんがそれまでの経緯を語ってくれた。

まさか、あの黒鋼龍にストーカー癖があるなんてね……私も狙われてたら、なんて思うとゾッとする。

クリスはポーチから奇妙な金属片を取り出すと、マリナさんの身体にある「水晶装甲」と見比べた。

「やつぱり……同じです！」

『あら、古い欠片ですわね……』

「祖父が十数年前にこの地で見付けた、謎の結晶です……やはりコレは」

『私達が昔に纏っていたモノの欠片ですわね……この光沢といい、つや具合といい……良く似てますもの』

とうとう見付けたのだ……彼女の祖父が唯一、解けなかつた謎……それがようやく、十数年越しというこの時……ついに解決をみたのである。

「……何だか、釈然としませんが……お祖父様からの課題はクリアした、という事ですかね？」

祖父の代から取り組まれた謎が、こうもあつさりと解けたのは果たして良かったのか……心なしか不満気なクリスだったが、それを断ち切るかの様にマリナさんが動き出す。

『それにしても、あの黒鋼龍は……まだ私の事を諦めていませんのね……さすがにもう我慢なりませんわ……!』

『待つて、マリナは黒鋼龍……アイツの居場所を知っているのかい?』

我慢の限界を迎えるとするマリナさんをマサトさんが止め、奴の居場所を聞こうとしていた……奴は彼の同族とはいえ、愛する人達を見下し、共に生きる人間を不要だと切り捨て、あまつさえ滅ぼそうとしている黒い鋼龍……

『知っているもなにも、彼が来いと言つたのですわ……「俺の考えに賛同するならば來い、陸珊瑚の台地で待つ」とね』

どんな因縁かは分からぬけど、奴も彼をこのままには出来ないと考えているのだろう……

『……マリナさん、彼は……僕が止める……止めなくちゃダメなんだ』
「マサト……」

恐らくだけど……あの黒鋼龍が行おうとしている所業は、きっと犯してはいけない

「罪」のような気がする……今ならまだ、止められるかもしない。

『アナタは……奴の目的を知っていますの？』

狙いは恐らくアナタの方ですわ……それを分かつて、なお行くと言うの？』

『…………』

マサトさんをミラルダさん達が見つめている……1人ずつマサトさんは彼女達を見てから、決意するようにマリナさんへと宣言した。

『彼のやろうとしている事は間違ってる、人と龍は……争う必要なんてない、少なくとも私はこう信じてる……「人と龍は共に歩める」と』

マサトさんの言葉、そして私の力がトリガーとなつたのか……龍脈が低く、鳴動する。「な、何が……?!」

「地震?!」

『いえ、この揺れは……?!』

私を含む全員が異常事態だと感じ、その場から動けなくなる……数秒後、私達はいつの間にか足元に空いた巨大な“黒い穴”へ……まるで意識が吸い込まれる様に音もなく落ちていくのだった。

その姿は、1体の白い龍だった……

白龍は数多の龍達を率いて、土と炎と血が混じる焦土に佇んでいる……そこから見下ろしていたのは、惨劇の坩堝と呼ぶに等しい光景。巨大な龍を模した兵器の群れと、数多の龍達の激しい戦い……見下ろす白龍は、独り……呟く。

『人は愚かだ……だが、ココで彼等を滅ぼして良いものか?』

人は禁忌を犯した……

竜を狩る為に竜を殺し、その骸^{むくろ}を利用して命を持つ『兵器』を生み出した……それは命を弄ぶ禁忌の行為……故に、竜^{しもべ}達は怒りに燃えた……

それ故に、人に罰を与えた……

だが、滅ぼす事までが……自然の摂理なのか?

なまじ高度な知性を持つが故に、白龍はその思考を止められない……

我々は過ちを犯した……だから彼等が動いたのだ。
愚かにも程がある……

だが、このまま滅ぶのが自然の摂理なのか?
救いは、赦しはないのか……?

「我々は、己の愚かさ故に……滅ぶ運命……か」

焦土に倒れる男は、力無く呟く……

それから見せ付けられたのは俗に『竜大戦』と呼ばれた……忌まわしき過去の過ち。
繰り返さぬ為に、起こそぬ為に秘匿された……禁忌と過ちの過去であつた。

「……人間は、こんな過去を持っていたというの?」

『……これは……こんな事が……私は、もう少しで過ちを犯す所でしたのね……』

「何処の歴史書にも、こんな事なんか記されてないわ……秘匿された過去……忌むべき

過ちという事ね、これは……！」

マリナさんや、ミラルダさん達の意識が驚愕に染まるのが分かる……私だつて、こんな過去があるなんて初耳だし、そもそもこれ程の技術……禁忌ならば、継承される筈もない。

これは警告だ……人と龍が争う事に対しての、龍脈に遺された記憶という名の未来へのメッセージ。

やはり、あの黒鋼龍を止めないと……今度こそ人類も、龍達も滅ぶ。

『……ッ?!』

いつの間にか、私達は元居た場所で倒れていた……どうやら、先程の落下したような感覚は幻覚やら催眠作用の影響だつたらしい。

この場で全員が同じ幻覚を見るなど、普通では有り得ない……少なからず、龍脈の力が働いていた、と見ても良いだろう……と思考を巡らし、周囲を確認する。

目覚めたのはまだ私だけで、マサトさんやミラルダさん達……カルラさんやクリス達もまだ気絶していた。

途中、初めて感じる気配を察知し、振り向くと……崖の足場に立つていてる1人の小柄な人を見付けた……この霧囲気、たぶん人間じゃない……竜人族に似ている。

『おお……目覚めたか、理ことわりを外れし龍よ』

え、なに……理を外れし……って、どういう意味だろ……？

『……貴方は……？』

『我等は故き民の末裔……そなたの目覚めを待つていた』

『良かつた、お主は起きていたか……』

声と共に降りてきたのは、涙ネロミエール龍……スイレンさんだ。

『スイレンさん、貴女はこの現象が何か知っているのですか？』

『……うむ、恐らくだが……これは「龍脈」干渉の逆流であろう……最も、お主の力では無さそうだが……』

確かに、私の干渉ではさほど多くの情報は取り出せないし、仮にも複数人へ同じイメージを送るなどやれる筈もなく……この龍結晶の地という立地と、何らかの干渉が働き……私の能力が引っ張られて発動した様な感じがする。

『兎も角じや……少しの間、妾が辺りを警戒しよう。

その間、彼等の話を聞いてやつておくれ』

そう言い残したスイレンさんは再び舞い上がり、ゆっくりと上昇していく……

崖の足場に立っていた人はその間に私の近くまで歩いて来ていた。

私の前にある大きな石の上に座り、手にした杖を肩に掛け、被つた帽子の角度を変える……その瞬間に見えた彼の瞳は、人間のソレとは違うものであつた。

『故き民の末裔……古代竜人……?』

《さすがの博識、理外のものだけはある……故に、我等はそなたに請う》

難解な言い回しだが、私に頼みがあるらしい……大した力もないただの幼龍に、一体何が出来るのだろうか。

黒き嵐と共に、災いの種が芽吹く……

地は碎かれ、深き帳に飲まれ、星光を閉ざし虚に還る。

理外の叡智、禍を静める術也……

理を外れしもの、力を統べし御姿借りて舞い降りん。

……引き寄せし絆こそ、地を護る光とならん。

『……何なんですか……?』

「……恐らく、何かの伝承だろうね……災いに、理外の叡智……か」

いつの間に起きていたのか、カルラさんが自分の見解を述べた……それを見て古代竜

人は傘を被り直し、杖を手に立ち上がった。

『此は故き言伝、我等の祖が遺せしもの……我等が役目、此所に至れり』

その言葉で用は済んだのだろうか、一頻り周囲を回つてきましたスイレンさんと入れ違いで古代竜人さんは立ち去つていった。

『彼は何と……？』

『それが……理解が少し難しかったけど、なんか妙なお願いをされちゃつて……』

『ふむ……彼等が龍に請うとは、余程の事態が来るのじやろうて……理解は出来ずとも、心に留めておくと良かろう』

スイレンさんからも、忘れないでねと念を押される。

……この伝承と私とに、どんな関わりがあるのだろうか……？

クリス達の目覚めを待ち、揃つてアステラに帰還した私達を待つていたのは……
「……レクスが、陸珊瑚の台地で消息を断つた」

『……ツ……？』

総司令から語られた突然の悲報……口下手だが何かと皆を気に掛け、一緒に戦った事もある彼の強さを、皆は十分に知つていて……しかし、この報にシオンは言い知れぬ何かに駆られ、踵を返すかの如く疲れた身体に鞭打つて翔ぼうとしていた。

『シオン?! 何処へ……!』

『レクスは……彼は死んでない……きっと生きてます！ でないと私が……ツ!!』
マサトが真っ先に気付き、動線を遮る様に止めた。

『焦る気持ちは分かる……でも、そんな疲れた身体での黒鋼龍にまた襲われたら……』
『私はどうなつても良い!! 彼が……彼が居なきや……うつ!?』

タアン……と、一発の射撃音……直後、低空でホバリングしていたシオンの身体は制御を失い落下……僅かながらその影響に抵抗したものの、疲れきっていた全身を支配していく睡魔には敵わず眠ってしまった。

「……やれやれだぜ、あの大人しいシオンがこうも焦るなんてなあ……」

音の正体はエイデンのヘヴィボウガン……超強力な眠気を引き起こす睡眠弾レベル2を放ち、シオンを強制的に眠らせたのであつた。

『エイデンさん、助かりました……』

「レクスとシオンの間に、何かあつたの？」

「いえ、私にはさっぱり……2人の仲は普通に良いですし、特別何かあつた事は……一度も……」

突然のシオンの急変……勘織つたミラルダはクリスに訪ねるもの、最も彼等を見ているクリスにも、さっぱり分からぬ様子であつた。

過去

『……、…………。……ツ?!』

氣だるさの残る身体を奮い起たせ、シオンが頭を起こす……
そこはセリエナに増設された龍用の小屋だつた。

『……全くもう、ムチャし過ぎだよ?』

藁葺きに獸の毛皮で整えられた、ふかふかベッドの中で目覚めたシオン……声のした
方には、サイズ違いで同じベッドを眺えて貰つたマサトが座つていた。

先程の声は呆れた雰囲気でシオンを軽く睨み、溜め息と共に出したものだつた。

『……本当、なんですね……夢じや……』

『……本当だよ、彼は行方不明になつてゐる……明日にも捜索隊が組まれるつて』

本来ならば彼等に任せた方が良い……古龍とはいえシオンはまだ幼く、成龍であるマ
サトから見れば明らかに無茶苦茶動き過ぎていた。

ゼノ・ジーヴアと呼ばれる未知の種族といえども、本来はもつと巨大な体躯に凄まじ
い力を秘めた存在……生誕當時より成長してきたとはいえ、シオンはまだまだ本来の大
きさに遠く及ばず、体力も言うに及ばず……雰囲気は大人びいていても、間違ひなく幼龍

である。

しかし、子供であるが故に我慢など出来ず……シオンは回復しきつてない身体を引き摺つて外へと向かおうとする。

『は、やく……見つけないと……私は……!』

『ダメだよシオン、今日はココで身体を休めなきや!』

『退いて下さい! レクスが居なければ私は……わたしは……』

『何がなんでもダメだ! 君は今までの活動で回復を疎かにしている……ちゃんと体力が戻るまで、ココで待つんだ!』

この世界で生きてきた先輩古龍として、マサトはシオンを純粋に心配していた。

しかし、マサトの思惑は何も価値観の近い古龍だから……としてだけではない。

今までの言動から、その精神構造を鑑みていたマサトは……確証こそ無いものの、目の前の幼龍に「ある疑い」を持つていた。

(やつぱり、この子は……いや、そうでないと説明の付かない事だつて)

頑なに助けに行く事を貫こうとする幼龍……体格は言わずもがな、力の差も有りすぎる為か、頑強な鋼の翼1枚に歯が立たないシオンの姿を見て、マサトはそれまでの事を思い返した。

初めて出会った時こそ大人っぽさを感じたが、会話を重ねる度に、時を追う毎に、内

面の素の部分を垣間見る事ができた。

それに、周囲の人間達から見聞きしたこの子の評価を含め……

（この子も……間違いなく転生者だ、それも……転生先の知識を知らないタイプ）

『マサトさん……！ 行かせて……下さい……』

体力が底を付いたのか、部屋への出入りを阻むマサトの翼に、力無くすがり付きながらへたり込むシオン……微かに啜り泣く子供の様な声もまた、自分の考えを肯定する様に感じられるマサトだった。

『……すみません……』迷惑をお掛けして……』

小一時間ほどだろうか……マサトの翼の影で泣いたシオンは、それまでずっと見守っていたマサトに謝りながらゆっくりと元のベッドへと戻った。

『……聞いておくべきか、ずっと迷つてたけど……やっぱりこのまま有耶無耶にはしておけない』

『え……つ?』

『シオン、君も……元は人間だったんじゃないかい?』

『……ツ……』

突然の提言に狼狽え始めるシオン……マサトは周囲を見回し、誰も居ない事をシオンに耳打ちすると、複雑な感情を込めた瞳でマサトを見つめている。

『前から疑いは持つてた……確証が持てなかつたから、黙つてたんだけどね……』

『え、ちよ……ちよつと待つて下さい! 君も……つて事は、マサトさんも……!』

『うん、ミラルダ達は既に知つてるよ……私が元々、人間だつた事も』

改めて、目の前に居座る先輩古龍が元・人間……何らかの出来事を境に、古龍として生きる事を定められた存在だというのに驚くシオン……そして、自分もそう定められた存在だと告げられた事に。

『私は最初から、転生前の記憶を引き継いでいるけど……シオンはどうなんだい?』

マサトは当初から前世の記憶も残つていると語る……だが、シオンは返答に詰まつた。

前世の記憶? 過去の知識? そんなものなどほとんど無い……引き継いだのは人らしい感情と価値観のみ、あくまでも自分はそういう古龍なのだと思つていたから。

『……シオン?』

『……分からないんです。

私は前にどんな人だったのか、過去に何をしていたのか……自分の名前すらも……』

『……そうかのか……』

『ただ1つ……マサトさん達が来る前に、龍結晶の地で実験した「龍脈干渉」で……断片的な事は思い出したんです』

それから語られた過去の大部分は、シオンには意味すら分からない単語や土地の名前……だが、マサトには聞き覚えのある、懐かしむ様なものばかりだった。

『うん、やっぱリシオンは転生古龍……私と同じか、近い時代の生まれだつたと思うよ。

……その、一部の記憶が関係無いのは引っ掛かるけど』

しかし、シオンから語られた内容……その一部はマサトとは無関係の、完全に違う時代の情報も多く含まれており、そこはマサトも多少気になっていた……断片的というより、ぐちやぐちやに混ざり過ぎている……少し躊躇つたが、シオンは全てを吐き出す想いで語り出した。

『……多分、混ざつてる記憶は……違う時代の私が生まれてまだ幼い頃……今とそう変わらない感じの扱いを受けていた頃の記憶だと思います……時折見える光景は、今の時代に近いのですし……』

でも私が一番気になったのは、この記憶の中に……何故か服装とかは今と違うけど、

レクスとクリスが出てくるんです……それも私を、まるで1番大切にしている我が子の様に……』

『……え、どういう事？ レクス達とは、アステラに来てから出会った筈だよね？』
 『その筈です……少なくとも、私がレクス達と出会つたのは……デユークさんの手で、アステラへ連れて来られてからですし』

それが本当に転生前の記憶だとすれば、シオンは過去に転生したという事になる……少なくとも古龍としてのシオンが生まれ、初めて見た人はデユークであり、アステラへ運び込まれてから他の人達と交流を始めた……だがマサトと同じ現代から転生した古龍なのに、人としての過去の記憶にまでレクス達が出てくるのは明らかにおかしい。

その記憶が混ざりあつているのも奇妙だ……例え記憶が転生時に消えたとしても、転生先に何らかの形で影響を及ぼしていたり、唐突に復活する事は多々ある。

だが、それを加味したとしても……2つの過去が混ざりあつて復活するなんて普通じゃない。

『……結局、私は何処から来たんでしょうか……？』

マサトは返答に困る……語られた内容からすれば、マサトとほぼ同じ時代からの転生は間違いない。

だが、それ以外の時代の記憶も確かにあるのだ……推測でしかないが、マサトの頭で

は他に思い当たるものも無い……『あくまで仮説だけど……』と前置きをして、マサトは言葉を紡いだ。

『……つまり、私はマサトさんの過去と同じ世界の転生者……その前か後に、この世界で一度産まれている……という事ですか？』

『そうとしか思えない……多分、時代的には今よりも未来で一度、人として生を受けたんだと思う……そこから何故再び転生して古龍に変わったのかは、全然分からぬけどね』

『…………』

筋は通っているし、他に違う説を示す証拠も具体的な情報も無い……詳しく述べは謎がまだ多いものの……シオンが2度転生しているという事は確実なのだろう。

『…………だからなんだね、レクスの安否が気になるからあんな事を』

私のあの行動の理由、その確認を取るマサトさん……

復活した記憶が正しいのなら、私はレクスとクリスの「娘」として一度生を受け、その前後に起きた何らかの出来事から、古龍ゼノ・ジーヴアとして今に転生した……『……今思えば、産まれた直後の私に記憶が無かつたのは……もしかしたら悲しい出来事があつたのかもしれません……それこそ、記憶を封じたい程の事が……』

『今はそれを考えちゃダメだ、過去の記憶に引っ張られちゃダメだよ！』

マサトさんは、過去の記憶をいつまでも引き摺ると「また同じ轍を踏む」と忠告してくれた……気なしすぎると、過去と今の判別も付かなくなつて状況を悪化させ……過去よりも更に悲惨な事になるのだと。

大切なのは過去と今をしっかりと区別し、過去の客観的事実から対抗策を練り、改善を図る……一時の感情に惑わされる事無く、鍵となる情報を集めるのだ。

『とにかく、君は消耗しているんだから、今は休んで……明日の捜索隊に同行して探そう』

『……はい、ごめんなさい……ありがとうございます……』

我儘な私を包み込む彼の言葉が、不安に押し潰されそうな私の心をゆっくりと解きほぐしていく……その暖かさに一縷の望みを託し、泣き疲れから再び襲い来る睡魔に身を委ねた。

捜索（前編）

『……間違いない、クシャルダオラの痕跡だ、私とは違う……多分、アイツの』
目的地に着いて早々、自分以外のクシャルダオラの痕跡を発見したマサトさん……彼
はまだこの陸珊瑚の台地に来た事はない、したがつてこの痕跡は彼以外……あの黒鋼龍
のモノで間違いないだろう。

「……マサト」

ミラルダさんが、マサトさんを複雑な表情で見つめる……

2体のクシャルダオラの、己の理想と意地を掛けた避けられない戦い……目前まで
迫っているその事実に、ミラルダさんはどうしようもなく不安なのだ。

天羅さんやアミラさんも同じく、マサトさんを心配している……

『大丈夫だよ、私は負けない……それよりも、今はレクスの捜索に専念しよう。

……ほら、しつかり目を凝らして痕跡を探さないと！』

場の空気を切り替えようとマサトさんは声を上げる、優しくも雄々しいマサトさんの
咆哮が陸珊瑚の台地に遠く響いた……

クシャルダオラ
の

数時間後、レクスの痕跡発見した後……跡を辿つて判明したのは……

「……間違いない、ココで途絶えているな」

そこら中に広がる戦闘の痕跡と、崖の端に残された「双剣リュウノツガイ」の片割れ
……雌火竜の素材緑色の甲殻に残された傷跡から、間違いなくレクスの武器だと判明した。

それが、崖の端に突き刺さっていたのなら……

『まさか、ココから……ッ?!』

私は焦燥に駆られながら翼を開き、崖の上を飛びながら下を覗く……うつすらとだが、地面が見えた……が、その距離的に無事では済まない高さである事も分かつてしまふ。

「下へ降りれるルートはあるのか?」

私を心配して付いて来てくれたレオンさんが、道案内役のデュークさんに訪ねる。

「この下は『瘴気の谷』と呼ばれる危険地帯だ……毒性は低いが、呼吸器に悪影響を及ぼす瘴気が漂つていて、装衣やマスクが無ければ長時間の活動は出来ない……それに」

瘴気、と聞いて私の脳裏に浮かんだのは……ある古龍の存在、瘴気環境に完全適応し……あまつさえ共生関係まで築くあの古龍。

『ヴァルハザク……奴の住み処でもある、という事ですよね……』

瘴気対策……以前に検索したやつは、ヴァルハザクが放つてくる瘴気攻撃に対する対

策だつたが、今回は必要なのは常に漂う瘴気 자체への対策だ。

検索条件は近いけど、違う対策が必要になるかもしね……

「シオン、前に調べたヴァルハザクの瘴気対策は？」

『多分、あの方法では無理です……ウチケシの実の効果は一時的なモノですし、継続的に消耗を強いてくるこの場合の対策には……』

「そうか……なら、装衣やマスクを取りに戻らないとな」

『ヴァルハザク由来の装備なら、どちらにも効果があるのは確実なんですけどね……』

ヴァルハザク素材の方は「タマゴが先か、鶏が先か」と同じだ……その対策が取れない以上、装衣とマスクを使うしか方法はない。

「陸路で下へ降りる事は出来ないが、すぐ近くにある3期団の船を使えば降りられる……装備を整える為にも、一度3期団の船へ向かおう」

デューケさんの案内での、私達は一度装備を整える為に……この近くにあると言う3期団の船へと向かう事にした。

「はあい、ようやく来たわネ……待つっていたワ、古龍ゼノ・ジーヴア」

『……貴女は？』

「私が3期団の団長、レジーナ……レクスの件も含めて、アナタ達の事は総司令のボウヤ

から聞いてるワ」

総司令……バンさんの事をボウヤと呼んだ、竜人族の女性レジーナさん。

搜索の件は既に連絡が来ていたらしい……もう装衣やマスクの用意は整っていた。

古龍は瘴気の影響を受けないらしいので、レオンさんやミラルダさん達には「隠れ身の装衣」と、クリスには3期団の紋章が入った謹製マスクが渡される……デユーラーさんとカルラさんには自前のマスクがあるとの事で、後は食糧等の補給だ。

「……やつぱり、アナタの雰囲気は独特ネ……謎は深まるばかりだワ」

『え……っ？』

「こつちの話よ、気にしないデ……それにしても、あの時にだけ現れたヴァルハザク……何故、奴はまた谷に引き籠つたのかしラ？」

3期団は初遭遇以来、ヴァルハザクをずっと追つていたらしい……その初遭遇は今からもう十数年も前の出来事なのだそう。

そこまでヴァルハザクを追う理由は問えなかつたが、彼女達3期団なりの信念によるものなのだと私は思つた……

『レジーナさんも聞き及んでいると思ひますが……多分、今回のヴァルハザクの行動は、例の黒ダオラのせいではないかと……』

ヴァルハザク自体の性格はどうあれ、好戦的ではないと考えてゐる私は「移動の理由は外的要因」にあるのでは? とレジーナさんにぶつけてみた。

「そうね……そもそもヴァルハザク自体、初遭遇から今の今まで発見出来なかつたのが災いしてて、ろくな調査が出来てないから……別種とはいえ、アナタのその意見は参考になるワ」

『……レクス……』

ヴァルハザクの事を考えると、同時に浮かぶのはレクスの安否……レジーナさんは古龍である私の心情を理解してか「無事だと良いわネ……」と慰めてくれた。

補給を済ませた私達は、3期団の船を使つて「瘴気の谷」へと降りる……
ただし、その方法は真つ当な手段ではなかつた事を敢えて言つておく。

「……ちょ……どういう事ですか? これつて……」

「悪いわネ……谷へと降りる一番手つ取り早く、確実な方法はコレなのヨ……」

陸珊瑚の台地に係留されている3期団の船は、ただの船じやない……

……この複雑な陸珊瑚の地形を限無く調査するために改造された「気球船」なのだ。

そして、クリス達は……その気球船の錨、つまり係留するために使われる部位を改造した昇降装置の上に立たされていたのである。

『うーん、まさしく絶叫マシン……』

呑気に感想を述べるマサトさん……自分が乗らないからつてチヨツト不謹慎デスヨ

?

「さあ、準備は良いわネ？ ……降ろすわヨ」

ガゴン、と音を立ててロツクが外れ、巻かれた鎖がゆっくりと動き出す……ミラルダさん達は興味津々といった所だが、唯一クリスだけはガクブル状態だった。

「もう吊り下げは無いと思つてたのにい～～～！」

金網で十分に補強されているとはい、錨をそのまま籠の様に改造した昇降装置……見晴らし抜群、風通し抜群、そして吊り下げ式故に揺れも抜群だつたのは言うまでもない。

その頃、ココは「瘴気の谷」の最深部……腐敗と侵食が進みきつた数多の死体が所狭しと折り重なり、大地など一辺たりとも見えないこの地に……2体の生き物の動く気配がしていた。

その姿は他の地の近似種とは幾分か痩せてはいるものの、全体的には変わりなく……毛並みも薄汚れてはいるが、皮膚病などとは無縁の逞しさがあつた。

彼らの名はテトルー……森に居た同種族は近縁であり、彼らは食糧の少ないこの地でも逞しく生きていた。

食糧を探しに来た彼等の肌を、一瞬だけゾツとする様な感覚が襲う。

『…………ツ?!』

毛を逆立て警戒し始めるが、もう既に彼らは逃げられない事態に陥っている事に気付いては居なかつた……ココに繋がる唯一の通路、そこから巨大な影がゆつくりと現れ……その姿に気付いた2匹のテトルーはその圧倒的な威容に心臓が止まる寸前まで追い詰められてしまつていた。

『…………つ…………?』

その姿はまさに死神……腐肉と瘴気をその身に纏い、まるで巨大な死体が自らの意思

で動いている……そんな身体を、更に胞子や菌糸で彩った白い風貌。死を纏うヴァルハザク……後の人々はこの古龍をそう呼ぶ事になる。

搜索（後編）

「……にや……ニヤ……ツ!!」

目の前に迫る腐肉と瘴気の塊、それを纏う巨大な存在……正しく死を纏うその生き物は、テトルーの存在を認識したのだが……一度鼻先を向け、匂いを嗅いだだけで襲うでもなく、直後に物音がした方へと頭を向けた。

グルルルル……！

物音の正体はギルオス……この瘴気の谷に住まう小型の竜で、ドスギルオスを群れのリーダーとして集団生活をしており、全体的に黒く、後頭部辺りに白っぽい模様……一見すれば、4足のある蛇の様な見た目が特徴だ。

そしてその後ろ……4体のギルオスの向こうからやつてきたのは、群れのリーダーであるドスギルオス。

彼らはテトルーの後を付け、隙あらば襲うつもりで居たようだが、テトルーの前に立つ正体不明の大型生物に出鼻を挫かれてしまつた状況である。

グオオオオオオン……!!

獲物を横取りされても敵わない……と、ドスギルオスは手下に激を飛ばし、目の前の

存在へと果敢にも挑む……が、テトルーからすれば、自らを狙い、問答無用で攻撃しに来たと感じた。

『…………助けてニヤ…………』

2匹の内の片割れの、か細い懇願の声……その直後、真後ろの大型生物は首をもたげ口を開き……

フオオオオオオオオオ……!!

独特な鳴き声と共に、言葉に出来ない威圧感を纏う気配が濃密になり……巨大生物の口から、大量の瘴気が噴出。

……激しい勢いで噴出する瘴気は、飛び掛かつてきたギルオスのうち2体を逆に吹き飛ばし、もう1体の身体を大地に釘付けに……辛うじて瘴気を避けた最後の1体だつたが、追撃に振るわれた鋭い爪を持つ前足に弾かれ、敢えなく吹き飛んだ。

思わぬ反撃にドスギルオスは一瞬硬直するものの、チャンスとばかりに大地を蹴つて飛び掛かる。

……しかし、相手はむしろそれを狙っていた。

飛び掛かり、空中で無防備になるドスギルオス……その身体を、真横から打ち据えたのは、長い何か……それは、相手の長い尻尾であつた。

苦悶に喘ぎながらも、ギルオス達はまだ死んでいない……その時、相手の独特な鳴き

声が響く。

その直後、ギルオス達の動きが急に衰え始めた……

長い、長い咆哮……濃密な気配を放つ大型生物が、その咆哮を終えた時……ドスギルオスと手下達は、その瞳から生気が失われ……身体に傷らしい傷もないまま完全に絶命したのである。

『……何なんでしょう、この……言葉に出来ない濃密な気配は……』

『ううん、何か蠢いてる様な……得体の知れないエネルギーと瘴気がメチャクチャに混ざつてて、判別が付かないや』

私とマサトさんは、この谷に蠢く奇妙な気配に気を取られていた。
……それだからだろうか、目の前の脅威に全く気付いてなかつた……

「……ン、……オン！ シオン?!」

呼び声に気付いた時、全員を取り囲んでいたのは……既に朽ちたはずの死体、動く筈の無い命無き肉塊……それが何故か動いている……中にはかつてハンターだったのだろう、防具を着込んだ人間の姿も少數混ざつており……生者の恐怖心を煽るには、十分過ぎる光景だつた。

「……ツ……!? く……来るなよ……マジ、止めて……イヤアアア!!」

『え、天羅？ どうして……』

「天羅さん?!」

どんなモンスターが相手でも、ヤル氣と自信に満ち溢れていた天羅さんが……まるで恐怖に怯える子供みたいな情けない声で泣き叫び、マサトさんの後ろに隠れてしまう。

その声に反応したのか、一斉に死体がこちらを向き……ゆっくりと迫つて来たのである。

(声への反応、そしてこの動き方……まさか、ね……今はそれよりも……!)

マサトさんは何やら気になつたのか、思案する素振りを見せる……が、今はそれどころではないと頭を振つた。

「何だかよく分からんが、コイツら……タダの死体じやない！」

「谷の瘴気がこんな現象を起こすのか？ イヤ、それよりも……！」

各自が己の武器で撃退する最中、武器を振るいながらも冷静に相手を分析するレオンさん……デユーラさんは瘴気の影響かと一瞬思うが、かつてヒトだつたモノがゆらゆらと蠢く中、奇妙な影を見た。

「あれは……？！」

『デユーラさん……！』

私にも一瞬だが、岩影に隠れてしまつた小さなシルエットを見た……あの動きとサイズには見覚えがある、接触できたら何かしら良い情報が得られるかもしねれない。

「シオン、どうしたんだ？！」

『あの先に生き物が居ました！ 多分、テトルーです！』

屍達がわらわらと殺到し、ひたすら噛み付こうと牙を剥いてくる……が、私とマサトさんはお互いの長い尻尾を鞭の様にしならせて次々と薙ぎ払い、誰一人として接近を許さない。

『ミラルダ、天羅を頼む！ シオン、道を作るよ！ 良いね？！』

『はいっ、ハアアアツ!!』
『そこを退けえええツ!!』

私は右手を大きく振りかぶり、掌にエネルギーを込めて叩き付ける……その波動は地脈に干渉し、大地からエネルギーを一瞬だけ吹き上げさせ、周囲の死体を吹き飛ばして時間と隙間を稼ぎ……間髪いれずマサトさんの風ブレスが3発放たれ……破壊の意志を持つ暴風は一直線に、進路上の蠢く死体を1つ残らずボロ雑巾の如く粉碎していた。

「今だ！ みんな走れッ!!」

レオンさんの合図で、クリス達は一斉に風ブレスの弾道で出来た道を駆け抜ける。

最後尾となつて残つた私とマサトさんだが、進路の反対側から来る死体の数に、迎撃は埒が明かないと判断……光弾と暴風で敵の最前列ごと地面を抉つてから、クリス達の後を追つて走り出した。

テトルー達の後を追い、谷の更に奥地へと進む……途中、赤い身体に痛そうな爪を持

つ犬っぽい「オドガロン」に見つかつたが、ソイツはソイツで引き摺つていた大きな死体に夢中らしく、此方には一瞥しただけで、すぐに荷運びに戻り……そのまま別ルートで奥へと消えていった。

テトルー達の気配が段々と薄くなる……代わりに満ちてくるのは、濃密な命そのものの氣配……龍脈という大いなる流れに飲み込まれたかのような、エネルギーの溜まり場だ。

『……この辺りは、龍脈のエネルギーが満ちてる……！』

『凄い……感知に疎い私でも分かるくらいの凄い密度だ』

人間には分からぬ特別な感覚……龍脈から漏れ出すエネルギーが、この地下世界には満ちていた。

更に先へと進むと青白い奇妙な色の水を湛えた、地底湖が見えてきた。

「やつた、水がある……！」

「いや、これはただの水じゃない……よく見ておけ」

デュークさんが走り出そうとするミラルダさんを止め、足元に落ちていた骨の塊を水中へと放り込んだ。

ヒュツ……ポチャン……ジュウウウウ……

時間にして僅か5秒といった処か……小型生物のものとはいえ、頭蓋骨くらいある骨

の塊があつという間に溶けてしまつたのだ。

「……強酸、ですか？」

『……いえ、これは酸ではなく……アルカリ……超塩基水？』

ゾツとする速度で骨を溶かすレベルの酸なら、この大地すらも容易に溶か尽くしてい
る……しかし、溶けているのは骨や肉などのたんぱく質がほとんど……やはりこの水は
アルカリ性……

それも恐ろしい濃度だ……王水に溶ける金みたいに骨が溶けたし。

『……もしかして、此処が……？』

（以前、クリスから教えて貰つた仮説……死を迎えた龍達が辿り着く場所……）

青白く光る湖面を尻目に、私達は更に奥へと進む……私はその間、クリスの仮説を裏
付ける証拠としてこの地を見ていた。

……つまりだ、此処は死期を迎えた龍の目指す場所……その生涯を閉じる為の『靈廟』
だ。

この地で死を迎えた身体はあの水に溶かされ、魂は龍脈の干渉を受けながらこの地に
寄り集まり……やがて大地を流れる河の様な巨大なエネルギーの流れとなる。

それが、龍脈の起源……間違いない。

此処こそが龍脈の源泉の一つ……命の始まりと、終わりを体現している場所なのだ。

更に奥へと進んだ私達を待っていたのは……死した骸が折り重なり、小高い丘を形成している場所……崖の向こうには、うつすらと光があり……恐怖感を醸し出しつつも幻想的な雰囲気の場所だ。

大量に転がる死体、音を立てて流れる塩基水の河、そして……壁や天井に埋もれた巨大な骨と、この谷を覆い尽くす凄まじい程のエネルギー……

最深部へと足を踏み入れた私達は、追つていたテトルーの姿を探す。

「あっ、あそこ！ 居ました！」

アミラさんの声に皆が振り向くと、そこには2匹のテトルーの姿……そして、誰か倒れている様な影……更にその奥には、巨大なモンスターらしき影が鎮座している。

『……誰か、倒れてるのかな……？』

『……ツ?!』

あの体格、あの鎧……間違いない！

『……クス……レクスつ……レクスツ!!』

すぐさま駆け寄り、鼻先で体を揺り動かす……声に反応してくれない事に不安が募るが、呼吸はしている様で、胸や胴体が一定のリズムで動いている……

私の声に応えてくれたのは、すぐそばで眠っていた大きな影の方だった……

『……大丈夫、皆に悪さはさせてない……ボクが手を出させてないから、安心して』
『……え、つ？』

ゆつくりと奥の影から、シルエットが明るみに出てくる……
その姿は正しく死を司り、冥府の深奥に鎮座する存在……あらゆる命を喰らい尽く
し、万物に等しく終焉を与える古龍。

「……何故、奴が……?!」

屍套龍ヴァルハザク……古代樹の森に現れたあの龍だった。

深淵

瘴氣の谷最深部……龍脈のエネルギーが満ちる地の奥底で、ハンターを守っていたのは、
屍套龍ヴァルハザク……。

少し前に古代樹の森に姿を表した、あの時のヴァルハザクだつた。

『……どういう意味ですか？ 手を出させてないとは……そもそも、アナタは誰にそんな指示を……？』

通常種のヴァルハザクに関する情報は既に閲覧済みなので、ほぼ知らない事は無いのだが……今、目の前に居るこの古龍……ヴァルハザクではあるのだが、何か雰囲気が全然違う。

全身を覆い隠す腐肉が少ない上、なんか全体的に白っぽい……「龍脈図書館」で調べても、検索結果が出ない。

『……アナタは……何者なのですか……？』

自分の中でも結論は出ていない……マサトさんもこの古龍とは初対面らしく、うんうん唸つて頭を捻つていた。

『……ボク？ ヴァルハザクだよ……？』

ようやくその一言で合点がいった。

どうして通常種だとばかり考えていたのだろうか……一部の大型モンスター や古龍には、アレが居るではないか。

そう、通常種とは一線を画す、特殊個体が存在する事を。

『……特殊個体の、ヴァルハザク……』

独り言の様にそう呟くと、検索結果0となつていた「龍脈図書館」が反応し、瞬く間に再検索を完了……特殊個体・死を纏うヴァルハザクの検索結果が頭に浮かんで来た。

『この古龍の特徴は、「瘴気の谷」だけでなく、「古代樹の森」の環境にも適応し、特殊な菌類との共生関係を構築……その体表に育つ菌類は胞子を利用して他種の生命力を吸収する特性を獲得しており、宿主は彼等から生命力を分けて貰う他、外敵の排除に力を借りる代わり、彼等菌類の生息域を広げる為の運搬役となる』

いくら利害が一致している相手とはいえ……菌類と共生している事や、彼等と連携して共闘するというのは凄まじい能力である。

『……無事でよかつた……レクス……つ……』

しかし、私にはヴァルハザクの事などどうでも良かつた……レクスが無事だった、それだけが気がかりだつたから。

だが、同行していたレオンさん達はそうではない……目の前の脅威に警戒を怠らず

死を纏うヴァルハザク

「レクスを連れて戻れ」と私を呼んでいた。

『……キミの探し人だつたんだね、それなら良かつた』

状況を知つてか知らずか、呑気にそんな事を言う白いヴァルハザク……彼も人間に對して悪意を持たず、むしろ興味を持つてゐる様だつた。

『大丈夫です、レオンさん……彼は、私達に敵意を持つてません』

私の言葉に半信半疑なレオンさんでしたが、マサトさんが警戒を解いた事でミラルダさん達も武器を降ろしたのに驚いていた。

私はレクスを両腕で抱き抱え、駆け寄ってきたクリスに介抱を任せてから改めてヴァルハザクの姿を見やる。

『……ココで生きているモノは少ないの……だから、その人が上から落ちてきた時は本当に嬉しかつたよ……でも、ココは外の生き物には向いてない……もし、ココで死んだら、空っぽの身体だけで動くアレなつちやうから……』

『空っぽの身体……アレ……?』

『あの時のゾンビ達の事だろうね……となると、さつきのは彼の力じやない……という事かな?』

マサトさんが何か独りで納得してゐる……ゾンビ? アレ? 後でちゃんと教えてよ

……

『……レクスの様子は……？』

「大丈夫です……幸いにも大きな怪我は無いですし、体力こそ消耗しますが命に別状はありません……驚きですが、本当にあの古龍が彼を保護してくれていたんですね……」

クリスの言葉に、みんなの安堵の息が漏れる。

死を司るとまで言われるヴァルハザクが、人間レクスを守つていたのは本当に驚きだつたが……私からすれば彼の命を救つてくれた古龍おんじんなのだから、礼はすべきだと思った。

『本当に、ありがとうございました……彼を守つてくれて……』

『……うん……そう言つてくれたのは、キミが始めてだよ……少し前に、お外の生き物と会つた時は怖がられただけで終わつたから……』

『……少し前？　君は前にも、人間と会つた事があるのかい？』

マサトさんの問い掛けに、目を細め……ゆっくりと頷くヴァルハザク……

『あの時は2人……少し衰えた感じの生き物だつた……その2人は、番みたいで、少し羨ましくて……ボクは声を掛けたけど、その2人は怖がつて……ボクの言葉を聞かないで、何処かに消えていったの……』

ヴァルハザクの言葉に、複雑な心境に包まれる一同……状況的に、彼の言葉を聞き入れる余裕が無かつたとはいえ……もし聞き入れていたら、と希望的観測を禁じ得ない。

『……そうだつたのか……。』

ところで、キミの名前は何て言うのかな?』

『……? ヴァルハザクだよ?』

ふと沸いた疑問をマサトさんに問い合わせられ、彼は先程と同様にヴァルハザクと答える……困つた事に、彼は自分の種族名と名前を勘違いしていた。

「……うくん、この子……精神的に、まだ幼い気がします……受け答えが何処か、子供っぽさがありますし……言葉選びも、単純な感じがして」

クリスの言葉に、更にマサトさんは幾つか質問をし……彼はこう答えてくれた。

『……ん、ココはボクのお家……あつちはお庭で、赤い子はたまに囁み付いて来るけど、みんなが助けてくれるの……』

お外の森は明るくて好きだけど、ちょっと前に出た時は寒かつたから……

お外に近い道の所に居る、あの黒いのは嫌い……でも、あの小さい子達は、可愛くて

好き……さつきも「助けて」って言つたから……「めつ！」つてしたの』
聞いた内容は、順番に……この場所の事、オドガロンの事、森に来た理由、ギルオス
の事……そして最後のは、テトルーの事だ。
言葉選びは確かにまだ子供みたいだ……図体や年齢と、古龍の精神年齢は比例しない
のか……

『うん、精神年齢はともかく……）うやつてコミュニケーションが出来るのに、名前が
無いのは不便だね……』

マサトさんの意見は尤もだ……彼の事を他人に知らせる為にも、他のヴァルハザクと
混同しない様な「固有名称」が必要だ。

ミラルダさんが「それなら、私達で付けましょ？ この子に相応しい名前をね♪」と
呼び掛け、早速名付け合戦が始まつたのである……

「……大丈夫ですよシオン、レクスは私達の知る『最高のハンター』ですから」

『…………そうですね…………』

デューケさんとレオンさんは「勘弁してくれ」とレクスを運ぶ準備に取り掛かっており、マサトさんとミラルダさん達…………そしてクリスと私もレクスを彼らに任せ、名付け合戦に参加した。

一頻り全員が、彼に相応しい名前を付けようと意見を出し合うが…………なかなか納得の行く名前は出てこない。

「…………なかなか出て来ませんねえ…………良さそうな名前」

『私はもう出し尽くした気がするよ…………シオンは？』

『…………うーん…………、命…………終点…………冥府…………災害…………』

「…………？…………シオンちゃん？」

アミラさんが私の顔を覗き込んで来る…………ブツブツとヴァルハザクとこの谷のイメージを言葉にしていき、私はある単語に行き着いた。

『…………ネメシス…………』

『…………え…………つ？！』

『…………何というか、一番しつくり來るので…………』

『…………良いですね、その響き』

しつくり来る……という私のイメージを伝えると、クリスがこの名前を良い響きだと評し、ミラルダさん達も「うんうん」と良さそうな印象……ただ、マサトさんだけは如何にも「驚愕」という表情で固まっていた。

『……なあに?』

『アナタの名前よ、今日からアナタの事を「ネメシス」って呼ぶ事にしたの……「ヴァルハザク」っていうのは、アナタの種族の名前であつて……アナタ自身の名前じやないもの』

『……そうだつたんだ……じゃあ、ボクの名前はネメシス……?』

『……そうだよ……もう良いや、それで』

彼の勘違いを訂正しつつ名前を覚えさせる……マサトさんは何故か呆れたような諦めた様な、微妙な雰囲気を出していたけど……彼は素直に自分の名前を受け入れてくれた。

『ボク、ネメシス……ボクの名前はネメシスだよ……ネメシス、それがボクの名前……』
覚えたての単語を反芻するように、自分の名前を自己紹介風に連呼してネメシス君……生まれとしては私の方が幼いけど、精神年齢は私の方が上だから君付けでも良いよね?

名付けが終わるとほぼ同じタイミングでレクスの輸送準備も整い、後はこの谷を出るだけ……となつたのだが……。

『……その人を連れて出るのは……多分ムリだよ……あの空っぽの身体、ボク以外の生き物は必ず襲つてたから……』

……ちよつと待つて……マジで忘れてたわ。

というか、さつき私達もキツチリ襲われたでしょ……何で頭からすっぽ抜けてるのよ

……

死骸

瘴気の谷の奥地……そこを住み処とする古龍ヴァルハザク。

彼は特殊個体『死を纏うヴァルハザク』だつた……

『……あの空っぽ達が……襲つて来るよ……』

「またアレの所を通らなきやダメなの?! 嫌よ! 何とかならないの?!」

……天羅さんである。

少し前に奴等を目撃した時も半ば錯乱状態になつていたし、今もネメシス君を視界に入れまいと必死で、絶対に彼の方を向こうとはしない。

……ネメシス君には悪いが、ヴァルハザクの外観はまさに「死んで腐つてるはずの死体がまだ動いてる」感そのものだし、当のネメシス君はそこへ更に「カビだらけ」というイメージを付け足した様なモノだ。

無垢な彼に、まさか自分がそんなイメージを持たれているとは思わせたくない……マサトさん達もその事には同意している。

『……ボクが一緒なら……襲われない……と、思う……』

「嫌 yムグツ」

「あく、是非ともお願ひしたいね……アタシ達も、ココまで来たのは始めてだし……上まで案内してくれるなら、一石二鳥だよ」

『そ、そうだね！ ミラルダ、アミラも良いかな？』

「あ、はいっ！」

「そ、そうですね！」

天羅さんの拒絶反応を秒で封じ込め、誤魔化す様に道案内のオマケを取り付けるカルラさん……天羅さんの拒絶阻止成功にホツとしつつも、マサトさんが提案に乗っかり、ミラルダさんとアミラさんは慌てつつも同意した。

『ネメシス君……お願い出来ますか？』

私は一連の反応に気を付けて彼の返事を待つ。

『……うん、良いよ♪ ……あの空っぽも……キミ達の邪魔になるなら……何とか、したいな……』

思いの外の快諾に天羅さん以外は湧いたが、当の天羅さんは……

「うう……もうヤだよう……死体が動くとか……怖いよマサトおく……グスン」

完全に涙目でマサトさんにすがり付いていましたとさ。

アあ…………う…………あ…………ア”……

谷の上層部へと続く道…………やはり普通の黄色い瘴気とは違う、青紫色っぽい瘴気の濃いエリアには…………多種多様なゾンビ達が彷徨つていた。

よくよく観察していると、時折現れるギルオス達にも襲い掛かつており…………まさに「生き物全てが敵対存在」と言えそうな雰囲気だ。

「奴等は一体…………何故この地に現れたのか…………そもそも昔から居るのか、今回の異変と何か関係があるのか…………」

『自然に、とはさすがに無いと思いたいけど…………その可能性も無くはないよね…………』

『彼ネメシスくんに力を貸してくれるモノ細菌類達の近縁種、という可能性もあります…………』

あの後、マサトさんに「ゾンビ」について教えて貰った私…………前の世界で流行りだつた、人為的ウイルス災害を題材にした「バイオハ○ード」と呼ばれるゲームで爆発的に知名度が上がり、『生ける死体』の代名詞として定着したのだとか…………

ホラー耐性はあるけど、目の前でやられちゃさすがにドン引きしたくもなる…………天羅さんは、その耐性も無かつたのだろう…………御愁傷様としか言えない。

『ともかく、アレは生き物全てに襲い掛かる…………ネメシス君だけがその例外、という事です。

彼が攻撃した場合にどうなるのか、試してみたいのですが…………生憎とそんな余裕は

ありませんし……瘴気自体も何とかしないと』

『うん……空っぽの相手は出来ても……風で瘴気そのものは、ね……』

マサトさんの風はかなり強力な筈なのだが、谷の瘴気は何故か吹き飛ばせなかつた

……

最初は悪い冗談だと思つたが……実際に竜巻を起^こしても、地形を抉る程のブレスでも……谷に立ち込める瘴気は秒で元通りに……

強力無比な筈のマサトさん^{クシャルダオラ}の能力を以てしても、谷の瘴気を払う事は出来なかつたのである。

そんな瘴気をどうするか……レクスには一応マスクを付けさせたが、可能な限り瘴気の濃い場所は避けて通りたい。

万が一、マスクが機能しない場合にも備えなくては……

『……ニヤツ』

その時だつた……一匹のテトルーが岩陰から姿を見せ、トテトテと私達の方へ歩いてくる。

『可愛いく♪』

わお、ネメシス君とミラルダさんが秒で反応した……そのテトルーは赤黒い奇妙な石を拾うと、勢いを付けて……

『ミヤウツ!!』

すぐ側の段差を掠める様にして瘴気の中へと投げ込んだ……するとどうだ、石は段差で火花を散らした瞬間から石が燃え始め、地面に落ちても一定の火力のまま燃え続けている。

しかも不思議な事に、火の付いた石から一定距離内の瘴気が瞬く間に消え……いや、瘴気そのものが生き物の様に素早く動き……まるで火の熱を嫌つて避ける様に遠退いていったのである。

テトルーは石を拾つた場所を示し続け、クリスがそこにある同じ様な石を拾い上げた。

「この石……種火石です！ そうか……この瘴気は火や熱を嫌う性質なんですね！」

テトルーはクリスの言葉を肯定するように頷く……するとレオンさんが

「成る程……この地に生きるテトルーの協力を得られれば、調査も捲りそうだな……よし！」

そう言つて、背負つていた荷物から食糧を取り分け……テトルーの前に差し出した。

「俺達は新大陸調査団の者だ……良かつたら俺達の調査に、是非、今後も協力を頼みたい。

これはさつきのお返しと、これから協力への対価として……」

首を傾げるテトルーに、レオンさんはさらに告げる……

「……お前達の部族の長に伝えてくれ、『俺達はお前達との共存を求める』ってな」

半信半疑な感じだったが、テトルーは数秒思案して頷き……差し出された食糧の小袋を受け取ると、元来た道を戻つて行つた。

『……レオンさん……』

「か、可愛さに負けた訳じやないぞ？ 彼等の協力があれば、今後の調査も捲りそうだからな……！」

照れているの隠し切れてないけど？ w

……でも、彼等と仲良く出来るなら是非そうしたいよね……

早速、テトルーから教えて貰つた種火石を拾い集め、それぞれ左腕に装備しているスリングガーヘと装填……種火石改め『スリンガー松明弾』として活用し、熱で瘴気を払い退けながら道を進んでいく……

先ほどのゾンビがウヨウヨしていたルートだと、全てのゾンビを撃退しなければならないため迂回し……ネメシス君に先導して貰いながら、上層にあるという「かつて3期団が使用したキャンプ」を目指す事になつた。

『……ずいぶん、前の事だけど……ヒトの気配があつた場所なら……覚えてるよ』

ネメシス君はヴァルハザクとして、既に数十年は生きていると言う……その記憶力は確かに、上層に生きる大型モンスターの生態を一部ながら事細かに覚えていた。

その情報をクリスが事前に調べていた3期団の情報と照らし合わせると……

この地にはドスギルオスとオドガロンの他に、上層部には「ティガレックス」や「ラドバルキン」が生息……中層部には稀に「ディノバルド亜種」が姿を見せる事も判つた。

「ネメシス君も、シオンと同じで……ヒトを悪く思わない古龍なんですかね？」

クリスの言葉に、思うところがあつたのか……ネメシス君はこう返してきた。

『……ボクは、みんなのかわいい姿を……近くで見るのが好き……面白かったり、楽しそうだつたり……いろんな顔を見てたい……』

……でも、ボクが外に出ると……みんな怖がるし、姿を見せなくなるから……』

見た目やその能力で忌諱され、どうしようもない孤独感に苛まれている筈なのに……彼は誰に当たるでもなく、その現実を黙して受け入れ、既に諦観までしている……そんな彼に、私が出来る事は……

『……私は、忌諱なんてしません……むしろ、この道を覚え……必ずまた会いに来ます。だつて、私も古龍……この地で、長い時を生きる存在なのですから……』

「……シオン……あんた……」

『……ありがと……シオンさん……』

だが、全てが順調に行く事などある訳もなく……私達はゾンビの集団に^{でくわ}出会し……包

囲されてしまった。

「もう少しで上層のキャンプだというのに……！」

「諦めるな！ ココを突破すれば……ツ?!」

ヴォオオオオアオアアア!!

悪い事は重なる……とは良く言うけれど、コレはさすがに勘弁して貰いたい。

『ティガレックスに……ラドバルキン?! 奴ら、両方とも歴戦か……!』

マサトさんの言葉に、ハンター全員が武器を手に構える……しかし

「……やつぱりヤダ……ゾンビは嫌あ〜!!」

あちやー、天羅さんがまたパニック状態に……この中で一番破壊力に秀でる天羅さん

が戦闘不能となると……あ、ヤバい……詰むかも。

「クリス、天羅を下がらせろ！ シオン、行くぞ……今回だけは俺が相棒だ！」

『頼りにしてますよ、レオンさん！』

「アミラさん、私達はラドバルキンを！」

「ハイッ！」

『頼む！ ネメシス君、ゾンビ達の相手を頼めるかい？』

『うん……分かった……！』

私はレオンさんの隣で2足に立ち上がり、体内のエネルギーを活性化させて戦闘に備える……レオンさんは片手剣を抜き、一人呟いた。

「……不思議な感じだな、古龍と共に闘なんて……」

『来ます！』

しばらくは一進一退だつた……ラドバルキンは機動力が高いので、マサトさんと共にミラルダさんとアミラさんのコンビが担当し、ネメシス君はゾンビに狙われない特性を生かして、クリス達を守る防波堤に……私はレオンさんと共にティガレックスと戦闘し

て いる。

「シオン、奴の足を止められるか？」

『……やつてみます、次に走り出したら……！』

策を弄し、私は弾丸ブレスの準備をする……狙いは頭と前足……ティガレックスは一度走り出すとなかなか止まれないらしく、私達が避けると何度も行き過ぎては無理矢理な方向転換……というパターンを見せて いた。

……狙い撃ちするなら、そこしかない。

目論見通りティガレックスは暴走状態に入り、私は弾丸ブレスを頭、前足、後ろ足の順に狙い撃つ……光弾は全て狙い通りに直撃し……

グオオオアア……！ ギヤウウウン？！

勢いの付き過ぎたティガレックスは、特濃の青紫の瘴気の中へと突っ込み……更に壁へと激突して氣絶タダツク状態となつた。

「…………よし、今のうちに雑魚を蹴散らして突破するぞ！」

レオンさんの指示で、ハンターと古龍は一斉にゾンビの壁に突撃ようと集まる……しかし、ティガレックスが予想よりも早く気絶から復帰し、再び猛攻を開始しようと両足を踏ん張った直後……想像を絶する事が起こつたのである。

ヴウグウウ……ウ……グオオ……ツ……

「何だ……ティガレックスの様子がおかしいぞ?」

『……? 苦しんでる……? さつき、凄い濃度の瘴気を浴びてたみたいだけど……』
明らかにもがき苦しむティガレックス……やがて瞳から光が失せ、そのまま力無く倒れ伏してしまった。

『……え……?』

ラドバルキンは……マサトさんの硬化させたダイヤモンド甲殻に攻めあぐねている所にミラルダさんとアミラさんの連携で大打撃をマトモに喰らい、コレは不味いと言う風に撤退していたし、ティガレックスの後にゾンビさえ突破できれば……という状況での異変だつた。

「…………何か、様子がおかしくはないか……?」

デューケさんが更なる異変に気付き、声を上げる……その直後……完全に死んでいたはずのティガレックスの死体が急激に変異し始め、そのままゆつくりと動き始めたのだ。

『……まさか……そんな……?』

ティガレックスの死体……その黄色い甲殻を突き破り、異形の触手や巨大な爪……目玉などが乱雑に体表へと形成されていく、そしてティガレックスの左肩には一際巨大な

目玉が現れ、周囲は膨れ上がった筋肉組織が皮膚や甲殻を引き裂き、露出する……顔面崩壊した頭も見る間に異形化し、既に頭の体を成していない……この変異する間もティガレックスの死体はその場で蠢き続けており、異常に盛り上がった筋肉組織の動きに合わせて奇妙な動きをしていた……

あり得ない……いくらなんでも、この短時間で死体をココまで変異させ、ゾンビにする事など自然現象では不可能な筈だ。

ましてや、ティガレックスは死んでまだ間もないのに……この変異速度、尋常じやない！

……生きていた時よりはだいぶスローな動き……だが、ティガレックスの死体は動いている……

私達の目の前で、まさかのゾンビ化……しかも、死の縁から甦つた様に蠢き、異形と化した。

変異が終わつたティガレックスは最早轟竜の面影など無くなり……そこに居るのは、全身の皮を剥がされてなおも生き続ける巨大な人型の何かだつた……

ヴ　オ　オ　オ　オ　ア　ア　ア　ア　ツ　！　！

元々の頭があつた場所は既に肉に埋もれており、新たに形成された口の下頸に辛うじて残滓が見えるのみ……その口で元の個体以上の咆哮……最早、咆哮とは名ばかりの爆

音攻撃と言つても過言ではないその声を響かせ、スローな挙動ながらある方向へと動き出す。

「ツ?! しまつ……?!」

『クツ……やらせませんツ!!』

あろう事か、ゾンビ化したティガレックスの向かう先には、クリスやカルラさん達がまだ隠れている場所……！

咄嗟に私はティガレックスの前に飛び込みながら尻尾にエネルギーを込め始め、振り向く勢いそのままに真横に振り抜く……

『ツ?! ダメだシオン！ 直接触れては……！』

マサトさんの静止が耳に入るも間に合わず……私の尻尾はティガレックスを真横から薙ぎ払う……口を開けたその大顎に尻尾がクリーンヒットしたティガレックスは、下顎が外れその部位がそのまま跡形もなく吹き飛び……胴体も打撃の勢いそのままに大回転して壁に叩き付けられ、もはや全身の骨格は原型を留めていない……不必要なまでのエネルギーを込めた尻尾の一撃は、ゾンビとなつたティガレックスの全身を駆け巡り、内部の至る所で爆ぜ、新たに形成された部位を悉く破壊し尽くし……異形と化したその肉体を……鮮血滴り物言わぬ、あまりにも巨大な肉塊へと変貌させたのであつた。

『……ハツ……ハアツ……』

咄嗟の事でエネルギー操作が不完全なまま尻尾を繰り出した為、瞬間的なエネルギー消費量が馬鹿みたいに跳ね上がった……私は荒い息を整えつつ、レオンさんがちゃんと死んだのか……確認するのを待つ……慌ててマサトさんが『尻尾は?! 変な感じしない?!

感染してないよね?』と、エラい剣幕で捲し立ててくる。

……大丈夫ですよ、ゾンビはさつきの（ティガレックス）で最後でしたし……

「オーケイ、大丈夫かあー?!

ほら、何か良いタイミングで救援も来ましたよ?

急襲

「ようやく合流できたな……あんた等、全員無事か？」

『エイデンさん！ 救援に来てくれたんですか？』

「ああ、急いでお前達に伝えなきやいけない事があつてな……！」

緊急の要件？ この状況で緊急を要する事態というなら……もしかして……

『…………まさか…………?!』

『…………ッ?!』

いつになく神妙な面持ちでエイデンさんの口から出た言葉は……

「よく聞け……今、例の黒鋼龍がアステラを強襲している」

ついにその時が来てしまった……アイツはマリナさん達を下僕として従えようとし
ていたから、多分「戦力の拡充」をしていたのだろう。

それが済んだから、アステラを強襲……ん？ ちょっと待つて……何か見落としてる
気が……。

『エイデンさん、エリスさんは……？』

「ああ、俺とは別行動でセリエナに救援を求めにな……それがどうかしたのか？」

悪い予感が当たつてしまつた……最近、こんな風に悪い予感ばかり当たつてしまふ。恐らく、黒鋼龍はアステラだけでなくセリエナにも下僕を送り込んでいる筈だ……もし、それが自身と遜色ない強さの存在だつたなら……？

『それは罠だ！ アイツはセリエナにも下僕をやつてゐるハズ……！』

マサトさんも同じ考えに行き着いていたらしく、罠だと看破した……もし、このままアステラとセリエナにそれぞれ別れたら、恐らく各個撃破され……アステラかセリエナに纏まつて救援に向かつたとしても、片側で手こずつてゐる間に挟撃されるだろう。

『……私のせいだ……私がもう少し強くて、黒鋼龍をどうにか出来ていれば……！』

そう呟くと共に翼を広げ、風に乗つてアステラへと飛翔しようとするマサトさん……ミラルダさん達を置いて行く気なのか、普段は起こさない強風を纏つた行動に、私達は身動きが取れず……飛び去るマサトさんを見送る事しか出来なかつた。

『……マサトさん、焦つてる……？ 黒鋼龍を抑えられなかつたから、責任を感じて……』

「そんな?! 前もアイツは従わないマサトを殺そうとしてた……今アイツの前に出たら……！」

「そんな事をすれば、今度こそ確実に殺されるぞ……！」

ミラルダさんの訴えに、残酷な結末を予想するレオンさんの言葉……それを聞いて悲痛な声を上げるアミラさん……私だつて見殺しにはしたくないし、今すぐマサトさんを追つて加勢してあげたい……でも、黒鋼龍はセリエナにも手を回しているはず……確實に苦戦を強いられているだろう。

(天秤に掛けるしかないというの……!?)

私にとつては、アステラもセリエナも、そしてマサトさんも同じくらい大切だ……そう簡単に天秤に掛ける事などしたくないし、する気もない……だが、状況はそれを許してくれない。

『……私は……どうしたら……』

ふと、零れた言葉……クリスやデューケさん、レオンさんも歯痒そうに拳を握つている……その時だつた。

『……何じや、何をそんな穴ぐらで悔やんでおる? 早う此所まで上がつて参れ』

古風な言い回しと、少し変わつた響きの声……頭上から降り注いだ声に、私はすぐ相手を理解し、翼を広げ飛び上がつた。

3期団の気球船が錨を下ろし、陸珊瑚の台地に空いた大穴へと鎖が降りている場所……大穴の縁で待つっていたのは、この地を根城とする存在……激流のぬしとも呼ばれる

古龍「ネロミエール」……スイレンさんだつた。

『しばらくぶりじやな、シオン……何じや？ えらく思い詰めた顔をしおつて……』

『……それは……』

私は言い淀んだ……この件に他のスイレンさん古龍は関係ない……端を発したのは黒鋼龍とマサトさんの問題であり、絡まれたマリナさんや同じ転生古龍であろう私ならともかく……全く関係ないスイレンさんに協力を頼むのは筋違いだと思つたからだ。

『……うん？ 何か勘違いをしておる様じやが、妾は他ならぬ、お主を心配しておるのじや……お主の行動は長く退屈だつた妾に、久しく忘れておつた楽しみを与えてくれたからのう。

そんなお主がそれほど深刻に悩む事じや、妾も無関心では居らぬし、楽しませてくれた「礼」と考えれば良い……どうじや、話してみよ？』

直接関わる事は少なかつたとはいえ、スイレンさんは私の行動を初めからずつと見ており……それを楽しみにしていたという。

知らず知らず監視されていた事に驚きはしたもの、全く嫌な気持ちにはならなかつた……多分、私の精神構造の一部はもう人間では無く……古龍「ゼノ・ジーヴア」へと変質しているのかもしれない……：

しかし、手前勝手な理由とはいえ「悩み事ならば話しなさい」と快く言い放つたスイ

レンさんにはもう感謝しかない……私は今までの経緯や、マサトさんと黒鋼龍との確執をスイレンさんに打ち明けたのだつた。

『成る程……黒鋼龍、か……何とまあ、馬鹿な考えを持つ愚かな者よの……』

私の拙い説明をしつかりと理解し、スイレンさんはヤレヤレ、という風に黒鋼龍の野望を「愚か」と切って捨てた。

『この世の全てを治めるなど、单一の生命には過分に過ぎる……世は多くの生き物が支え合つて初めて成り立つのじや、それを己のみで御せると思うなど……愚かの極みよのう』

『……どういう事ですか？』

『簡単な事じや、この世の理は複雑かつ精密……そして常に変化を伴う、それは幾多の命と多大な時間、そして多様な営みが世の流れとなり、流れと変化を生むのじや……かつてヒトはそれを自らの手で成そうと試み、幾度も反動や災厄に呑まれ……そして滅んで

おる。

今あるこの流れは、それを繰り返さぬ様にと……かつての白き王の命を代償に紡がれし理の輪の中にある……』

己の意識など単に「川に浮かぶ小舟」に等しきモノ……そして世界とは、永劫絶えぬ流れを湛える大河なのじや……故に、己が力のみで世を統べるなど、無駄な足掻きよ……』

小舟が大河を渡る事は出来ても、流れを変える事など出来ない……スイレンさんの持論は、聞いていた全員に納得できるものだつた。

『……じゃが、それとコレとは別の話じや。妾の楽しみを間接的にとはいえ奪う……その黒鋼龍にはキツい炎を据えてやらねばならん』

『……は……え?』

『セリエナとやらは妾に案がある……まあ任せよ、お主はマサトを追うが良い……!』

言うが早いか、スイレンさんは翼を広げ飛び上がり……呆気に取られた私を見下ろしながらそう言い残して飛び去つていく……

スイレンさんが飛び去るのを、下から上がりつつ私の背中越しに見たクリス達も、何が何だか訳が分からぬ……という風な感じだつた。

でも、私には……何だか、上手く行つたのではないか? という奇妙な確信が浮かん

でいた。

何故かは分からぬけれど……あのスイレンさんが『妾に任せよ』とまで言つたのだ、悪い様にはならないと思う。

「……シオン、スイレンは何て……？」

『多分、セリエナはもう大丈夫……私達はアステラに向かいましょう！ エイデンさんは、念のためセリエナにお願いします！』

「お、おう……分かつた」

「俺もセリエナへ行こう……アステラには師匠も居るし、シオン達が行くなら心配要らないだろうからな」

「……シオン、私達を乗せて行けますか？」

ミラルダさんは懇願するように私に頼み込んでくる……最初からマサトさんには彼女達が必要なのは分かつている……嫌でも連れて行くつもりだつたから、願つてもない事だ。

『勿論です！ ミラルダさんは背中へ……天羅さんとアミラさんもコツチに！』

ミラルダさんを背中に乗せると、私はすぐに立ち上がり……天羅さんとアミラさんを前足で掴んで飛び上がる。

クリスは自分の小飛竜を口笛で呼んでスリンガーで掴まり、デューケさんは3期団の

ハンターと拠点へとレクスを移送する為その場に残る……

「……全員、無茶はするなよ？ 片付いたらすぐに行くからな！」

レオンさんの激励を背に、私達はアステラとセリエナに別れ……共に迎撃へと向かうのであつた。

死闘

マサトの目の前には、あの時の黒鋼龍がいる……

『……フン……ようやくオレの元に下る気になつたか？』

『いや、止めるためだ……君の考えは間違つてゐる！』

黒鋼と黒鋼、2体の風翔龍が古代樹の森へと続く広場で睨み合う……そのまま後ろには、アステラ防衛の為に数多くのハンターが集合……ソードマスターである1期団ハンター、ヤマトを筆頭に総力戦の構えを取つていた。

黒鋼龍が放つた風弾の前へと敢えて飛び込んだマサト……龍脈の干渉かそれとも自身の覚悟故か、いつの間にかパワーアップしていた『風纏い』で生み出す竜巻を盾にして相殺し、反撃とばかりに高速で飛ぶ風弾を撃ち込んで黒鋼龍の注意を引き付け、アステラから引き剥がそうと風弾を連発する……が、低空飛行では姿勢が上手く安定せず狙いが狂う……同じ種族の黒鋼龍もそれを把握していた様で、敢えて動かず……的を外すマサトを嘲笑した。

『オレと同じ天下のドス古龍が……無様だな、やはりオマエはオレに勝てん。さつさと軍門に下るか、大人しく殺られろ！』

風弾の弾道を見切つて黒鋼龍が突撃……マサトは翼を硬化し盾に見立てて防御、反撃として尾先に展開したダイヤモンドの刃を突き込むが、黒鋼龍はこれを同じく尾で払い退け、頸の下から頭突きで返してきた。

咄嗟に首を捻つて頭突きを回避するマサト……黒鋼龍は無理せず様子見に戻り、マサトの隙を伺う……ヤマトは黒鋼龍を抑え込もうとしているマサトを援護するべく、相手の側面へ回り込もうとするが、ココに来て黒鋼龍が呼び集めていた下僕達……「アンジナフ亜種」「ナルガクルガ」「デイノバルド」そして「ディアブロス」が一斉に動き出し、咆哮しながらハンター達へと向かい始める。

「チイツ！ 他の竜を下僕として使うか……！」

「第1班はナルガクルガだ！ 第5班は援護に回れ！ 第2、第6班でディアブロス！ アンジナフ亜種は第3、第4班！ ……デイノバルドは任せるぞ！」

ヤマトより一足遅れでアステラから駆け付けたバンはすぐさま全体を指揮し、ハンター達もそれに即応……スリングガーや罠を巧みに使い、固まつて突撃してくる4体のモンスターをそれぞれ引き剥がしに掛かる……

アンジナフ亜種の頭に左右からスリングガーで張り付いた2人……右側が片手剣を使い傷を付けると左側が方向を変えさせ……付近にあつた大岩へとぶつ飛ばす。

更に別の2人がディアブロスの眼球を狙い撃ちするように投げナイフをスリンガーで撃ち込みつつ、偶然進行ルート上にいたドクガスガエルを刺激して毒状態にさせ……投げナイフが眼球に当たりディアブロスは痛みに悲鳴を上げながらフラフラと方向を見失つて巨木の隙間へと突っ込んで行つた。

更に別の2人もナルガクルガへ音爆弾を投射して怯ませ、その隙にシビレ罠を設置……怒り状態に移行したナルガクルガはハンター憎しで足元のシビレ罠に気付かず、一步踏み出した途端に全身をはい回る電撃を浴びた事で、本能的な恐怖を感じながら悶える……

そして、ディノバルドへと向かい突っ込んで行く人影が1つ……

「ハアアアアアッ!!」

ヤマトが太刀を手に突撃、対するディノバルドも自慢の尻尾……その大太刀を振り、迫り来る相手を廻ぎ払わんとステップを踏み、そのまま回転斬りを繰り出した。

キイインッ!!

しかし、見事なまでに息を合わせ……太刀使いは抜刀、僅かな残像を残して横廻ぎに振るわれた大太刀を、木葉の如く身を翻して回避し、その勢いのまま大きく踏み込みつつ、直前の回転運動を利用した逆袈裟斬りを見舞う。

巨体を支える脚に直撃した逆袈裟斬りはディノバルドの脚の靱帯を傷付け、堪らない

痛みに、デイノバルドは転倒……ヤマトは間髪入れずに太刀を構え突き込み、自身もまた突きの勢いを利用してデイノバルドの身体を駆け登り跳躍……自身の全体重と落下の勢いを乗せた「鬼神兜割り」へと繋げる。

ギヤアウオオオツ?!

次々に襲い来る痛みに困惑し続けるデイノバルド……ソードマスターと呼ばれるヤマトの剣技は、最早超人の域に達している。

これこそ人の見出だした一つの極致、と言つても良いかも知れない……：

「……お前には悪いが、次はその頸^{くび}を跳ねる……！」（チャキッ）

刃に付いたモノを振るい落とすと、デイノバルドも起き上がる……己^ダの相手^{ノバ}を正面に見据え、再びヤマトは構えを取った。

『クハハツ！　どうした？　その程度ではオレを止められんぞ!?』

『それ……でも、ツ……私は……！』

黒鋼龍の持つ異質な力……重力の軛^{くびき}が再びマサトを大地に縛り付ける。

マサトにも異質な力……甲殻に含まれる大量の炭素成分を利用した「元素変換能力^{ダイヤモンド}」を持つが、操作は限定期で自身に触れてなければ強度を保つ事が出来ない為、遠距離でも使える黒鋼龍の「重力操作^{グラビコン}」との相性は悪い。

『……何故、 そうして自分以外を見下すんだ……ツ……^{あきと}彰斗つ?!』

『その名で呼ぶなッ!!』

黒鋼龍の怒りに呼応して重力のパワーが増し、 マサトの身体へ20倍の重力が掛かり始めた。

『世界がオレを見下すからだ！ オレは選ばれし者なのに……前世でも、 この世界でも！ 誰もオレを認めようとしない……！』

『……つく……』

『世界がオレを認めないなら、 力ずくでも認めさせてやる……ああそうだ、 認めさせてやるのだ！ この身体と、 力で！ クハハハツ!!』

『……あ、 彰斗……!』

『くどいぞ！ 今のオレはアギト……黒鋼龍のアギトだ！ 前世の下らん人間ごときの名でオレを呼ぶなッ!!』

沸き上がる怒りに任せて重力で加速させた尾を叩き付け、 マサトの顔を殴る……打撃の瞬間、 抑え付けられていた輻が解かれてたらを踏み、 アギトが尾先に発生させた重力球の影響を受けて吹つ飛ぶマサト……

鞭の如く振るわれる尾先の速度で、 マサトには大型トレーラーと同等の質量をぶち当てられるレベルの衝撃を受けてしまい、 盛大に吹き飛んだのだ。

『ぐつ……桁違いのパワー……これも重力の効果、なのか……？』

『ああそぞさ……この力があれば、他の古龍だろうが禁忌だろうが恐るるに足りん！ アギトは再びマサトを睨み付け、重力の井戸へと引き摺り込む……対象に掛かる負荷や重力を何倍にも増幅させる「重力操作」^{（グラビコン）}によつて、マサトへの加重負荷が50倍にされ……全身の関節が悲鳴を上げる。

『…………あ……ツ!?』

文字通り問答無用で容赦なく押し潰される感覚に、マサトは肺の空気を強制的に吐き出させられ……悲痛なクシャルダオラの声が周囲に響く。

「「「『マサト（さん）……ツ?!』」」

そ、こへようやくシオンとミラルダ達が到着した……

「この野郎！ マサトを放せツ!!」

抜刀と同時に剣モードへ変形させて斬り付ける天羅さん……だが黒鋼龍は軽々と回避し、お返しと言わんばかりに風弾を放つ。

「……つく、前より動きが早い……?!」

『その武器の動きはもう見飽きてんだよオ!?!』

『ツ……天羅さんっ?!』

私は前脚を大地に叩きつけて龍脈のエネルギーを操作し、黒鋼龍と天羅さんの間……天羅さんを庇う様に爆発を起こす……咄嗟の事だつたのでほとんど無意識だつたが、功を奏したのか黒鋼龍は爆発に気を取られて狙いを外した。

『……チツ、この雰囲気……古龍種か？ だが見たこと無い奴……新種か？』

相手は間違いなく強敵だ……天羅さんの動きを完全に見切つていたし、初見なはずの地雷爆破グランドボム（ちよつと前に覚えて命名した）を避けた。

（マサトさんから、黒鋼龍は転生古龍だという事は教わったけど……ツ？）

私を狙つて風弾が乱射され、動きを阻害される……私は相手と違つて防御に使える技は無いけど、相手の防御を喰い破れる高威力のプレスがある。

『チツ、新種だからか……動きが読めん、だが戦い慣れては無いと見た……！』
『ええ、仰る通り……そもそも、私は無闇に戦う事はしません』

風弾を屈んでやり過ごし、黒鋼龍に言葉を返す。

『……古龍種のくせに戦わないだと？ ハツ、まるで子供の戯言だな……！』

不機嫌度が増した黒鋼龍は、私の細やかな思いを「子供の戯言」と切り捨てる。

『それの何処が悪いんですか？ 誰にだつて、戦いたくない時くらいあるでしよう？！』

戦わずに済むなら、誰だつてそうしたい……少なくとも、レクスやミラルダさん達……私が見てきたハンターと、その周りで生きている人たちは皆そうだった。だけど

…

『オレには無いな、そんな甘い考えなど！…………この世界は文字通り弱肉強食、そんな甘い考えじや到底生き残れん……それに人間なんぞと一緒に居れば、良いように利用され^て殺されるだけだ！』

『それは偏見です！　ヒトはそんな狭量な者ばかりじやない！』

『それこそ偏見だ！　オマエは人間どもの浅ましさや裏の顔を知らんからそう言える！』

互いが互いの見たものを否定し合う泥沼の舌戦…………その間も双方は動きを止めず、一進一退の攻防を繰り広げている。

シオンの光線ブレスを地形を利用して躲す黒鋼龍と、風弾を避けながら、何とか直撃させて戦意を無くして貰おうと隙を伺うシオン……

確かに直撃させれば、如何に黒鋼龍といえども手痛いダメージは免れないが、そもそも相手は自分がどんな存在なのかを認識している転生古龍…………戦闘の経験値からして私に勝ち目は無いに等しい。

(……でも、マサトさんは酷いダメージで動けない…………少しでも、私が頑張らないと……！)

マサトさんは彼に過ちを犯して欲しくないのだ……邪な形で力を振るえば、古龍とて

世界から戒めを受ける……あの時、龍結晶の地で垣間見た記憶……過去に起きたとされる【竜大戦】の断片であろうあのビジョンはそう言う事なのだ。

あの時のヒトは過ちを犯した……だから竜達は怒りに狂い、そしてヒトは滅びに抗い……お互い絶滅寸前にまでなつてしまつたのだ。

滅びに抗うのは間違つてない……その前に過ちを犯したのが悪かつた。
だから、古き白の龍王は自らを以て「理」を成した……再びその過ちを犯さない様に、互いに過ちを繰り返さない様に……

息吐く間もない猛攻に、戦い慣れてない私は防戦一方……天羅さんやアミラさんも加勢してくれるが、その度に軽々と避けられ、容赦ない反撃まで繰り出してくる。

まるで2人の動きを完全に見切つているみたいだ……どの位置からでも避けきり、動きに併せて反撃までしてくる。

『オマエもオレを否定するなら……殺すッ!!』

『……ツ?! しま……つ?!』

特大の風弾が一瞬の隙を突いて私に放たれる……弾が掠めた地面は深々と抉られており、その威力を見せ付けており、私はその時、アミラさんが黒鋼龍の尾で叩かれない様……大地にブレスで線を描き、牽制をしている最中だつた。

「……つぐ……うツ?!」

だが、特大風弾の弾道に人影が入り込み、そのあまりの威力に数メートルもの距離を勢い良く吹き飛ばされる……目立つ色と独特なデザインの防具に、誰かが分かつた瞬間……私は全身の血の気が引くのを感じ、その人の名前を辛うじて口にしながら目で追う事しか出来なかつた。

『……え、つ……ミラル、ダ……さん……?』

兆候

目の前で風弾の直撃を受け、吹き飛ぶ人影……私の隙を突いて放たれた攻撃は、私の首を狙つたものだつた。

『…………そ…………ミラルダ…………さん…………?』

まるでスロー・モーションの様に見えるその光景に、人影の正体を知つてしまつた私は驚愕と絶望に声が上手く出ない……それでも声を上げなきや、身体を動かさなきやと焦る。

『……ハツ、人間が自らノコノコ喰らいに来るとは……』

そう言いながらもアギトは私を嘲笑うかのように風弾を乱射してくるが、地脈を通して炸裂させたエネルギーで相殺し、すぐさまミラルダさんの側に駆け寄る。

吹き飛んだミラルダさんの身体は辛うじて呼吸をしているが、それも虫の息であり、呼吸音に混じつて聞こえてはいけない様なヒュー・ヒューという雜音がしていた……人体構造の把握はしているが、明らかに不味い……肺に骨が刺さっている上に動脈からも出血しており、喉に血が逆流していく呼吸を妨害している、更に全身の骨や筋組織、神経までもズタズタに引き裂かれ、もはや回復薬や秘薬ですらほんの僅かな延命にしかな

らない程の致命傷だつた。

『…………ああ…………やだ…………だめだよ…………ミラルダ、さん…………』

想像するに難くない「人の死」という現象……身近な存在が、命の灯火を消されようとしている……私はやるせない怒りと、それを上回る哀しみに全身を揺さぶられ……頭の中は、己の声無き慟哭で一杯になつていた。

『マサトさん……と、旅を……続けなきや……貴女達……2人は、こんな所で終わつちや……ダメなのに……！』

頭が急激に冷え、胸の奥が焼け付く様に熱い……哀しみに捕らわれ、私の心は冷静さを失つてゐるのに……身体が突き動かされる……ミラルダさんの身体にそつと触れ、今にも消えてしまいそうな灯火を感じる。

私の心は、この灯火を消してはいけないと強く願つた。

side : マサト

それはスロー・モーションに見えた……何かの間違いだ。

吹き飛ぶ彼女の身体……私の側に居た筈の温もりが、私の小さな同胞を守る為に駆け出し……その盾となつた。

『……ハツ、人間が自らノコノコと喰らいに来るとは……』

目の前の黒い同類……この騒ぎの元凶、そして……私の大切な存在を踏みにじつた、敵。

『…………哀しいか…………？』

(誰かの声が聞こえる)

『だが、コレはお前の選んだ選択だ』

(…………分かつてるさ、そんな事は…………！　でも……)

『あまりにも残酷、か？』

(…………)

『…………こおらつ！　そんな言い方ダメでしょ?!』

『む、済まん……癖でな』

(…………?!)

私は今、時の止まつた色の無い空間で、2つの何かと対峙している……
片方は黒……まるで全てを塗り潰す、漆黒……

『……我は元々こういう性分なのだ、許せ』

漆黒が声を発し、その実像が徐々に露になつていく……

彼の姿は厄災の化身、全ての頂点にして絶望……黒龍ミラボレアス。
 『……まったく、この子はいつもこんな調子で……』めんね、悪気はないのよ
 もう片方は白……何物にも侵されぬ、純白……声と共に実像を帶び、ミラボレアスと
 良く似た体躯の龍が顕れる。

彼の姿は数多の龍の祖、全ての始まりにして希望……祖龍ミラルーツ。

『……ココは龍脈の中の、世界の隙間……と言えば良いか？ 今、貴様は我々の干渉を受け、意識のみでこの場に存在しているのだ』

『現実の時間とは切り離された場所……といつても停止してゐる訳じやないから、手短に言うね。

……キミは、喻えどんな事をしでても絶対に守りたいモノ……ある？』
 (…………ある…………)

2体の禁忌が放つ異様な雰囲気に押されっぱなしではあるけど、私は負けじと問いか
 答えた……掛け替えの無い伴侶たち、共に生きる大勢の命、そして……同じ境遇の仲間。
 (私は皆を失いたくない…………)

凶悪な顔してゐるクセに、その雰囲気は實に穏やかなミラルーツ……私の返事がよほど

嬉しかつたのか、ニヤニヤと隣のミラボレアスを肘で小突く……対するミラボレアスは小突かれてかなり嫌そうな雰囲気……でもそれは一瞬で、咳払いと共に私に向き直る時にはもう威厳のある雰囲気でこう言つた。

『……ならば、抗つて見せろ……その為の「力」は既に貴様の内にある』
 (……え……っ?)

疑問だらけのままなのに実像が霞み始め、視界が白く塗り潰されていく中……声だけが響いてきた。

『……覚醒のキッカケ位はくれてやろう、後は貴様次第だ……』

『フフツ、頑張つてね♪』

ほんの一瞬の事だつた……禁忌古龍2体との邂逅は、夢の様なものだ。
 (でも……夢じやない)

あの直後からだろうか、身体中が熱に溢れている……全身はボロボロでマトモに動け

なかつた筈なのに、動けている……

『…………ん？ フンツ、まだ死んでないか…………まあ良い、どうせあのままでは助からん…………どうだマサト、こんな脆弱な奴等を生かす理由は無い。

お前も自然の摂理に』

『黙れッ!!』

私は身体中に溢れるエネルギーを感情のままに解き放ち…………目の前の敵にただ一言をぶつけた。

s i d e o u t ……

突然巻き起つた黄金の竜巻が、黒鋼龍の纏う風と共に薄暗く曇っていた空を切り裂いて行く…………それと同時に、私はその風から3つの力を感じた。

『…………な…………何だ…………この風は…………その力は…………?!』

黒鋼龍もその力に驚いたのか…………声に明らかな動搖が現れていた。

覚醒

クシャルダオラ特有の黒っぽい甲殻が、僅かに黄金のオーラを纏う……足元には大量に精製されたクリスタル状の欠片が散らばつており、大気の流れも僅かに黄金の揺らめきが混じっている……そしてあれ程淀んでいた曇り空にも幾つかの穴が空いて、まるでスポットライトの如くマサトさんを照らし出していた。

『……な、なんだ……何なのだ、その光は……ッ?!』

黒鋼龍アギトは、この異変に激しく動搖した。

彼もまた転生者であり、マサトと同じくクシャルダオラへと生まれ変わった時から「己は選ばれた」、「比類なき力ある者となつた」と考えている。

実際、アギトには「重力操作」という特殊能力があるが……名前から想像するほど勝手の良い力ではなく、またその本質をアギト自身は知る由も無い。

『……アギト、君の力は確かに強い……だけど、私は負けられないんだ……!』

力強く一步を踏み出すマサト、その足元や大地からは次々と謎の結晶体が生成され、まるでイヴエルカーナが冷氣を纏つて歩いてくる様子にも見えた……

『ツ！ ほざくなあツ!!』

恐らく最大出力の、強烈な風弾を連発する黒鋼龍……だがマサトさんは全く動じず、前足をそつと踏み出し、巨大な結晶で防御する……黒鋼龍は立て続けに重力操作でマサトさんを拘束してきた。

『もう手加減などせん！ このまま醜く潰れて消えろオツ!!』

地面ごと一段沈み混むマサトさんの身体……だが、彼の表情は穏やか……いや、黒鋼龍を哀れみの目で見ていた。

『……マサト……さん……』

何だろう、焼け付く様な怒りでもなく……身体中を引き裂くような憎悪でもない……マサトさんの瞳に宿った感情は、ただただ……純粹な哀れみだけだった。

『……もう、終わりにしよう……キミは、生きていく世界を間違えたんだ……』

悲しげにマサトさんがそう呟き、前足を上げて咆哮する……僅かに遅れて、極大範囲の暴風が周囲を覆い……大量の結晶体を撒き上げ始める。

『グルゥアアアアアアツ!!』

黒鋼龍はマサトさんの意図に気付いたのか、重力操作もそのままに直接行動を阻止せんと突進を開始するが……

『ツ!』

黒鋼龍の顎の下を細い光が掠め、黒鋼龍がその場で怯む。

一瞬、私の背中に寒気が走つた……あの光は、恐ろしく速い上に熱い……直感で分かる。

一度怯んだ黒鋼龍だが、次が来ないと知るや否や再び突進を始めようとして……

『……ガアアアアグウツ!?』

今度は雨の如く降り注ぐ大量の光に全身を貫かれた。

……私は夢でも見ていたのかなあ？ この光景はマサトさんの造り出したものなのか？ 実感が湧かない……でも、黒鋼龍は確かにさつきまで私とも戦っていたし、マサトさんにもアタックを仕掛けていた。

マサトさんも痛烈なダメージを浮けたりしたし、歴然とした力の差はあつたハズだ

……

でも、この光景は……現実なのだろう……

『……ツ……！……、……グウ……ツ!?』

全身をあの光に貫かれ、一瞬で全ての体力を消し飛ばされた黒鋼龍……声を上げる暇もなく、その身体中に漆黒の穴を穿たれ……最後の踏み出しの勢いを殺せないまま大地に叩き付けられる。

辛うじて頭は避けられたが、身体中の穴からは血も滴らない……多分、全ての傷が中の肉を焼かれ、強制的に出血を止めさせられているんだ。

(……慈悲、なのかな……でも、皮膚の内側の火傷は、取り除かないと……あのまま)

推測だけど、体内を焼かれたまま放置すると、傷部分は一生残り、動く度に鋭い痛みを与えてくると思う……命は取らないけど、最大限の罪……苦痛を味わつて貰うつて事なのだろう。

ミラルダさんを殺そうとしたんだから……因果応報よね。

「…………、…………あ…………」

その直後だった、無意識で発動していた何かによつて、ミラルダさんの身体は徐々に治癒されていき……ようやく安定した呼吸の音が戻ってきたのだ。

(ミラルダ、さん……)

私は再びミラルダさんの状態に意識を向ける……先ほどよりかは幾分かマシな状態らしく、荒い呼吸音はもうしていない。

「シオン！　ミラルダは……」

黒鋼龍が動かなくなり、総司令やヤマトさん……天羅さんやアミラさんも駆け付け、ミラルダさんの様子を伺っていた。

その後に黒鋼龍からようやく視線を切り、マサトさんも……

『ミラルダ……シオン……』

アミラさんが声を掛ける……力の流れには逆らわず、意識を向けたまま私はエネルギーの制御を徐々に弱めていく……

運動してミラルダさんの身体から感じる膨大なエネルギーも引いていき、消え失せる……が、ミラルダさんの状態はそのまま安定を保っていた。

『……もう、大丈夫……です、ね……後は……お願いします……す……ツ……』

酷く消耗したのか、それすらも自分で判断できない……辛うじて私は、総司令とヤマトさんの方を向き『後はお願ひします』とだけ言い残すと、そのまま意識を手放してしまった。

シオンが起こした不思議な現象で、奇跡の様にミラルダは一命を取り留めた。

……だが、シオンはその直後に倒れてしまい、我々はその原因を後から知る事になる。「……横つ腹に浅い傷跡と、毒の痕跡が在ったわい……幸い、傷そのものは浅かつたが……毒の方がちと厄介での」

聞けば、シオンが受けたのはランゴスタの麻痺毒とギルオスの腐敗毒の混合物で、筋組織の運動を妨げたり、正常な細胞組織を強引に崩壊させていくモノらしい……それぞれ単体ならハンターは数分もあれば回復できるし、人間よりも高い治癒能力を持つ古龍ならば、それほど大した事にはならない……

だがシオンは古龍といつてもまだ未成熟な幼体だ。

毒は未だにシオンの身体を徐々に蝕んでおり、既に筋繊維や内臓組織を始め多くの生体組織に影響を与えている……神経系まで冒されてしまえばその部位は永久麻痺必至、微量でも脳組織に到達したが最後、汚染された部分によつては植物状態化……下手をすれば脳死にすらなり得る危険な状態だった。

「何て事だ……一体誰が、そんなに毒をシオンに……！」

「…………そう言えば、あの時……」

天羅はシオンと共闘している時、自身の攻撃の余波で吹き飛んでいた何匹ものカンタロスの残骸を目撃していた。

そして、その身体に得体の知れない液体のようなものが塗られていた事も……

「まさか……そのカンタロスを利用してシオンに毒を……？」

「甲虫種も、既に奴の支配下だつたとしたら……そう考えると辻褄も合う、カンタロスの甲殻は生半可な硬さでは無いからな……」

「……シオン……あなたは……」

レクスに引き続き、シオンまで昏睡状態……ミラルダは既に危機を脱したとはいえるが、まだ目覚めていない。新大陸に住む皆が協力してくれたとはいえるが、この結果は、あまりにも悲惨な結果となってしまった……

(……お、おの……れえ……マサト……何なのだあの力は……?!)

全身を光線のような何かで貫かれたアギトだが、古龍の生命力故に幸か不幸か……辛うじて生きていた。

しかし、既に虫の息にも等しく……身体を動かそうものなら傷が疼き、身動き1つ取れないでいた。

(……このままでは……ツ……むつ?)

これまた幸か不幸か……この場に現れたのは、下僕としたイビルジョー……その眼は正気を失い、生存本能……つまり肉体の欲望のままに行動している。

グルルルルウ……!

『オイ、貴様……！　俺を……ヒツ?!』

グルウアアアアアアツ!! ギヤオオオオオ!!

『ガアアアアアアアアアツ!!　お、お前えええ!!』

アギトの声に、明らかな動搖が走つた直後……繰り広げられた光景は、凄惨すぎて語れない。

声が聞こえなくなつた後、その場に残されていたのは、大量の鮮血と、引き摺られた痕跡……そして、僅かに残された何者かが抵抗した爪の跡などの痕跡だつた……

コラボストーリー 「赫と白の円舞曲」

閑話：奇しき彗星との遭遇

アステラの周囲を囲む古代樹の森に、怒りに燃える獣竜種の咆哮と……およそ生物の出す音とは思えない様な、奇妙な咆哮が木靈する。

私はいつものように戸山で日光浴をしながら、海岸へ釣りに出るハンター達を眺めたり、付近を散策するテトルー達と時々会話をしながらのんびりと過ごすつもりだった。

古龍研究者の一人から「古代樹の森に、赤い彗星が森に墜落した！」と聞いた。

普通は彗星なんて物が落ちたのなら、この一帯は消し飛んでしまつてゐる筈だ。

だが詳しく話を聞くと、その彗星は普通では有り得ない高度を飛び、常識では考えられない軌道を描いて落ちたという……

……それはもしかすると、古龍なのかもしれない。

私もこれまでに様々な古龍と出会い、戦い、話し、経験を重ねた……彼らはそれぞれが特異な能力と、常識外の外見をした者達ばかりだった。

水と電気を操る「涙龍めいりゆう」、風を纏い操る「風翔龍ふうしょうりゆう」、死

を呼ぶ程の瘴氣と共生する「屍套龍ヴァルハザク」、全てを凍て付かせる「冰龍イヴェルカーナ」……そして、地脈工ネルギーから生まれた「冥灯龍ゼノ・ジーヴア」。

これまでの体験から、常識外の現象を発するその多くは「古龍」に由来する出来事が多かつた……ならば、今回の常識外の出来事も古龍が関係しているのではないかと推論したくなる。

研究者はその推論を元に、過去の文献にヒントが無いか探すと話して去る……

その後に響いたのが、冒頭の表現でしか表せない音だ。

声に反応した私を止めるべく、レクスが声を掛けた事には気付いたが……奇妙な感覚と好奇心には抗えず、私は古代樹の森へと飛翔した……それがまさか、こんな事になるなんてね……

見つけたのは奇妙な感覚のするオーラを身に纏つたアンジャナフと……私と同じ銀

色の身体をした、初めて見る生き物……

……いや、最初は生き物と思うには歪過ぎると感じた存在だった。

全身を銀色の甲殻が覆い、およそ翼とは思えない……あるはずの翼膜が一切見当たらぬ、奇妙過ぎる1対の翼……いや、あれを正確に言うのなら「翼脚」かな？

その翼脚はまるで人間の腕みたいに自由に動き、後方を向いていた部分が前を向き……6発の赤いエネルギー弾を発射してアンジヤナフを攻撃している……それが可能な構造をしているのだろう、物凄く奇妙な翼（？）よね。

（うーん、これは……どっちに味方すれば良いのでしょうか……？）

いつもと違うアンジヤナフ君と、見たこともない銀色の龍……どちらに加勢すべきか迷つた私は、ひとまず静観する事しか出来なかつた。

・ · · ·

意外な事に、アンジヤナフの方が優勢に出た為……私は未知の龍の方に加勢しようと「ブレス攻撃」のエネルギーチャージを開始……今までの経験から、私のブレス攻撃は

熱線

凄^高威^力の熱^量で甲殻^{ビーム}や肉^ムを焼き焦^がす光^{攻撃}と認識している。

その威力は最早「生物の攻撃とは思えないものだ」と言われている為、余程の事が無ければ防がれる心配もない。

アンジャナフへ当てるくらいならもう慣れきつているので、この距離で外す……なんてへマもしないし、まずは威力を抑えた牽制で、アンジャナフ君には火傷ダメージで撤退して貰おう。

偵察から強襲へと作戦を変更し、高度を落としつつ軽めにチャージしたブレスをアンジャナフに向かつて放つ。

上空から断続的に放たれた熱線は、アンジャナフの身体に吸い込まれる様に命中し、容赦なくその皮を焼き焦がす……

銀色の龍は突然の横槍に少しだけ呆然としたが、私が『援護します』と言ったのが伝わったのか、コクリと頷いた……聞こえるけど喋れない……最初の頃のマサトさんと同じタイプなのかな？

だが、それは違っていた……アンジャナフは火傷のダメージを負った事で撤退すると私は踏んでいたが、奇妙なオーラが膨れ上がり、怒りの感情が遠くからでも分かる程に怒りの咆哮を上げた。

その時だ……

『さつきの熱線、それで、^{アンジヤナフ}バイセンの足元を狙つてくれ……その隙に俺の十八番をお見舞いしてやる』

……バイセン？ それはアンジヤナフの事だろうか？ 淫まじく疑問に思つたが、彼が意思疎通出来る「古龍」である事は分かつた。

彼の口ぶりから、なにか作戦があるのだろう……私は『それなら任せてください』と返事を伝え、高度を再び上げてブレスをチャージする……銀色の龍は軽やかなステップでアンジヤナフの突進を避け、アンジヤナフが彼の方へ向き直つたタイミングで咆哮した。

あんな独特の甲高い咆哮は産まれて初めて聞いた……だが、タイミングと位置関係、距離を見た私の頭は彼の意図をしつかりと認識し、ブレスを弾丸状にしてアンジヤナフの足元へ数発ほど撃ち込む。

込められたエネルギーは小規模ながら大地を吹き飛ばし、地脈エネルギーの流れが一時的に乱れてアンジヤナフを容赦なく襲い……周囲もろとも爆散させる。

僅かとはいえ……抉れた地面に足を取られてバランスを失つたアンジヤナフは盛大にすつ転び、銀の龍の眼前で無防備な姿を晒す。
『喰らいなッ！ 破壊光線!!』
（ホントロングレーザー）

若干中二病的な雰囲気のする名と共に、銀の龍から紅い閃光が放たれる。

それは瞬く間にアンジヤナフの身体を包み込み、その生命エネルギーを容赦なく根刮ぎ搔つ攫っていく……

その威力もさる事ながら、私が紅い閃光から感じたのは……言い表せない奇妙なエネルギーの流れであつた。

全てが收まり、倒れ伏すアンジヤナフだつたもの……
遺体

もう生命の鼓動も、血と一緒に流れ出るエネルギーすらも全く感じられない……まるで、あの紅い閃光が根刮ぎアンジヤナフからエネルギーを奪い去つたかの様だつた。

『……倒した、のですか？』

『そう……だな。獰猛化の証拠も消えてるし、問題はないハズ……』

獰猛化……またしても奇妙な単語だ。

そして私よりも大きい、この奇妙過ぎる存在……たぶん古龍だと思われる彼。その彼に色々と質問を投げかけて、この溢れ出る疑問の渦を解消したかつたのだが

……レクス達の到着によつてその機会はしばらくお預けとなつてしまつたのであつた。

閑話：天彗龍（セツラ）と冥灯龍（シオン）

不思議な銀色の龍を、アステラへと招き入れたまでは良かつた……が、私とはまた違う未知の存在の出現に研究者達はどよめき、我先に『研究の為』と称して見るからに不_良_識な道具を持ち出し突撃しようと躍起になる。

レクスや他のハンター達が、暴走する研究者達の突撃を何とか防ぐ中、総司令やソーダマスター『ヤマト』さん達は協議を重ねていた。

「あの龍、やはり古龍としか思えんな……そうでなければ説明も付かん」

確かに、今までに出逢つた古龍達もそれぞれが非常識をその身で体現しており、ヒトなど足元にも及ばない程の生命力と戦闘力を兼ね備え……更に高度な知性を併せ持つていた。

彼もまた、普通という枠に収まらない……突出した能力を持つていてるに違いない……大半の人達は未知の龍の持つ力に、ある種の恐れを抱いているのだろう。

『何か……ありましたか？』

銀の龍が何だか悩ましい雰囲気を出していたので、私は思いきつて声を掛けた。
気付いて振り向いた彼……今度はマジマジと私の姿を見ている、そんなに珍しいもの
なんてないのに……それとも何か吟味されているのかな？

『そう言えば自己紹介がまだだったな、俺は…………セツラだ』

たっぷり1分以上はあろうかという溜めの後に、彼は自分の名を告げた。

可能性はあまり無いだろうけど忘れてた、のかもしない……もしくは今考えた……
とか？

とりあえず、名前としてはなかなか良い響きだったので素直に誉める。

彼は『ホントに良い名前を貰つたもんだよ』と、懐かしさを思い出しているようだつ
た……

『あく、そんで……ゼノさんの事は何て呼べば…………あつ』

『……ゼノさん？』

その直後、彼の顔にコミカルな変化が起きた……私もゼノさん、とか呼ばれたの初め
てだわ。

基本的に古龍同士は互いの種族名をフルネームで呼び合う事が多い。
ただし、スイレンやマサトさん達の様な固有名持ちが相手だと、だいたいは固有名で呼ぶ。

彼……セツラさんの、種族の名を略した呼び方は何というか……新鮮だつた。

でも彼は、何か禁忌でも犯したかの様な反応になり『ナシナシ！ 今の忘れて！』と
リアクション付きで誤魔化そうと必死だつた……ホント、どうしたんでしようかね。

『……落ち着きましたか？』

あまりに必死なジエスチャー込みの全力否定だったので、私は心の中だけに留めて置く事にした……

『すまない、変な姿を見せてしまつたな……』

うん、まあ……必死こいて訂正しようとしたのは分かつたよ。

……別に否定しなくても良かつたんだけどね？（～・ゆ・）

その後、私も自身の……『シオン』の名を伝え、かねてからの疑問を私は彼に問う。

『アナタは……古龍、なのですか？』

彼がどの様な種族なのか……純粹な興味もある、だがそれ以外にも『知つておかなければならぬ』……そんな予感がしていた。

そして彼の返答は、ある意味予想外であつた。

『そ…………だな。

……パ
天彗龍^{バルフアルク}

……それが俺の、「二つ名」みたいなものだ』

初めて聞く「天彗龍」という種族名……後で龍脈図書館^{ほんじだな}で調べるとして、セツラさんは更に興味深い事を教えてくれた。

『…………まあ、確認される事そのものが滅多に無い種族なんでな』

確認される事例が極端に少ない存在……となると、伝承や伝説で語り継がれている様な種族なのかもしれない。

確かに、文献を漁つていた時にそんな事が書かれた物は幾つもあつた……「大海龍^{バルデウス}」、
「浮岳龍^{ヤマツカミ}」、「幻獣^{キリ}」、「黒龍^{ミラボレアス}」、「蛇王龍^{ダラ・アマデュラ}」、「輝界龍^{ゼルレウス}」など、伝承や記録は数あれど……実在が噂程度しか無かつた存在は数多い……彼の種族も、そんなタイプという事なのだろう。

『……そう言えば、君が会つた事のある古龍はどれくらいなんだ?』

彼の質問に、私は過去の出逢いを思い出す……

初めて会つたのは、陸珊瑚の台地で興味を持たれ……万能会話法「龍の言靈」を教わつた「涙龍」^{ネロミエール}のスイレンだ。

彼女には度々お世話になつたし、今でも私を娘のように気に掛けてくれている。

次に会つたのは……女性のハンターを3人も連れ、同じ転生古龍として共闘もした「風翔龍」^{クシャルダオラ}のマサトさん……彼と出会わなかつたら、私は転生古龍と自覚すら出来なかつたかもしぬれない……

3体目は変わり者、「アルハザク」のネメシスくん。

彼は……何だろうね? 上手く表現できなideど、ヒトと仲良くは出来そだつた

……

最後は「冰龍」^{イヴエルカーナ}……マリナお姉さま。

最初は近寄り難い雰囲気だつたけど、あの天然っぷりは意外だつたし、私は彼女を「お姉さま」と呼んでいる……密かに彼女は、私の憧れだ。

4体の先輩古龍との出会いを彼に教えると、彼は「ふむ……」と少し思案していた。

『ネロにハザク、イヴエル、そんでクシャルさんか……』

彼の口から出たのはまた未知の単語……時折出てくるこの単語は、彼によると『渾名^{アダナ}』

らしい……でも、誰が付けたのかは聞けなかつた。

「シオン、ココだつたか……んで、お前さんが一緒に戦つてくれた古龍か？」

『おう、俺はセツラだ。よろしく』

レクスが私を見つけて声を掛けてきた、当然隣にセツラが居るので彼にも声を掛けるし、セツラさんの返答にも普通に返している。

以前のマサトさんの一件があるので、もうバンさんやレクス達は、古龍が普通に人語で話しても驚かなくなつていてる……もしかしたら、他の古龍も私が絡むと喋れる様になるとか思われてるのかもしれない。

いや、セツラさんは初対面の時点では話してますから……

突然、セツラさんが翼……翼脚を動かし始める。

ガシユンガシユン、と金属音に似た独特な音がアステラに響く……耳慣れない音に、バンさんやヤマトさんまで集まってきた。

『……つて、龍氣不足か』

え？ 龍氣つて……地脈エネルギーから抽出する古龍の特殊能力の源……だつたよね？

私は彼の口から発した言葉に、違和感を感じていた……どうも、ニュアンスというか

……似て非なるモノ的な感じがしたからだ。

『……少し待つててくれ、龍氣を補充するからよ』

そう言つて彼は四肢を踏ん張り、翼脚を翼の様に広げる……まるで今から飛び立とうという風なポーズだが、その四肢は大地をしつかりと掴み……まるで上昇気流に逆らうかの様にしがみ付いていた。

『百聞は一見に如かず……だつたかな、とにかく見てな』

彼はそう言うと、深呼吸の様に息を吸い込み始めた……

キイイイイイイイイイイ……!!

その直後から響き始めたのは、形容し難い程の凄まじく甲高い鳴き声の如き呼吸音

……

同時に私が見たのは……呼吸と共に吸い込まれていく大氣のエネルギーと、セツラさんの胸……甲殻の隙間に覗く赤い発光、そして翼脚の先端から体外へと漏れ出ている赤い光だった。

彼はある程度空氣を取り込んだあと、力を抜き体勢を元に戻した……先程まで赤い光を発していた胸部の甲殻も、今は元通りに戻っている。

『……今のは、何なのですか？』

『ん？　ああ、そういうえば龍氣に関して説明してなかつたな』

彼はそう言うと私達へ龍氣について説明してくれた……

私の使う地脈エネルギーから抽出した龍氣と、バルファルクが操る龍氣は完全に別モノらしい……なんでも、『龍氣』とはバルファルクが体内で生成するエネルギー物質であり、極めて強力な龍属性を帶びているとの事……あの奇妙な気配の原因もそれだと仮定すると、確かに納得がいく。

「つまり、キミはその龍氣が力の源なのかね？」

研究者の一人がセツラへ問いかけ、セツラは肯定の意を示す領きをする。

未だ発見されていなかつた物質モードと聞き、研究者たちは一様にざわめき、盛り上がつた
……しかし。

『……だが、この龍氣は俺バルファルクのオリジナルなんだ……それが他の奴にとつては脅威にもなる』

セツラは溜め息を一つした後、とある古い伝承について語り始めた……それは『赤い彗星』の伝承……その彗星が現れた時の詳細な情報だった。

1000年に一度、赤く光る星が空を駆ける時……一つの予言あり。

それは決して抗えぬ運命のあかし、日ならず大地を絶望に染め上げる凶兆……
絶望は千変万化の大翼を持つ、神速の龍となつて人々の前に降り立たん。

『……とまあ、そういうことだ』

セツラは伝承を語り終えると、突然軽く首を回し四肢を一つずつ伸ばしたり縮めたりするなど、まるで人間が行う“準備運動”的な行為をし始めたのだ。

『…………何処に行くのですか？』

私はセツラへ問う……レクスや大団長らも問おうとした質問を敢えて私がしたのは理由があつた。

それは……

「おいおい…………なんて殺氣だ」

グラントさんが冗談抜きで言うほどの凄まじい殺気が、アステラ中へ流れ込んで来ているのだ……それはちょうど、セツラさんが準備体操を始めた直後から。

『うん、ここからだとだいぶ奥っぽいな。

あんのゴーヤ野郎…………よりもよつてテーマかよ』

小言のような声が聞こえたが、聞き取り難かつたからスルーするとして……セツラさんは準備運動を終えると、アステラの出口へと向かい始める。

まさか、戦うというのか？　これだけの殺気を持つ存在に……

「オイ、お前……奴と戦いに行くのか？」

レクスが驚愕の声色で彼へ声を掛けた……セツラは当然だと言わんばかりに頷くと、翼脚を広げ姿勢を屈める。

翼脚の後ろにある六つの穴からは赤い光が漏れ出しており、もう飛ぶ準備は出来ていた

……

『……私も、行きます……！』

「シオン…………お前まで?!」

勿論、下手をすれば逆に彼の足手まといだ……でも、私だつて古龍の端くれ。

自身の力の制御もだいぶ上手くなつたと自負している。

……それに、プレスでなら彼の援護くらいはできるハズだ。

・・・

セツラさんは私の同行に了承してくれた……

レクスやアステラ常駐のハンター達も行くつもりだつたが、セツラさんは『來るのは構ねえが……自己責任だ、下手すりや死ぬからな』と釘を刺していた。

でも、レクスだけは間違ひなく来る……あの人があの人が私を放つて置かないのはいつもの事だから。

『ただ、相手が相手だからなあ……』

セツラさんは道すがら、この濃密な殺氣を放つ相手の正体を教えてくれた……

『この殺氣を放つてるのはイビルジョー……その獵^{どうもう}猛化個体だ』

その名を聞いて私はかつての戦いを思い出す……私とマサトさん、そしてレクス達ハンター4人の総当たりで何とか追い詰め、全員がボロボロになつてようやく倒せた……怒り喰らうイビルジョーとの決戦を。

『アーツのブレスは龍属性だ……と言つても、俺には耐性があるから、俺が前で戦う。シオンはゴーヤと一戦交えただけだろう？ そこでだ……』

彼からイビルジョー戦に関して気を付けるべきポイント……遠距離での基本的には立ち回りを教わりながら、古代樹の森の奥深くへと向かうのだつた。

閑話：獰猛化と呼ばれる脅威

異臭の漂う古代樹の森……本来ならあり得ないこの異臭は、所々に折り重なった大量の死体の山が、幾つも放置されている事によるものだ。

しかもその死体……ほとんどが原型を留めておらず、半分以上が欠損している。

『…………死臭が…………』

鼻が曲がりそう……死体が発する独特な匂いと血の匂い、そして龍属性のエネルギーの残滓が奇妙な反応を起こし、嗅いだ者の嗅覚に容赦なくダメージを与えてくる。

耐えられなくはない……のだが、嗅いでて気分が良い訳など無い……物凄く酷い匂いだ。

『あ～…………こりやゴーヤの特殊個体が獰猛化した線も考慮しなきやいけないかもな』

セツラさんが呟いた「獰猛化」^{どうもうか}という言葉……当然聞き慣れた筈もなく、鸚鵡返ししてしまった。

特殊個体というのも、チラリと聞き齧つた程度なので……どういう括りなのかも曖昧だ。

セツラさんは私の鸚鵡返しに一瞬キヨトンとしたが、気になつて事の事を理解したの

かすぐに説明をしてくれた……

特殊個体とは……通常種とは一線を画す強大な力を身に付けた存在で、一部は原種とは異なる能力に目覚めたり、外見から違いが見て取れる程変わってしまった個体を指すという……

例とするなら、マサトさんやネメシスくんが該当するらしく……ネメシスくんには「死を纏うヴァルハザク」という通り名があるのだとか。

通り名のイメージから推測すると、ダイヤモンド結晶で刃や鎧を生成し、攻防に活用するマサトさんは「刃耀を繰りしクシャルダオラ」という感じかな……？

『――つまり、老年のイビルジョーが、途轍もなくお腹が減つて暴走した個体……つて事ですか？』

『簡単に言えば、そうなるなん……ん？』

『……どうしたんです？』

理解が深まった所で、再び前を向くセツラさん……だがすぐに何かの気配を悟ったのか、前足を上げて止まる様に指示を出してきた。

戦闘という場面……私はまだまだ未熟者の域を出ない。年長者でもあり、経験も豊富であろう彼の指示に素直に従い、私は彼の脇へと寄つて屈む……。

私の身体の各所にあり、薄ぼんやりと光る幽幕が明滅する……龍属性の波動の残滓が、何処からか流れて来ている、その残滓に反応しているのだ。

『噂をすればなんとやら、か……やはり、特殊ゴーヤの�iode化個体……！』
気配を探り当てたのかセツラさんが呟く、この森の中で遠くの相手を認識できるセツラさんの能力には脱帽なのだ。

『兎に角急ぐぞ！ アイツをこのまま放つておいたら、この新大陸は確実に終わる！』
『は、はいっ！』

体格差の都合、私はセツラさんよりも歩幅が狭い……飛んでないのに速いセツラさんに付いて行くのがやっとだけど、彼は私の速度に合わせてくれていた。

『……そう言えば、なんで歴戦のイルジヨーだつて分かつたんですか？』

『バルファルクは高高度を飛行する古龍だつて話したよな？』

『え？ ええ、そうでしたね』

『だから、知的生物が最も判断の比重を置く、この視力を発達させたんだ……

より遠く、より高い所からでも……正確に獲物の位置や状態を、瞬時に把握する為にな』

なるほど……バルファルクは地上から見ても、「赤い彗星」にしか見えない程の高高度を高速飛行する古龍……

その極限環境下で獲物を探し、正確に捉え、仕留める為に発達した『尋常ならざる視力』。

……それが、バルファルクという古龍の基礎能力なのだ。

やがて私でも震えが来そうな程の、濃密な龍属性の波動が周囲を覆い尽くす……セツラさんは無言のまま、右の前足で森の奥を指した……

そこには、微動だにしないものの巨大な何かが佇んでいる……

(……アレが、獰猛化個体……！)

赤く光る虚ろな瞳、異常発達した後肢の筋肉、純粹な悪意にも似た……赤黒い異様なオーラを身に纏う、深緑の巨獸……

獰猛化・怒り喰らうイビルジョーが、ゆっくりと此方を睨み付け……私達を認識した直後、凄まじい咆哮を上げて突撃してきた。

『チツ、やつぱリミツターは外れてるか！』

『こっちに来ますよ?!』

戦闘力は高いものの、先手を打たれた今の状況で迎撃はもう間に合わない……左右に別れ離れる私とセツラさん。

通り過ぎた事に気付き、またゆっくりと振り向く獰猛ジョーの目は……簡潔に言つて「もう手遅れ」としか表現できないものだつた。

『……どうしますか？』

『とにかく——逃げるぞ、全力で走れッ!!』

飢餓の苦しみとも、獲物が逃げた悔しさとも取れる……凄まじい咆哮が背後から響く。

私は咆哮すらせす……ただ全速で走る、隣のセツラさんは『誰が待つかよ！　じやあな!!』と、咆哮と共に捨て台詞を吐きながら私と並走しつつ逃走した。

・・・

『シオン、こいつは長期戦になる……今のうちに休んどけ』

『そうですね……つ……アナタも、無理はなさらないで……』

『ああ、勿論だ』

息を整えつつ、獰猛ジヨーの気配を探る……セツラさんは頭をフル回転させ、対抗策を練つてているのだろう……息遣いに混じつて悪態を吐いている。

(あれだけ走つても離れた感じがしない……まだ近くに居るみたいな感覚……)

かつての黒鋼龍の時よりも、更に格上の濃密な気配……セツラさんが居なかつたら多分、私はもう奴の腹の中だろう。

そう思うとゾツとしてくる……

『……シオン、とんでもない大博打になるが……奴を倒す方法が、1つだけある』

『ほ、本当ですか……?!』

突然の言葉に一瞬耳を疑つたが……博打という言葉から、あまりやりたくない手段だと察してしまつ……だが、奴に勝てる手段を選べる状況ではない上、此方の体力も無尽蔵ではない。

セツラさんの表情と『本当に……博打だがな』という雰囲気に、私は気圧され息を飲む。

『……バルファルクとしての、本能を解放する……!』

恐れ見よ 奇しき赫耀の兎星を

星芒 大地を灰燼と為し

天上を裂いて 常闇を招かん

閑話：赫星、空を切り裂いて

バルファルクの本能……

そう聞いたのだが、私には何が何だかさっぱりだつた。

生き物には個々が生きる為に持つてゐる「本能」があるけど、セツナさんが口にした「本能」は、それとは決定的に違う……そんな気がしたのだ。

『んじや、一足先にドンパチやつてくるわ』

そう言い残して、セツラさんは森の奥へと消えていった。

一抹の不安は残るが、ほとんど戦闘経験の無い私が一緒に行つても足手まといだ……ならばせめて、彼の立てた作戦を成功させるしかない。

(その為にも、セツラさん……バルファルクについて、少しでも知つておかないと)

そう決めた私は、意識を集中……大地に流れる僅かなエネルギーの流れを辿り、大いなる力の流れ【龍脈】へとアクセスし、自身の固有能力として自覚した【ワールドライブラリ】龍脈図書館を使う。

この「ワールドライブライアリ龍脈図書館」は、私の種族「ゼノ・ジーヴァ」が持つ龍脈エネルギー操作能力の裏技みたいなもので、龍脈エネルギーの源泉に遺された「生命の記憶」……かつて何とかの誰かが経験した記憶を呼び出し、閲覧・把握する事を可能にする能力だ。

言つてしまえば、過去を知る能力とも呼べるし……断片化はしていても事実しかないんだから、誰かの死因やら、隠された真実を知る事も出来る……でも、ノーリスクとは行かず、過去を遡るほど精神力をゴリゴリ削られるし、より詳細な情報を知る為には深くアクセスする必要があるので、能力行使の最中は完全に無防備になつてしまふ。

だから、今はあまり深くは潜れないけど……とりあえず、バルファルクという種族について下調べをしなくては。

軽く下調べ、というハズだったのに……私はなんるものを見てしまつたのだろうか

『……天を貫く、銀翼の凶星……』

たつた数分の能力行使……だが、その間に私が閲覧したものは単なる情報ではなく……天彗龍バルファルクという種族が持つ記憶、バルファルクと戦つた数多のハンター達の記憶……そして、以前にアステラの老竜人達から教わつた『特殊個体』という枠に当て嵌まる存在……

奇しき赫妖のバルファルクの記憶……

(……これが過去に起きた事なら、セツラさんもいざれああなる……?)

奇しき赫妖のバルファルクの成り立ちもある時、頭に詰め込まれている……それは間違いくなく、長生きする古龍にとつて避けられない事……セツラさんはそれを意図的に起こそうとしているのではないか?

『……もしそうなら、私はどうすれば……?!』

「シオン、探したぞ?! 急に出ていくなんて……何があつたんだ?」

声を掛けてきたのはアステラで活動するハンターさん達だつた……どうやらさつきの咆哮やら戦闘の痕跡で異変を察知し、私が森へ行つた事を聞いて探し回つていたとの事。

『飢餓状態のイビルジョーです、アレが再びこの地に……。でも、銀翼の凶星……私の様に話の通じるバルファルクが奴の相手をしてて……』

飢餓ジョーとバルファルク……この2体が来ている事を聞き、ハンター達はざわつく。

飢餓ジョーは2回目だが、過去にアステラやセリエナを襲撃されて手痛い損害を被つた経験があるため、ハンター達の顔が露骨に歪む……だが、それに加えて新大陸には居なかつた筈の既存古龍種……しかも伝説に名を残す凶星が現れたとなると、驚くのも無理はない。

「イビルジョーに……銀翼の凶星……だと?!」

「何て事だ……」

私は彼等に、バルファルクの二つ名を伝えた事に少し後悔する……古龍種として有名であるバルファルクの二つ名【銀翼の凶星】、この名が示すのは違う事なき「凶兆」。

未知のモンスターと生死を掛けて戦う事も多いハンター達は、殊更^{げん}驗担ぎなど「運」や「吉凶」に関わる事に敏感だ……その中でも最悪の部類に入る事態に、ハンター達は動搖を隠せない。だが……

「落ち着け！　ココで狼狽えても何も変わらん！」

後を追つて来たのか、バンさんが小飛竜で駆け付け、場の雰囲気を一喝して納めた。

「シオン、そのバルファルクは敵では無いのだな？」

『……はい、少なくとも私と意志疎通が出来る内は……』

「……？ どういう事だ？」

含めていた疑問に気付き、バンさんは私に問い合わせてきた。

私はバルファルクの情報を検索した時に見せられた『奇しき赫妖のバルファルク』の事を伝える……同時に、セツラさん彼がそうなつた場合の危険性も……

「もう……そんな事が……」

『ですから、彼と意志疎通が出来ない場合は……倒すしかありません、ココの生態系の為にも』

マサトさんと同じ、転生古龍……奇跡にも等しいこの出会いを、ろくに何も出来ないまま涙で閉じたくない。私はずっとそう思っている……マサトさんの時も、ミラルダさんを失うかもしれない危機に、私は必死で抵抗した。

ちゃんと助かつたとは言え……あんな事は、あんな思いをするのは……二度とゴメンだ。

その時だつた……

私は遠目に、天へと昇る……赫き星の輝きを見つけ、焦燥に駆られながら彼の下へと飛び出すのだつた。

……天彗龍バルファルクの出現に、新大陸の生き物達は少なからず影響を受けていた。

あるものは天を薙いだ赫き恐怖に恐れ、泥底に沈み……

あるものはその轟音に恐怖を搔き立てられ、狂つた様に走り続ける……
また、あるものは……騒ぎの元凶を断とうと爪を研ぎ……

あるものは野次馬の如く、空から地を見下ろしていた。

『……全く、あの子を見ていると飽きぬのう……』

雷鳴響く、ほの暗い珊瑚の山から……彼の龍は、ヒトと共に苦難に立ち向かう、銀色の子龍を見つめているのだつた。